

N I C H E 爰

工学院大学建築学科同窓会誌

vol.22 1998

爰 [がん] 1. 仏像を納める房子。 2. 棺 (ひつぎ)。——広辞苑
ニッヂ [Nische] (独 Nische) 爰 (がん) とも書かれる。壁体内に掘られ、多く
平面半円、半円筒状で、上に1/4半球をいただく凹所。彫像などを置く。——共
立・建築辞典
niche (nich), n. (Fr. niche, from L. *nidus* a nest) 1. a recess or hollow in a wall usu-
ally intended for a statue, bust or vase. 2. a place or position particularly suitable
for the person or thing in it. —Webster's New Twentieth Century Dictionary.

okamura



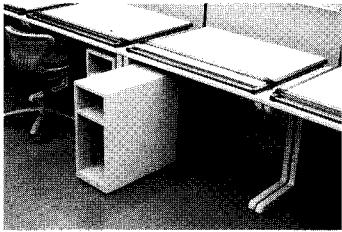
工学院大学 建築都市デザイン学科 設計室

快適な教育施設環境を新学科のためにご提案しました。

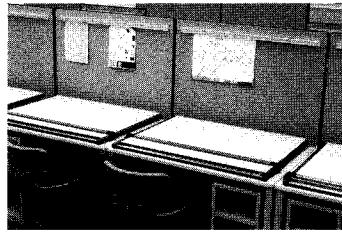
昇降式パネル付製図台デスク

※ 工学院大学建築学科と
共同で特許出願中

■ひとつのデスクに3種類の使い勝手を実現しました。



平行定規、ワゴンを備え、講義を受けたり、製図作業を行なうといった標準的な使い方です。



ピンナップ機能を備えた昇降式パネルを引き出すことで、前面に資料等を見ながら集中した製図作業が可能です。



昇降式パネルを製図天板上に設置すれば、カッティングボード台になり、模型制作作業を快適にサポートします。

よい品は結局おトクです

オカムラ

株式会社 岡村製作所

お問い合わせ・ご相談は【お客様サービスセンター】へ… フリー 0120-81-9060 月曜～金曜(祝祭日を除く) AM9:00～PM6:00

◎インターネットでオカムラの最新情報をご覧下さい。【OKAMURA TODAY】 <http://okamura.topica.ne.jp/>

発行 平成9年11月1日
編集・発行 工学院大学建築学科同窓会
東京都新宿区西新宿1-24-2
03.3342.1211 内線2025
編集協力 伊藤真人
レイアウト・編集補助 SCRIPTORIUM
印刷 弘和印刷株式会社

NICHE 龕

工学院大学建築学科同窓会誌 vol.22 1998

CONTENTS

02 「工学院大学校友会VISAカード」ご利用(切替え)のお願い

03 『NICHE』vol.22発刊にあたって

高木雅行(建築学科同窓会会長)

04 TOPICS

臨時総会にて年会費の自動払い込みが承認される

「工学院大学校友会VISAカード」による自動払い込みスタート

1997年大交流懇親会開かれる

第13回校友会全国大会 島根県松江市で開催

波多江先生、勲四等旭日章を受勲

初田先生、第1回「建築史学会賞」を受賞

八王子校舎再整備計画すすむ

山下司(建築学科教授)

08 大学院の明日

ケース1 YUNOTU PROJECT

上村常夫さん

ケース2 上海市北外灘都市デザイン国際コンペ

曹煒さん

13 同窓生を訪ねて

石見銀山を世界遺産に——大田市大森銀山伝統的建造物の保存・修理に携わって10年

渡部孝幸さんに聞く

19 同窓生からの便り

阪神大震災は過去のもの?

黒岩弘一

「ロングライフビル化」への取組み

関五郎

「家づくりの会」を通しての社会活動

十文字豊

母校の施設計画に携わって

濱田昭夫

子育て後に社会復帰

桜井紀子

でも、私は大工です

江森輝雄

26 建築学科の新しい風に聞く——AAスクール、建築教育、建築設計、そして工学院大学

トム・ヘネガン(特別専任教授) 十田島則行(非常勤講師)

30 また逢う日まで

山崎弘(建築学科教授)

荻原正三(建築学科教授)

廣部達也(建築学科教授)

44 建築学科同窓会役員・校友会役員・建築学科同窓会運営委員名簿

46 第32期事業報告・一般会計報告・運用財産目録/第33期事業計画・一般会計予算

49 建築学科同窓会運営・活動費および同窓会誌『NICHE』に関する寄附金のお願い

50 贊助金者名簿

52 工学院大学校友会会員名簿CD-ROMのご紹介

53 求人情報 再就職情報 応援求む

64 平成9年度卒業生名簿

72 建築学科卒業生居住地分布図

「工学院大学校友会VISAカード」ご利用（切替え）のお願い

建築学科の卒業生の皆様へ

拝啓 時下益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

本年から、同窓会費は財源確保の点から、年会費とすることになりました。しかし、入金手続きの手間などを考えますと各年の徴収は困難が伴います。そこで校友会では「工学院大学校友会VISAカード」を発行し、同窓会年会費の自動引き落としなど手続きの簡素化をはかるとともに、今後の同窓会を維持し発展させていくための財源確保と、合わせて同カードの利用による会員に対する新たな特典を検討しました。

このカードは、本校の卒業生を対象としましたオリジナルカードで、平成10年現在入会対象者は建築学科のみで約14,000名近くにおよんでおります。卒業後の皆様と母校を結ぶ絆として活用していきたいと考えておりますので、この度のご案内の機会には是非ご加入頂けますようにお願い申し上げます。なお、すでにお持ちのVISAカードから「工学院大学校友会VISAカード」への切替えは、取扱銀行にて簡単にできます。

敬具

1998年10月

工学院大学建築学科同窓会 会長 高木雅行
副会長 望月大介
〃 谷口宗彥
〃 亀山幸生
〃 佐藤保廣

校友会カードとしてのオリジナル特典

- ◆一級建築士受験講座など受講割引特典が希望者に与えられます(希望者に直接ご連絡の予定です)。
- ◆同窓会は様々な専門情報を含む機関誌『NICHE』を、毎年自動的にお届けします。専門的な業務に携わるOBが、どんな仕事に対面し、どんな問題に直面しているか。皆様の意見をもとに、校友相互の情報交換の場を提供します。
- ◆校友会名簿CD-ROM(約10万人の校友の連絡先を収録)の割引購入(定価3,000円のところ、カード会員は割引の1,500円にて頒布いたします)。毎年バージョンアップ)ができます。学年別、研究室別はもとより全学科OBを含む、会社別、地域別検索可能。同窓生同志のネットワークに役立ちます。
- ◆引越しの際の同窓会名簿の住所移動手続きが不要となります。

從来からのVISAカードの特典

- ◆一般的な各種特典のサービス 市外通話料金割引: 16~20%、国際電話通話: 最大8%割引。
プライムクラブ: 国内5万店・海外1,500店で最大20%優待割引。ハウステンボスなど国内有名レジャー施設の割引。国内・海外キャッシュレスサービス。国内ゴルフエントリーサービス。お買物安心保険など。
- ◆パソコン通信、インターネット使用料金支払いなどが簡単にできます。

その他次のような各種サービスを検討中です

- ◇大学生協の利用(郵送サービスなどで全国的な利用ができるように検討しています)。
- ◇大学図書館・食堂・会議室の利用。
- ◇全国的な宿泊施設利用割引サービス。
- ◇弁護士、税理士、司法書士、公認会計士などによる、各種問題の解決や、事業独立、節税対策などの専門的スタッフのインフォメーションサービス。
- ◇英語などの語学翻訳等のインフォメーションサービス。
- ◇アルバイトスタッフの紹介(首都圏エリア対応)など、サポート業務の紹介。
- ◇大学関係者による海外旅行研修などの情報案内(専門的、経済的内容)。
- ◇在校生の研究論文梗概集、優秀作品集の配布(希望者に有料)。

年会費のお支払いは、割引料金をご利用ください。

◆従来通りの送金方法(振込など)は今年から年会費4,000円です。しかし、事務手続簡略化のため「工学院大学校友会VISAカード」利用による年会費の自動引き落としは、割引料金3,000円となります。このカードの会員は同窓会費を年1回自動引き落としいたします。

□お問い合わせ先: 工学院大学校友会

東京都新宿区西新宿1-24-2 〒163-8677

03-3342-2064

卒業生の支援で母校の発展を！

高木雅行（建築学科同窓会会長）



建築学科同窓会の皆さんには、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

ごらんの通り今回『NICHE』は大きく変わりました。サイズはA4にしました。見て美しいカラーのページを増やし、多くの情報が掲載できるように全体のページ数も増やしました。そして視力が弱くなった先輩方にも読みやすいように少し字は大きくしました。こうした改善は、これまでのような同窓会からの一方通行の情報提供ではなく卒業生の皆さんに作品の発表の場として、今後『NICHE』をどんどん利用していただけるようにとの観点からでもあります。

さらに今回は、現在の経済状況をふまえ、緊急特集として会員の求人／再就職情報の掲載もいたしました。

これからも同窓会は、この『NICHE』を会員の皆さんのがさまざまな要望にお応えできる、生きた情報誌として発展させてゆきます。

さて、同窓会活動から得られる良い点には、どのようなことがあるでしょうか、

第一に、母校の発展の情報を知ることにより、私たち卒業生として誇りに思えること。

第二に、卒業生の相互のネットワークが強化され、スムーズな情報交換が行われること。

第三に、母校とのネットワークが強化され、生涯学習のようなさまざまな最新教育、研究の機会や情報を得られること。

第四に、通常の社会生活のなかではなかなか得ることのできない、金銭的な利害関係のない本当の友好の集まりに参加できること。

第五に、世代を超えてのネットワークを得られること。同窓会では新卒業生から90代の先輩まで、世代を超えての交流が行われています。

このような点をさらに発展させるため、同窓会は以下のようにしたいと考えております。

■母校の発展に寄与する先生方の国際的な研究や作品、国際社会での活躍に援助をしたい。

■後輩が勉強したいときに学費を援助をしたい。

たとえば、先輩方から同窓会奨学金や留学奨学金などのかたちで後輩達が支援を受け、将来力を付けて社会で活躍するならば結果的に母校の知名度をさらに上げることになります。

■校舎や機器などの教育環境に援助をしたい。

キャンパス、施設等の改善や、さまざまな新しい教育システムの採用により、母校のイメージアップ（スマートな都市型大学：STEC新宿テクノキャンパス）

■卒業生の社会的活躍の支援をしたい。

情報誌としての『NICHE』の発刊回数を増やし、内容をもっと充実させる事により卒業生相互のネットワークの強化をはかりたいと考えております。

このような良い点を実現し、皆さんにさまざまなサービスをご提供するためには、財源をどうしても確保しなければなりません。

しかし、現実はそのための資金が決定的に不足しております。これまで同窓会は正会員費（現在1万円）で運営して参りました。現在これを原資とし年に2回、郵送による情報の提供を行っております。しかしこれでは、本来目標とする活動には遠く及ばず、皆さんにこの『NICHE』だけできさえ、長い年月にわたり、編集発行し、郵送し続けることは不可能です。

財源の基本は、卒業生の皆さんのが真心の年会費で成り立ちます。これが十分に寄せられるならば、さらに活性化した会の活動を行うことが可能となります。

このことに向けて今年より、同窓会は校友会提携カード「社団法人 工学院大学校友会VISAカード」を利用した会費自動納入を実施いたします。

このカードにはさまざまなメリットが用意されております（本誌記事参照）。また、その利用金額に応じてカード会社より工学院大学校友会に売り上げの一部が割り戻し金として支払われ母校の発展に利用されます。どうか皆さん、このカードを利用した会費納入にご協力いただき、お手元のカードを切り替えてくださるようお願いいたします。さらに、社会的に活躍された先輩方からは年会費のみではなく、たくさんの寄付を同窓会にお送りいただけるよう重ねてお願いいたします。

臨時総会にて年会費の自動払い込みが承認される

建築学科同窓会では、1997年12月6日に合同懇親会に先立ち、新宿校舎高層棟アトリウムにおいて、本会の財政基盤である会費の充実を目的とした第32期建築学科同窓会臨時総会を開催した。議題は、(1)新役員の承認 (2)会費改定について (3)会則の改定について (4)同窓会誌の発送費および発送先について。

当日は懇親会の同時開催のため総会としてはかつてない248名の出席で行われた。

まず新役員案が発表され、3期目となる会長高木雅行をはじめ新役員が承認された。母校建築学科との強い連繋を築くため新たに望月大介教授が再任の谷口宗彦教授とともに副会長に就任した(本誌p.38に新役員名簿掲載)。

引き続き、従来の同窓会誌の編集・発送費は年会費と改め、納入方法として工学院大学校友会VISAカードによる自動払い込みを実行するとした。会費改正案が承認されたことにより本会の活動の活性化に欠かせない事業資金の拡充のスタートが切られた。また、各世代の会員の代弁者である運営委員の選出区分に、従来含まれていなかった大学院・大学で研究室に所属していない者を加え役員選出の公平化がよりいっそう進められた。事業費拡充のスタートが切られたことに伴い、会員へのサービスの柱である同窓会誌『NICHE』の内容をより充実したものとするためと、卒業生の就職先や連絡先のより詳しい情報を掲載するため、『NICHE』は10月に発行し懇親会案内を兼ねて発送することとした。また、発送先については会費未納の方を含む全員に一方通行の情報提供を続けることにより、大事な事業費を通信費として消費し尽くしてしまったため、移行期間をおいて年会費を納めた方のみに発送することとした。このことにより年会費納入の会員の方にはより充実した内容の情報を高密度に提供してゆける方向付けがなされた。終了後、本年着工予定の八

王子セミナーハウス松風舎の学生コンペの入賞者へ同窓会より皆さんの会費の一部が1等10万円×1名、2等5万円×2名、3等3万円×4名の副賞として贈られた。

「工学院大学校友会VISAカード」による自動払い込みスタート

臨時総会の決定を受け会費自動払い込みへ向けての、第33期建築学科同窓会通常総会が1998年5月31日開催されました。議題は、(1)第32期事業報告・会計報告 (2)会計監査報告 (3)第33期事業計画・予算案について (4)会費徴収方法の説明と会則の変更について。

同窓会年会費の支払い方法が従来の郵便振り込みによる方法から「工学院大学校友会VISAカード」による自動払い込みによる方法を主としました。自動払い込みとなることで、従来会計担当の卒業生や、事務局を担当していただく研究室の学生の方の膨大な時間を費やしていた会費の整理や納入者の住所確認の事務手續が合理化されるため、年会費金額を郵便振り込みの場合4,000円であったものを、自動払い込みでは3,000円と割引することとしました。かさねてカード化により実行予定の様々な特典やサービスが発表されました。今後の年会費の決定方法については、さらに運営委員会で討議の上総会で報告することとしました。

1997年大交流懇親会開かれ

1997年12月6日、大交流懇親会が臨時総会に続き開催されました。この経済状況にもかかわらず248名と多数のかたが参加され、屋台村には各研究室からさまざまなアイデア(?)がいかされた出店が集合し、不況を吹き飛ばすにぎわいでました。

会場では、波多江健郎名誉教授の叙勲が紹介され、OBに囲まれた元気なお姿がみられました。プロのジャズグループのショーステージに続いて行われた恒例の屋台大



多数のOBで賑わう1997年大交流懇親会屋台村。



屋台デザインよりネタの新鮮が勝り大賞を逃した「司寿司」(山下研究室)



今年は大賞をねらう「焼き鳥じゅんちゃん」(望月潤研究室)。味では1番人気だった。



屋台大賞を最後ジャンケンで勝ち取った「ショットバーミニマミ」(南迫研究室)。アルコールでOBの人気をつかんだ。

賞は、出席OBによる厳正な投票では決着がつかず、本学理事の内田盛也氏のジャッジのもと屋台店長(現役在校生)によるジャンケンで南迫研に栄冠がもたらせられました。引き続き初田研では先生の建築史学会賞受賞祝賀パーティー、波多江研では叙勲祝賀会、山下研では研究室30周年記念パーティー、また伊藤研、望月(大)研、南迫研もパーティーが開催されました。

第13回校友会全国大会 島根県松江市で開催

第13回工学院大学校友会全国大会が、島根県松江市で、1999年8月7日に開催されることになりました。校友会島根県支部は、会員数60人足らずの小さな支部ですが、島根大会を地方色豊かな催しとし、参加者すべてに新鮮な発見のある大会にしようと実行委員会で取り組んでいます。

古代、大陸と密接な関係にあった出雲地方はたくさんの神話を生み、その舞台となつた日本海や奥出雲の山々などは今でも変わらず豊かな自然に包まれています。大量の銅剣などの出土で、今年、国宝指定された荒神谷遺跡や加茂岩倉遺跡は、訪れる人に日本人のルーツを実感として偲ばせてくれますが、島根には古き良き日本の面影をとどめる町がいくつかあります。

大社町 大和朝廷への“国譲り”と引き替えに建立された巨大な出雲大社を中心に、中世から門前町として栄えてきた町。広い屋敷に土塀をめぐらせた神官の住んでいた社家屋敷の点在する町並みと、門前通りに連なる町並みとがあり、江戸から明治期にかけての伝統的な家屋も点在しています。出雲大社の門前には、出雲国造家の系譜とともに祭主をつとめてきた千家家と北島家とがあり、とりわけ石垣と板塀をめぐらした北島家と社家の土塀がひっそりと向かい合う真名井の町並みは、情緒的な風情を今に伝えています。

吉田村 日本のタタラ製鉄の起源は古く、古墳時代にまで遡ります。鉄製の鍬や鋤の出現は、当時、農作業を飛躍的に向上させたようです。タタラは江戸期に盛んになり、日本刀の玉鋼などもここでつくられました。斐伊川の上流・吉田村には野ダタラから進化した高殿タタラの日本最古のものが完全な姿で残され、炭焼き小屋や伝承館では当時の人々の生活の様子をうかがい知ることができます。安来市の「和銅記念館」と合わせて見ると、日本の鉄の歴史を鮮明に理解することができます。

松江市 松江は豊穣の湖・宍道湖の畔に位

置し、市内には松江城を中心に堀川がめぐり、水の都と詠われる町です。不昧公こと松平7代藩主が育てた文化、芸術は今でも明々庵や菅田庵などの茶室や武家屋敷などに色濃く残されています。また、日本最古の高床式大社造りの神魂神社(国宝)は出雲大社の約1/2のスケールですが、ここでは出雲大社よりも古い簡素な造りを間近に見ることができ、感動的です。

石見銀山・大森地区 石見銀山は鎌倉時代に発見されてから1923年(大正12年)の閉山までの700年、銀の採掘に栄えた町です。最盛期には寺院100カ寺を数え、京や堺をしのぐ賑わいであったといいます。マルコ・ポーロは石見銀山を西洋に紹介し、徳川家康は幕府の財源に直轄領として独占し、銀貿易などで栄えました。歴史の一時期、日本経済の大黒柱として支えてきた町です。石見銀山・大森地区は伝統的建造物保存地区に指定され、代官所や製錬所、伝統的民家などを中心に町並み整備事業に取り組み、今はひっそりと生きずく山峡の町に栄枯盛衰を伝えています(詳細は本号の「同窓生を訪ねて——石見銀山を世界遺産に」を参照)。

島根の現代建築 出雲大社庁の舎、島根県立図書館、田部美術館など、菊竹清訓氏の初期代表作が60~70年代に建てられ、90年代に入ってからはジャーナリストイックな高松伸氏の作品群のみならず、平田市立図書館(寺本建築都市研究所)、出雲ドーム(KAJIMA DESIGN)、和銅博物館(宮脇檀建築研究室)、八束町役場ナック建築事務所)、来待ストーンギャラリー(黒川雅之建築事務所)、カントリーバホール(新居千秋都市建築設計)、森鷗外記念館(宮本忠長建築事務所)など多くの秀作が各地に建設されました。また1999年には、出雲市地域交流センター(シーラカンス)や、大社町文化センター(伊東豊雄建築事務所)などが竣工します。

建築見学バスツアー これら島根の伝統文化、町並み、現代建築をつぶさに見て回るバスツアーを、全国大会(島根大会)に合わ

せて、8月6日に企画します。当日は、釣りやゴルフなどの共催イベントも企画されていますが、『NICHE』の読者には通常は見学のできない文化財指定の民家や、校友会会員の力作などを加えたバスツアーへの参加をお勧めします。ふるってご応募、また見学地のリクエストなどをお寄せください。

●大会実行委員会事務局

環境計画建築研究所

松江市浜佐田町982-1 〒690-0855

担当／矢田和弘

tel., fax. : (0853)23-5503

●建築ツアー担当：江角俊則

(有)江角建築事務所

出雲市今市町北本町5-4-17 〒693-0002

tel.(0853)23-5503/fax.(0853)23-5504

(記：江角俊則／1981年卒業)

波多江先生、勲四等旭日章を受勲

工学院大学名誉教授の波多江健郎先生が、今秋の叙勲において、「勲四等旭日章」を受勲されました。心より、お喜び申しあげます。

波多江先生は、平成3年に定年退職されるまでの33年間、常に大学の教育・研究と社会との関連を重視され、その理想的な連携に努力されてきました。このたびの受勲は、そのご努力が高く評価されたのだと思います。本当におめでとうございました。

初田先生、第1回「建築史学会賞」を受賞

初田亨先生が、第一回の「建築史学会賞」を受賞されました。対象は「東京の繁華街を中心とした近代建築史・都市史に関する一連の研究」。

受賞の理由に「日本の近世から近代への変化を総合的に語ることを可能にし、建築史学に新しい展望を開いた」とあります。日本の近代建築史には東大に“F”という怪物がありますが、初田先生、そんな怪物に負けないで、これからも頑張って下さい。

八王子校舎再整備計画すすむ

山下司(建築学科教授)

八王子市第一号の郊外型キャンパスとして本学の八王子校舎が設置されたのが1963年(昭和38年)であった。最初は体育館、プレハブ校舎、学寮、食堂棟であり、続いて1号館が建設された。当時のプレハブ校舎で学び、いろいろと不便な思いをされた卒業生も多いことと思う。

その後、2号館、4号館、高校などが建設され、何とかキャンパスらしい形を整えてきた。1979年(昭和54年)に図書館が武藤章先生の設計によって完成し、文字通り、八王子キャンパスのコア施設として、やっと建築として誇れる空間ができあがった。それまでの建築は、既存業者の設計・施工であって、文化的香りのする建物ではなかったと言つていいであろう。

大学のキャンパスは先進国どの大学でもその国の、あるいはその地域の文化センターであり、最高学府の学びの場として知的で、かつ芸術的環境をつくり出している。大学のキャンパスはその大学の顔であり、その歴史と性格をも語っていると言える。オックスフォード、ケンブリッジ、イエール大学などの例をあげるまでもなく、優れた大学は例外なくその時代を代表する建築群によって、すばらしい学びの空間と環境をかたちづくり、有為の人材を世に送ってきた。本学も今後キャンパスの整備に当たってこのように意識を深めてもらいたい。

1986年(昭和61年)建築製図室を含む3号館をはじめとして武藤先生の監修によって5号館群が竣工し、大学キャンパスとしての形態が整ってきた。とは言っても未だ教室は不足気味で研究室、研究設備も不十分であり、初期に建設された建物は老朽化しつつある。新宿キャンパス再開発と八王子5号館群の完成は本学の歴史の中で特筆すべきことであったが、建物は時代とともに老朽化し、求められている機能も変化して



ハイテク・リサーチ・センターとしての機能を有する「アドバンスト・マテリアル・センター」(本誌「同窓生からの便り」参照)。

くる。常に再整備、再開発の意識を持ち続けねばならない。

新宿キャンパス高層棟が1989年に完成して来年で10年目を迎える。ここで八王子キャンパスの再整備を図ることは当然の成りゆきである。1996年7月頃から八王子整備マスタープランの検討が開始され、学内各部署からの要望事項が提出された。1997年に八王子整備マスタープラン作成委員会が設置され、討議を経て、図示のようなゾーニングと各施設の位置が教授総会において承認された。続いて、次のような1~8までの八王子整備マスタープランについて、理事会および教授総会において合意された。

(1) 基本方針

◇「北西部幹線道路」、モノレールは実現が相当将来となるため敷地北側からのアクセスは考慮しない。

◇将来の新学部の可能性をマスタープランに残しておく。

◇老朽化している施設について順次耐震診断を行う。

(2) 教室棟(教室 情報処理演習室 学生ラウンジ)

◇教室棟は3,000m²とし、1号館と既存体育

館の間の中庭に建設する(この位置であれば既存施設を撤去せずに建設できる)。

◇教室棟には教室、情報処理演習室、学生ラウンジを設ける。

◇教室は80~90人用5室程度とする。

◇情報処理演習室は、60人用2室、80人用2室、準備室を4室とする。

(3) 松風舎・セミナーハウス

◇既存松風舎とセミナーハウス(旧野口邸)を取り壊し松風舎の機能を併せ持つセミナーハウスを建設する。工事費は大学後援会寄付金と学校法人の資金を充当する。

◇セミナーハウスの設計は学生、大学院生を対象とした設計競技を基本とする。募集要項を夏休み前に発表し、夏休み明けを閉めきりとする方針で検討する。

(4) 体育館

◇体育館は学生部室棟の東側に隣接させて建設する。グラウンドなどの拡張整備も考慮する。

(5) 文部省「ハイテク・リサーチ・センター整備構想」

◇ハイテク・リサーチ・センターに選定されたことにより、研究施設を総合工学研究棟後期工事として建設する。

(6) プレファブ校舎群の扱い

建 築 学 科 同 窓 会

T O P I C S

◇プレファブ校舎群は撤去して当面緑地とし将来対応スペースとする。

(7) その他

◇最新工作機械などを設置した工房的な小規模建物の設置を検討する。

(8) 日程

◇各施設共平成9年秋頃に実施設計を開始、平成10年度着工、平成12年3月完工を目指とする。

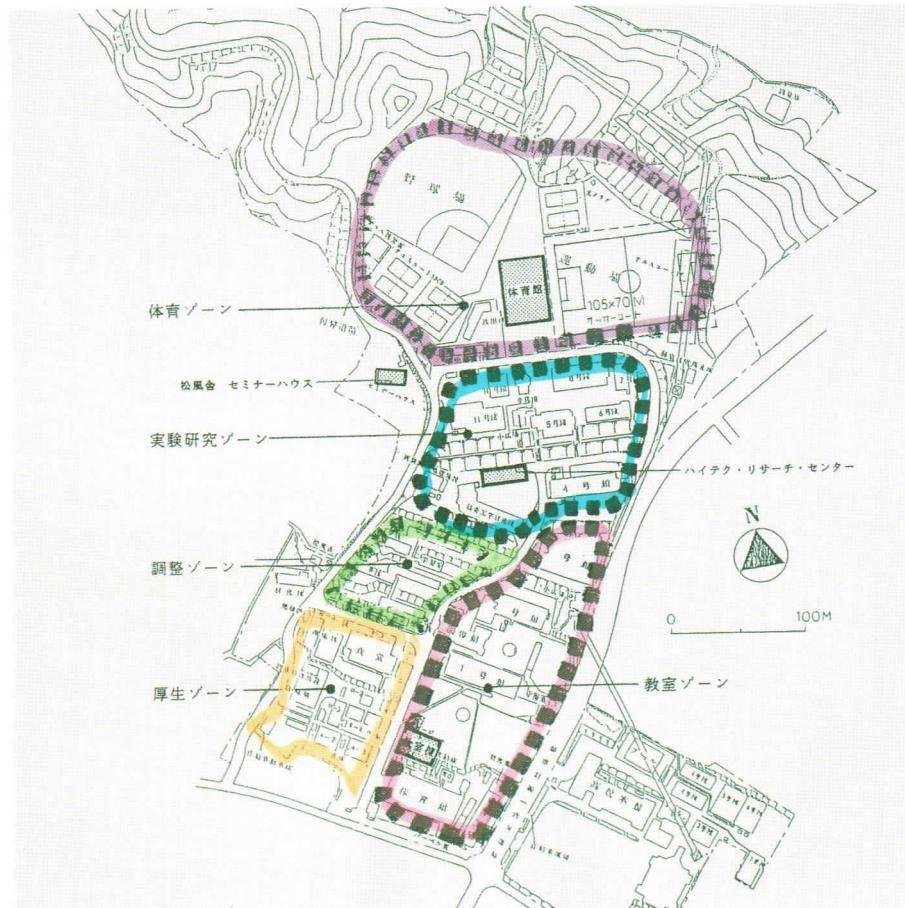
次に各施設について進行状況を簡単に述べたい。

(2) の教室棟については現在4,055m²に面積が増加され、12年3月完工に向け山本・堀アーキテクツによって実施設計が進行中であり、1999年のはじめに着工の予定である。計画では南側正面からの銀杏並木のアプローチを形成するファサードを重視し、現在の1号館南側の緑の広場を重視したL字型プランで構成され、学生ラウンジの豊かな空間と大、中の教室、情報処理演習室などに最新の教育機器が整備され、レベルの高い建築が期待される。

(3) 松風舎セミナーハウスは昨年10月、学生コンペによって、大学院生の木内君の案が一等に選ばれ、それをもとに尾関建築事務所が設計監理を担当することになった。現在、実施設計が終了し、8月3日に着工の予定である。元名誉学長の野口先生の邸宅の跡地でキャンパスの全体を眺望できる高台にあって南の丹沢山塊のすばらしい景観を望むことができる。この施設は後援会の寄付金と本学の資金によって建設され、学生の有効な利用が期待される。

(4) 体育館・運動場については、まず運動場の整備からスタートする。サッカー、ラグビー、テニスコートなどが予定され、現在よりも広くなり、地盤改良、排水などを考慮する方向で進められている。体育館についてはまだ設計作業についてないが、1999年末に着工、2001年には使用開始の予定となっている。

(5) のハイテク・リサーチ・センター



八王子校舎再整備計画。

(ADVANCED MATERIALS CENTER)については、1997年6月に文部省により申請採択になり急処実施されることになった。文部省の補助は単年度決算であり、9月着工、1998年3月完成という超スピードで実施せざるを得ない状況となり、学長はじめ、電気、機械、化学系の多数の先生方の研究施設と研究設備に対するさまざまな要求を限られた予算と、2ヵ月という短い設計期間でまとめ、しかも市街化調整区域に建設しなければならないという、まさに超特急の短期計画となった。設計に際してマスター プラン委員会のもと山下が総合監修。実施設計、監理をTAC・濱田建築事務所と小高都市建築事務所、構造設計は構造デザイン、設備設計は山本設備計画のいずれも本学校友が行って、初期の予算、工期内で1998年

3月に完成した。設計に当たっては白一色のキャンパスの中で透明性があり、つややかでハイテクリサーチセンターの機能を象徴するような建築を目指した。

その他の機械工作棟については校友の昂設計の平井君が設計を担当し、松風舎と同じく8月3日に着工の予定であり、低予算の中で彼の苦心の結果を期待されたい。

終わりにあたって、これら整備計画の実行にあたり指導、ご討議いただいたマスター プラン委員会、実行委員会の諸先生方、および実施計画に携わった関係各位に深く感謝申し上げるとともに、建築学科同窓会および校友会のみなさまによりよき八王子キャンパスの完成に向けてご協力とご賛同をお願いしたい。

大学院の 明日

先日、朝のラジオを聞いていたら、コメンテーターがこんなことを言っていた。
「いま大学教育で、プロフェッショナルとしての素養を蓄えられ、そして人格を磨かれるのは大学院です。アメリカなんかでは、企業のほうが、大学院で修士か博士課程を修めていないと、もう相手にしてくれない」。人間の上昇志向は、無限大である。建築もそうだし、教育もそうだ。

30年前、大学院に進む奴なんて一人か二人しかいなかった。いま建築学専攻では100人以上が研究に励む。そして、働く人たちのために「社会人ドクター」も開設されている。

ますます活況を呈する本校の〈大学院の明日〉を紹介する。

●ケース-1

YUNOTU PROJECT

上村常夫さん(1997年度／大学院・修士過程修了)

上村常夫さんは、今年の4月に本校の大学院・修士課程を修了し、タカハ都市科学研究所に入所した。研修期間も終わり、この7月に本配属になったばかりである。目下、ある地方都市から発注された大規模再開発の住居街区のマスタープラン計画を担当している。

建築を本気でやるなら、大学院に進め

上村常夫さんが本校の建築学科を選んだのは、そう積極的な意志からではない。建築学科のある指定校推薦の4つの大学に、ひとつだけある「建築都市デザインコース」というのがやけに目につき、それが本校であった。そして、その唯一の専科の背後に、日曜大工を趣味とする父親のつくるいろいろな“作品”が揺れていた。「電気も好きなんだけど、建築で、まっいいか」。

こちら辺りの、自分の適正、ないしは天職に対する選択は実に普通である。“正常”である。小学生の頃に憧れ、実際に目指したもの「パイロット」や「サッカー選手」や「漫画家」になれないのは分かっても、高校3年生の18歳で、自分が何になりたいのか、何が合っているのか、まだ分からぬのが普通である。かの丹下健三のように、進学に迷っていたとき、町の本屋でたまたま手にしたル・コルビュジエの作品集に啓示を受けて「俺の職業は建築家だ」と胸を張って、しかも難なく東大を受かっちゃうほうが“異常”である。

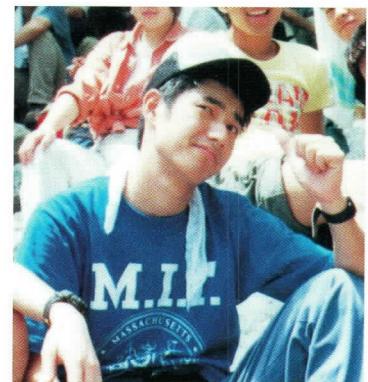
実家の神奈川県横須賀市を離れ、下宿から通う学部の4年間に、しかし建築の面白さは身体中に染み込んだ。古今の建築史を彩る建築を、積極的に見て歩いた。特に、月々の雑誌に登場する現代建築は、実作ができる限り自分の眼で捉えるようにした。そのなかで、安藤忠雄氏の「陶版名画の森」「コレッツィオーネ」と、槇文彦氏の「スパイラル」には深い感銘を受けた。「ぼくにも、こんな建築が設計できるのだろうか」。

建築にますます傾斜していくなかで、上村さんの心のなかにズシリと横たわり離れない言葉があった。それは入学して間もない頃、まさに都市建築デザインコース・建築デザイン専攻の谷口教授が、よく通る大きな声でこう言ったのだ。「建築を本気でやるなら、大学院に進め」。

そして、ついに4年生になった。自分の将来を“設計”しなければならない。上村さんは、大学院への進学を決意した。選んだのは、「進め」と言った谷口先生の研究室である。

大学院へは、横須賀の実家から通った。

「本気でやるなら、大学院へ進め」——建築を本気でやろうとするとき、学部から実務



へ就く2年間のほうが、大学院の修士課程で専門的な事象を研究する2年間より、プロフェッショナルとしての実力はずいぶんと蓄えられそうと素人は思うのだが、「私は、大学院に進んで良かったです」と、上村さんは師の谷口先生を凌ぐ、良く鍛えた鋼のような声で即座に言った。

「もちろん、より専門的な研究が中心ですけれども、研究室にいると、いろいろなことを手伝わされます。ましてや谷口先生は学内・外で、とにかく忙しく動かれている方です。同窓会事務局の窓口をやらされるは、地方のまちづくりの会合には同行させられるは……。きっと実務で得る以上に、いろいろな社会と触れ合う機会があったのではないでしょうか。これが、素晴らしい経験になりました」。

まちづくりは、一期一会ではない

谷口先生が「オラが町の活性化、どうしたらよかんべエ」と請われて地方に出かけていくのに同行して出会ったのが、島根県温泉津町である。この鄙びた温泉町の再生が上村さんの研究テーマとなるのだが、それはやがて上村さんの修士論文「過疎地における建築を中心としたまちづくり／島根県温泉津町におけるケーススタディ」に結実する。作家分析や建築手法の研究がほとんどの修士論文のなかにあって、上村さんのような将来の姿を提示する“都市再開発”が提出されるのは希有なことである。

温泉津——島根県中央部、隣接郡温泉津町の町野中心集落。日本海に臨む古くから開けた港町、温泉町と『コンサイス地名辞典』は記す。後出の「同窓生を訪ねて」に登場する大森鉱山の積出港が、他ならぬ温泉津である。かつての隆盛を今に伝える豪壮な屋敷が点在し、それらの大切な文化遺産を残そうという声が地元民から上がり発足したのが「温泉津の町並み保存を実現する会」であった。1996年(平成8年)のことである。会は地元の旅館、商店、寺の主など、総勢23名からなる。上村さんの研究は、この人たちに支えられて進んでいく。



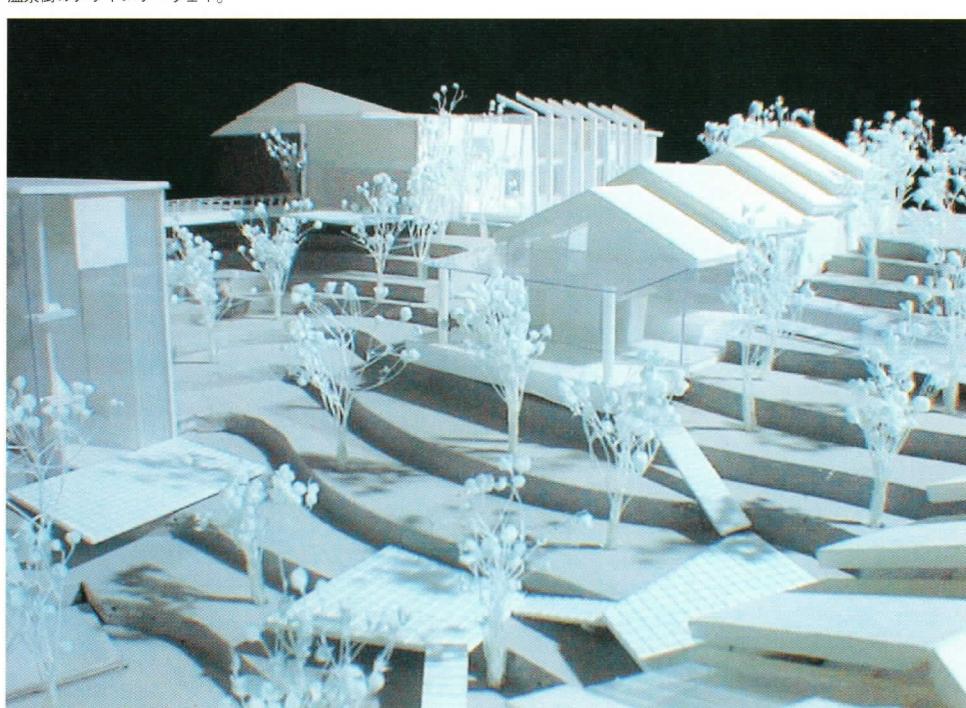
温泉津の町並み。旅館



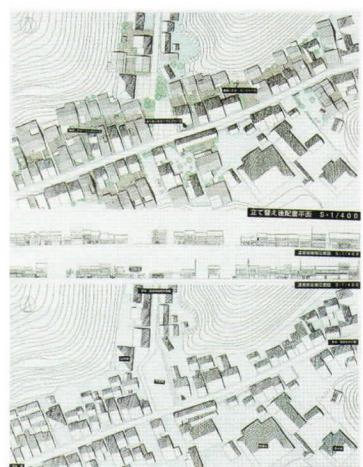
温泉街のデザインサーヴェイ。



温泉津の町並み。たぬきや庭園。



Project no.1：ターミナル十附属施設整備。



まちなみ整備計画。上が建替え後、下が現状。

彼は言う。「私は、この論文で温泉津町の可能性を提示したかった。自分たちの町は何ができるのか。それが判れば、住民の皆さんでも考えることができます」。

論文は、(1) 研究目的、(2) 研究方法、(3) 地方における過疎化の拡大、(4) まちづくりの現状と方向性という概論と日本列島の俯瞰からはじまり、ケース・スタディとして温泉津町が抽出される。温泉津町の歴史的・地理的・文化的位置が解かれ、観光地・住環境としての問題点と課題が分析され、総合考察される。そして、再生のためのプロジェクトが提案される。

この研究が、先の「温泉津の町並み保存を実現する会」という民間人の依頼を受けて成立したのは貴重である。商売でなく、純粋に研究に没頭できたのが貴重なのだ。旅費も滞在費も、地元の方々が負担してくれたという。だから、地元の人たちも、自分の町のこととして真剣に考えられるのだろう。これが、ビジネスで乗り込んできたデベロッパーや大手設計事務所、ゼネコンだったら、もっと素晴らしい夢や絵を提示してくれただろうけれども、ここまでみんな愛着が沸いただろうか。また、行政が絡んでいたら、ここまでアマチュアの登場を許してくれただろうか。こういう経験をさせてくれるのなら、大学院の存在意義は大きい。

地元の旅館・山県屋の女将さんで「温泉津の町並み保存を実現する会」の会長である山形俊枝さんは、上村さんの印象をこう話す。「とにかく真面目で研究熱心。それでいて何にも囚われない新しい感覚を持っていて、ただ古いものを保存するだけでは活性化できないという私たちの気持ちを、住民の皆さんに伝えてくれて、本当に感謝しています」。

上村さんがタカハ都市科学研究所で本配属になった日、温泉津町では恒例の「温泉まつり」が開催された。祭りの会場の一隅に、上村さんが修士論文で提示した“温泉津町の将来”の模型が展示された。住民たちの手で、まちづくりの気運が確実に高まってきた証拠である。しかし、このことを上村さんは知らない。まちづくりは、一期一会ではない。折角の機会を与えられたのだから、末永いお付き合いを期待するばかりである。

(レポート=類洲 環)

●ケース-2

上海市北外灘都市デザイン国際コンペ

曹輝さん(大学院工学研究科建築学専攻・博士後期課程)

上海市北外灘都市デザイン国際コンペにRIA案が当選——2年前の秋も終わる頃、とびきりビッグなニュースが飛び込んできた。このニュースを整理したのが編集者時代のレポーターであり、そしてその当選案をRIAで担当したのが曹輝さんであった。

中国の家具から人民服を脱がせたい

曹輝(そうい)——1959年、中国・上海市に生まれる。1981年、上海市工芸美術学校インテリア専攻を卒業し、上海市家具公司に入社する。ここで、すぐさま頭角を現す。その年の12月、新製品を募るコンペに5点を提出したところ、一等から佳作までを独占する。

彼は言う。「もう何十年も同じスタイルが続いていた。伝統という名のもとに、家具が人民服を着ているようなものだった。私は、新しい家具から、人民服を脱がせたかった」。

応募した5点は実施に移され、家具新製品の見本市に出品された。オープンするや、曹輝さんの作品に注文が殺到した。特に、一等になった家具には、二週間の会期中で1,600セットの買いが集まり、売られた。その人気に、多くのコピーが出回った。会社は3万人のスタッフを擁する国営企業である。そこで華々しいスタートを切った曹輝さんの将来は、間違なく約束された。

しかし、曹輝さんの“新しい表現”への意欲は、将来の安定など問題にしなかった。時あたかも中国は“開放政策”を掲げ、その実践として深圳に一大新都市を築こうとしていた。「深 市政府工程設計顧問公司デザイナー」募集を見て、彼の心はすでに深 にあった。そして、この新しい都市で、全体のイメージを練り、具体的にはオペラハウス、図書館、リゾート・ホテルなどのインテリアを担当する。とにかく、これから都市を建設しようと



いう何もない土地である。市政府ビルの廊下に寝泊まりし、カップラーメンという生活が続いた。これには一人去り、二人去り、結局、新政府の建設関係の“役人”は6名であった。

中身ではなく箱もつくってみたい

1988年6月、東京。日本語学校に通う曹偉さんの姿があった。深圳の4年間で、彼の“新しい表現”への意欲はさらに拡大した。そもそもがインテリア・デザイナーで、家具にもインテリアにも実績を重ねていたが、建物の“中身”ばかりに取り組んでいるうち、その“箱”も手掛けたくなってきた。「建築の勉強をしたい！」。

日本に知り合いがいたわけではない。友人がいたわけでもない。一切のコネがない。中国にいた時、海外から送られてくる数多のデザイン誌のなかで、日本の現代建築がいちばん元気が良かった。そんな思いだけで日本の土を踏んだ。「今だから言います。日本に着いた一週間ほどは、夜は公園のベンチで寝ていました」。

2年間で日本語をマスターし、1990年に武蔵野美術大学・造形学部に入学する。先生方にしてみれば、やりにくい学生であっただろう。課題の制作など、誰よりも上手く、そのレベルはきっと教授をも凌いでいたはずである。1991年に卒業し、同大の大学院・造形研究科の修士過程に進む。研究テーマは、日本と中国の町屋についての比較研究であった。その研究論文は、優秀賞を受けた。論文のみで優秀賞を受けるのは、武蔵野美術大学の開校以来、初めてのことだという。

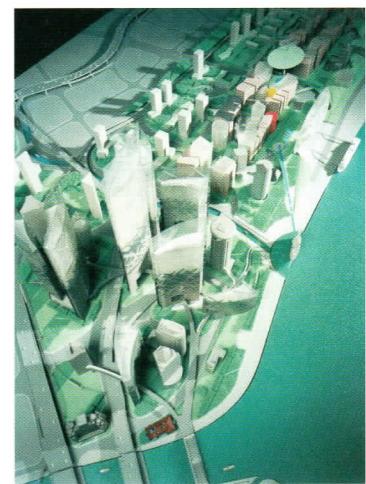
その後、東京大学の研究生、さらには東京芸術大学の客員研究員を修了する。そして、1994年、RIAに入社するのである。

RIAは、ご承知のように、都市再開発にかけてはなうての事務所である。家具からインテリアへ、そして建築に向かった彼が、今度はその建築を超えて、都市に挑む。

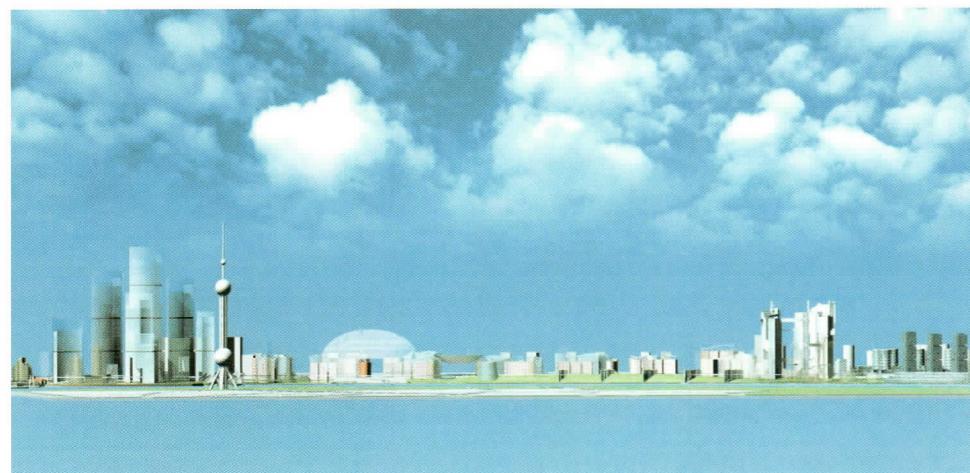
それにしても、人生には不思議な巡り合わせというものがある。中国は深圳の次に、上



当選した上海市北外灘都市デザイン国際コンペ案。配置図。



上海市北外灘都市デザイン国際コンペ案。模型俯瞰。



当選した上海市北外灘都市デザイン国際コンペ案。立面図。



(左) サッカー競技場。
(下) 情報センター。やはりコンペ応募案。



海にも21世紀の都市を計画した。上海は、彼の生まれ故郷である。彼はRIAの上海担当者となって、数々のコンペに参画、入賞する。その最大のものが、冒頭の「北外灘」の国際コンペであった。

約160haの再開発地のなかに、国際金融センター、業務商業センター、娯楽交流センター、都市型住宅ゾーンを整備する。曹煒さんの案は、躍動感あふれる超高層金融センター、シンボリックな客船ターミナル、龍の背骨のように伸びる都市軸としての商業・娯楽交流センター、そして黄浦江沿いの巨大な緑の丘……など、まさに21世紀への期待を高らかに謳った都市の像であり、17名の審査員のうちから13票を得て最優秀に輝いた。

「上海には、世界各国の有名な建築事務所が1,000社ほど支店を出しています。それを相手に戦うわけですから、容易ではありません。今までにどこにもなかった表現をしなければ勝てません」と語る。

社会人ドクターは自由人を育てる

余りに波瀾万丈だったので、彼の人生を振り返りすぎた。本編は、彼の本校・建築学科での大学院生活をレポートするのがテーマであった。それにしても、すでに建築家としても将来を約束された曹煒さん、何故にまだ、そんなに勉強をするのだろうか。

「デザインは、感性だけではありません。思考が生み出すものです。私に今、不足しているのは、この考える部分です。思考は、研究や調査が鍛え、柔軟にしてくれます。それこそいろいろな大学を調査したら、建築のデザインの歩みを研究・調査し、それを現代を映す鏡としているのは、工学院大学の初田先生の研究室しかなかった」。

曹煒さんは、初田研究室で博士後期過程の3年目を迎えた。職業を持ちながらの学究であるから、いわゆる“社会人ドクター”である。目下、初田研究室には、彼の他に2人の社会人ドクターがいる。栃木県の岡田さんと群馬県の村田さんで、ともに高校の先生である。岡田さんは、建築家・松ヶ崎萬長の研究をしており、いま論文のまとめにかかっているところ。一方の村田さんは、近代社会の温泉施設について研究をしている。

曹煒さんは、研究・調査の論文の作成の指導を受けながら、<中洋折衷>の新しい建築思潮を取り組んでいる。日本が<和洋折衷>で独自な建築文化を生み出したように、新生・中国は<中>と<洋>をいかに混在させた様式で建築や都市を活性化していくのだろうか。例えば、「北外灘」の前に応募した「情報センター」は、見るからにハイテック、そうリチャード・ロジャースを彷彿とさせる造形であった。その感想を述べると、曹煒さんはキッパリと言った。「ロジャースは、パイプを寄せ集めているだけです。私は、中国の詩や水墨画のような風流の“意境”をハイテックで表現しているのです」。

曹煒さんの“新しい表現”的活躍場所は、一体、どこに移り、どこまで拡がっていくのだろうか。残念ながら、日本には留まらないような気がする。彼の舞台は、たぶん世界になる。

社会人ドクターは、曹煒さんのような自由人を育てる。もう俺の人生は終わったと思っているあなた、社会人ドクターの門を叩いて、世界に飛翔してみませんか。

(レポート=類洲 環)

石見銀山を世界遺産に —大田市大森銀山伝統的建造物の保存・修理に携わって10年

渡部孝幸さんに聞く

■渡部孝幸（わたなべ・たかゆき）

1950年 島根県大田市山口町に生まれる

1969年 上京／建材会社へ就職／工学院大学に入学

1970年 ARK一級建築士事務所に勤務

1973年 工学院大学建築学科卒業

1977年 ヨーロッパ建築ツアーに参加

ル・コルビュジエやガウディの作品に触れ、建築の面白さを知る

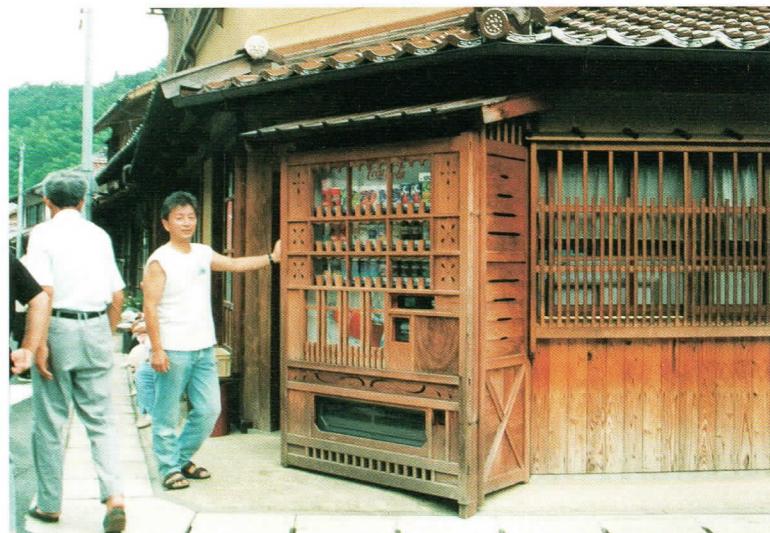
1980年 大田市役所へ転職／家業の米作りにも精を出す

1987年 大森銀山の町並み保存事業に関わる

1995年 まちなみ探偵団を結成、錫絵の収集を始める

一級建築士／建築主事／インテリア・プランナー

現在大田市役所建設部都市計画課建築係／課長補佐



(左) 大森の町の一角にある自動販売機と渡部さん。詳細は本文参照。

●本校の建築学科を選ばれた理由を、お聞かせ下さい。

私は島根県の片田舎に、農家の長男として生まれたのですが、農村社会の狭い世間がすごく嫌で、とにかく都会へ出たかったのです。それも大阪ではなく東京へ行きたかった。祖父が大工で、いつもそばで見たりしていて、ものを作ったりするのが好きだったこと也有って、建築へ気持ちが傾いていくのはごく自然でした。憧れの東京へ出て、自活するためと学費を稼ぐために、建材会社へ就職しました。工学院大学は夜学生にも門戸を開いていたので選びました。

●どんな4年間でしたか。

建材会社は1年と持たず、友人が紹介してくれた設計事務所に転職しました。事務所が学校に近い西新宿にあったことも幸いしました。そこは、所長が独立したばかりの事務所で、主に構造設計をこなしていました。〈建築〉をまったく知らなかつた私にとって、学校で理論を学び、仕事で実践面の設計を学ぶというのは、それこそ紙が水を吸い取るように、身体のなかにどんどん広がっていました。

昼間部に変わろうという望みもあったのですが、最後まで、昼働き、夜学ぶというスタイルを通してました。在学中に、構造計算や図面のアルバイトをけっこうやりました。

●ご卒業と同時に東京の設計事務所に入所されましたか、どんな作品を担当されたのでしょうか。また、実社会で学んだことはどんなことでしょうか。

設計屋さんの世界は、武者修行のようにあちこちと移ることは半ば当たり前でしたが、卒業しても事務所は変えませんでした。あの頃の小さい事務所はどこも似たり寄ったりで、給料が安い上に夜遅くまで働き、帰るのはたいがい午前様でした。それで、8人ほどいた所員とともに所長に直談判することもあります。所員の出入りは激しいものがありました。

作品といつても、構造設計は意匠設計の下請けでやることが多く、ほとんど記憶にはありません。それでも、構造とは何かということはシッカリと身体で

石見銀山を世界遺産に

—大田市大森銀山伝統的建造物の保存・修理に携わって10年

渡部孝幸さんに聞く



大森の町並み。武家屋敷と町家の混在。

覚えました。「構造計算は100件やれば大抵のことが分かる」とか、「結局、構造ちゅうのは、もつかもたないかという直感力を養うことなんだ」「いかに経済設計するかが肝心で、それは構造屋の力量による」「構造計画が大事だ」などなど。木造、鉄骨造、鉄筋コンクリート造、鉄骨鉄筋コンクリート造……すべてをやらせてもらいました。意匠設計を担当したこともあります。木造も、マンサード形式の厩舎のようなものや、いろいろ手掛けさせていただいたことが、今日の町並み保存の調査や修理計画に大きく役立っています。建築は学ぶことが多く、また経験しなければならないことが余りに多い。これは今でも実感しています。

●夢を抱いて東京へ出られて、11年後に故郷の島根県に戻られましたが……。

田舎が嫌で都会へ飛び出していったのですが、老いていく両親の面倒は誰が見るのが、田圃は誰がつくるんかということが現実のものとなってきていました。ちょうど大田市役所が一級建築士を一人募集しており、30歳までといってるから受験だけしてみれやという誘いに乗ったのが運の尽きで、たまたま受かってしまったのです。

役所に入ったものの、給料は今までの半分以下の9万円ほど。約束が違うと後悔しましたが、先輩から10年我慢すればいいことがあるからと説得されて、今日があります。まさに、30歳を迎える直前のときでした。

●大田市役所に入所されて、そこで出会ったのが「いわみぎんざん石見銀山」なのです。

大田市役所では、建築確認の受付事務、建物や敷地に関する相談、公共建築物の計画、設計、監理、營繕などが主な仕事です。保育園や公民館などは、自分で計画から実施図面、現場の監理まで……設備は外注していましたけれども……一人でやっていました。さすがに規模が大きくなると一人では手に負えず、基本計画だけで設計事務所に出しました。建築の判断の上司が数年で全員退職したこともあるって、私のものでも建ってしまうという、やりやすい環境になってきました。(笑)

大森銀山の伝統的な町並みを保存しようという動きが再び起こり、市長と教育長のリーダーシップで1987年(昭和62年)3月に保存条例、同じ年の12月には国的重要伝統的建造物群保存地区に選定され、1988年からは本格的に国庫補助事業がスタートしました。当初は、設計事務所に調査や修理計画図面を依頼する予定でしたが、個人負担が増えるために、とりあえず初年度はお前がやってくれと教育長から直接頼まれたことから取り組むようになりました。幸いに、奈良国立文化財研究所の細見啓造先生……退職後、「朱雀門」の復元工事の監理をされた……に指導を受けながら調査や修理計画を行うことができました。それが2年目、3年目と続き、とうとう今も抜けられない状況です。しかし、私自身、町並み保存は面白い仕事だなということが正直なところです。

●役所の先輩から10年我慢すればいいことがあると説得されて、その10年がたったわけですけれども、いいことというのは「町並み保存」という渡部さんにとっての“ライフワーク”ともいえる仕事に出会えたことかもしれませんね。

なるほど。調査から修理計画、そして復元工事から完成まで、町並みが少しずつ形成されていく一貫した流れを同時進行で体験しながら、景観の統一に、ひいては町の活性化に役立っていることに、担当して本当に良かったと思っています。

大森の町並みの修景で、徹底しているのは“本物志向”です。これは、細見先生から教えられた最大の思想です。先生は、他の伝統的な町並みがちゃんと再生できていないのは、そのところを中途半端にするからだと指摘されます。この視点は、今でも私の仕事の原点ですし、他所の町並みを見て歩くときの大変なポイントになっています。

渡部孝幸さんに聞く

●「石見銀山」のことを、少しお聞かせ下さい。

石見銀山は、14世紀の初めに発見されたと伝えられていますが、本格的な採鉱は1526年（大永6年）、博多の豪商・神谷寿禎が入山してからです。日本に“灰吹法”と呼ばれる最新の銀精錬法が導入されると石見銀山の産銀量が増大し、世界の銀山のなかでも重要な位置を占めるようになりました。これほどの“宝の山”ですから、戦国期には大内、尼子、毛利などの戦国大名によって争奪の的となりました。

1600年（慶長5年）の関が原の戦いの後、周辺の144箇村を併せて石見銀山御料として徳川幕府の直轄地となりました。産銀量が最も多かったのは、その慶長年間、つまり17世紀初頭ですね。当時、わが国の銀は主要な輸出商品でした、その大半が大森の銀でした。何しろ石見銀山は世界の銀産出量の三分の一を占めていたというのですから、いかに大規模かつ重要な拠点であったかがお判りいただけると思います。

その後は次第に減少していくのですけれども、幕末期まで操業し続けました。明治時代に入ると、民間経営により銅も産出していましたが、1923年（大正12年）に休山、やがて廃山となりました。

●それだけの隆盛を誇っていたら、人間の出入りも多くて、一帯は完全に“町”を形成していたのでしょうか。

はい。“石銀山上六千軒”と評され、一時は20万人が暮らして、おっしゃるように完全な“鉱山都市”でした。銀山の町並みは、戦国期に仙の山を中心に集落が発生し、銀山開発とともに谷に沿って広がり銀山川筋にまで至るようになりました。幕府直轄地となり、大久保長安が初代奉行をつとめた1613年（慶長18年）までは山吹城の麓に代官屋敷を置き、その周辺に商家などの町ができていたことが地名などから推測できます。二代奉行・竹村丹後守が代官所を現在地に移転し、意図的に銀山町を「山内」、大森町を政治・経済の町として区分し、周囲に元締屋敷、向陣屋、仲間長屋、十歩番所を配して、さらにその外側に御用商人宅や銀山御料六組の公事宿である郷宿を置きました。

●<大森区域>と<銀山区域>の町並みの特徴は、どのあたりにあるのでしょうか。

大森区域の特徴は、階層別の住み分けの曖昧さといつていいでしょう。つまり、武家と町家の混在です。比較的広い場所は武家や重立層が占め、高台には社寺仏閣が建立され、その間を埋めるように町家や長屋が建ち並んでいます。こうした地理的要因から武家と町家が混在する珍しい町並みを形成したのではないかでしょうか。

また、代官所は山内と最も遠い所に位置するのですが、銀山に関わる武家はできるだけ銀山に近い土地に居を構えようとしたことも一つに挙げられます。でも、混在してはいるものの、代官所の周辺は武家の家並みが多くを占め、町年寄の遺宅や菩提寺などが近くに位置しているといった片寄りも見られます。

銀山区域は、道沿いに点在して伝統的な家屋が残り、畠地などに転用されつつも、往時の屋敷割を石垣や井戸によく残しています。藏泉寺口番所跡周辺には番所役人の旧宅が残り、これより南には大久保石見守の墓や、また毛利元就を祀る豊栄神社などが山裾に点在しています。

●今度は「町家」の特徴を、教えて下さい。

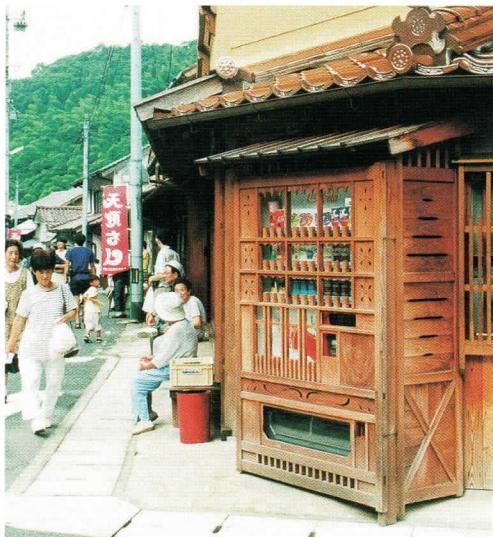
伝統的都市住居である町家の配置形式の特徴は、主屋が街道に直接面していることです。武家のように前面に門や堀といった境界装置を持たず、主屋が接道することによって町家独自のファサードが構成されています。さらに、間口が狭く、奥に深い短冊状の形態も町家の一般的な特徴といえます。

●先程、大森銀山の伝統的な町並みを保存しようという動きが“再び起り”とおっしゃられ



大森の町並み。

石見銀山を世界遺産に
——大田市大森銀山伝統的建造物の保存・修理に携わって10年
渡部孝幸さんに聞く



町の一角にある清涼飲料水の自動販売機。周辺の町並みに実に溶け込んでいる。

ましたが、地元での町並み保存の動きはずいぶん早かったようですね。

はい。1957年(昭和32年)には全戸加入の「大森町文化財保存会」が発足し、遺跡の清掃や、会費を募って標識の整備などを行っています。1969年に、全国初の国指定鉱山史跡となっています。

最初は“遺跡”に関心が集中していたのですが、次第に“町並み”にも注がれるようになり、1974年には、国と県の補助を受けて、町並み調査が実施されました。この成果により、「熊谷家」など6軒の住宅が、また翌年には「高橋家」など3軒の住宅が県史跡として指定されました。ちなみに、「熊谷家」……町年寄の遺宅ですが……今年の5月、重要文化財に指定されました。

1984年には、県と市、および周辺3町が合同して、石見銀山遺跡総合整備計画を策定、そのなかには大森区域の町並み保存案が盛り込まれることになりました。1986年、町並み保存を含む構想案を市長が直接、地元に説明、市をあげて歴史を活かしたまちづくりに取り組むことを伝えたわけです。

●公的に“選定”を受けると、勝手に建て替えができないけれども、補助が受けられるということですね。

伝統的な建物の外観を復元する際には、対象経費のうち80%以内で500万円を限度とし、新築や増築などの場合には60%以内、100万円を限度に補助しています。石垣や生垣など景観に関わるものにも補助がありますし、伝統的な建物の場合には、固定資産税を非課税にするなどの支援もあります。また、施主が事業主体となる間接補助形式をとっており、大森の場合、施工業者を施主の希望に沿うことが可能で、やりやすい面があります。

現在、特定物件として237棟が登録されています。江戸時代後期の建物が21%、明治が49%、大正が8%、昭和初期が22%という内訳で、その9割以上が町家です。

●国の「重要伝統的建造物群保存地区」の選定を受けてからも10年が経つわけですが、振り返ると、いかがですか。

復元工事では、特定の時代のデザインに統一することなく、江戸末期から明治、大正、昭和初期にかけて、それぞれの時代に創建された姿にできるだけ近づけることを方針としています。修理を行う課程で、それぞれの時代、用途、規模により特徴がある程度類型化されようとしていますが、今後は、年代判定を下すことにもう少し時間をかけて進める必要があると考えています。

『町方間数帳』に記載されている半数近くの家屋が“貸家”であるという事実は、代々住み続けることが少なく、移り住む状況を生んできたのを裏付けるものであり、持ち家のない現代の都市の姿に似ていたのも実に面白い点です。

●昨年、渡部さんは、公共の色彩を考える会主催による第12回「公共の色彩賞」の「環境色彩十選」を受賞されました。実は4年前にも、各戸の通りに面する板塀や格子に独自に調合した塗料を施して、「古色塗りによる町並み修復」により同賞を受けているのですが、今回の受賞の対象は何だったのでしょうか。

町の一角にある清涼飲料の自動販売機を、隠してしまったのです。(笑)

●???

自動販売機を、町家の伝統的な「親子格子」で覆ってしまったのです。そして、前回の受賞と同様、柿渋、紅柄、煤を調合した“古色いろ”を塗ったわけです。自動販売機は町の景観を台無しにする元凶のように言われていますが、利用する人もいて、それにより収入を得る人もいるわけで、そう無理にはできない。その土地で、目立たなくなる工夫があるはずです。町並み保存には、見た目にはちょっと気づきにくいところにも気配りすることが大切です。見る人、その繊細を知った時、きっと感動してもらえるはずです。

●公共の色彩を考える会の主催により、今年の2月に「江戸東京博物館」でシンポジウムが開催され、渡部さんはパネリストの一人として参加されたそうですね。

はい。テーマが「歴史を映す町並みの色彩」でして、そのとき私は、大森の町並みを俯瞰すると赤っぽく見えると言ったんです。それは、甍の主たる色が石州瓦といって来待石を磨り潰したものを釉薬にして焼く瓦だからです。鉄分を適量に含む、砂岩系の加工しやすい石なのです。来待とは、ここより東の松江に近いところです。

また、少し赤味を帯びた土壁は伝統的な町並みの魅力の一つです。これも赤っぽい印象を与える要因の一つです。少しでもそうした土壁を塗れるような復原をしたいと考えています。新しく塗った壁が落ちることがよくあったものですから、とにかくいい塗り壁を残したいとあれこれ思案し、実際に試しているなかで注目したのが「錆絵」です。なぜ100年近くも経っているのに色が落ちないのか。これが錆絵とのつきあいの始まりです。

●それで最近、“まちなみ探偵団”を結成して、「錆なみはいけん」という石州左官の技を世に広めようと活動されているのですね。

「錆なみはいけん」のパンフレットと資料集は、私の石州左官への思いを込めて原稿を書き写真を撮って作成したものです。嬉しいことに、これが昨年の＜島根広告賞＞のパンフレット部門の金賞をいただいたのです。

日本の近代建築を支えたといつても過言ではない無名の出稼ぎ左官職人たち。かつてはこういう素晴らしい左官がこの石見にもいたんだよということを、彼らが残した作品とともに知ってもらいたい。さらには職人を見直すきっかけになればという期待からもやっています。

昨年、急死された村松貞次郎先生をご案内しました。やはり昨年の6月に鳥取県博で行われた講演では「近代遺産としての錆絵」というテーマでお話し下さい、「民衆文化としての錆絵は地縛の刻印、大地に根ざした文化である。職人は地縛を呼び起こす異界の人だ」という件が印象深く残っています。「鉄の次は土だ」ともおっしゃっていました。まだまだ教えていただきたいことがたくさんあったのにと残念です。先生からいただいた3通の書簡が宝物です。

●大森銀山の伝統的建造物群を“世界遺産”にしようという動きがあるそうですね。

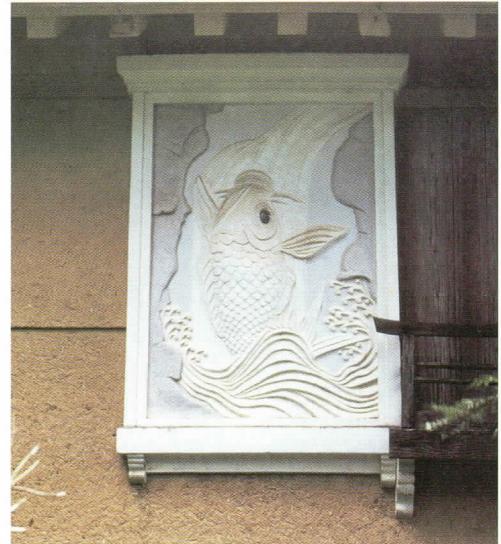
戦国期、世界にその名を止めた石見銀山は草木で覆われ、かつての賑わいなど想像するだにできません。町並みが10年かかって着実に整備されてきたことで、開発初期の頃から閉山までの鉱山の歴史が手つかずの状態で眠っている遺跡に注目が集まり、調査が始まりました。貴重な埋蔵品が発見されているようですが、世界遺産への道のりはまだ時間を要するようです。

遺産の対象は、鉱山遺跡や町並みを含め、一市二町にまたがる地域になり、史跡指定の範囲拡大に向けて準備をしている段階です。盛り上がりに欠けるという声もありますが、ちゃんとした調査を行って、地に足の着いた確かに、価値あるものにと考えているようです。

大森の町並みへは、市役所から15分ほどかかる。渡部さんは、それこそ毎日のように通っている。そこで待っているのは伝統的建造物群の保存・修理という地味な仕事である。そして、10年が経った。渡部さんを、そこまで突き動かしているのは、一体、なんなのだろう。

その真摯な姿を見ては、「石見銀山」を世界遺産にするために、積極的に支援しなくては本校建築学科の同窓生ではない。建築人ではない。人間ではない。あなたが「石見銀山」を知っていることが世界への発信に他ならないのです。そう、本稿をもう一度、読み返してみて下さい。

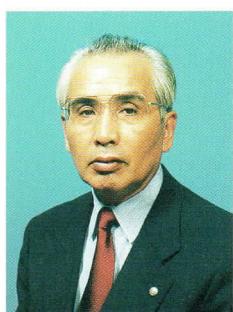
(レポート=類洲 環)



石州左官による錆絵。

阪神大震災は過去のもの？

黒岩弘一（1965年度建築学科設備工学コース卒業／西松建設東京支店設備部部長）



東海沖地震は阪神大震災を忘れたころにやってくる！

私が大阪に転勤して7年目の1月17日早朝（5時46分）、阪神大震災は何の予告もなしに突然、関西地方を襲ってきました。日頃、あまり小さな地震さえ経験したことのない関西地域の人たちには、未明の大震動は何が起きたのかさえ予想できず、自分の身、家族のこと、住まいのことが一瞬にしてことごとく破壊されることに、ただ茫然とするばかりでした。

単身赴任の私も、自室のベッドで、テレビが吹っ飛び、洋服ダンスが倒れるのをうつろに見ながら、両手でベッドをつかみ、耐えるのを待つのみでした。もし天井が落ち、寮が倒れたら、今の私はなかったでしょう。尊い命をなくされた人、約5,500人、家屋・ビルの倒壊、道路交通機関の遮断、二次災害である大火災の発生と人間そして人間が築きあげた社会が、大自然に比べていかに小さくはないものかをいやというほど思い知らされました。今、想い出しても背筋が寒くなり、忙殺の日々でした。

それじゃ、人間そして社会は手をこまねいていいのかといえば、決してそうではないと思います。人間の英知があり、微力ながら私たち建築に関わる技術者がいるのです。これから大地震に対して、どう対応すべきなのは、私たちにとっても重大な責務ではないでしょうか。震災復旧は着々と進んでいますが、大自然の脅威は被災者の方々と一部の関心のある方を除いては、もはや忘れ去られているのではないかでしょうか。地震大国の日本社会にあっては決して忘れてはならないことで、これからも大自然の脅威を覚悟しなければなりません。近来、関東・東海地域では東海沖地震が起きると予知されていますが、全くそのとおりです。——「備えあれば憂いなし」です。

関西の「建築設備懇話会」ここにあり

大阪では1990年（平成2年）頃、ゼネコン設備技術者の利害を越えてお互いに技術情報を交換しようということで、現在、主要のゼネコン34社で「建築設備懇話会」を結成しました。地味な集まりではありますが、これから社会や企業先のためにゼネコン設備技術者として共通の課題でもあるトラブル事例

を書物にしたり、積極的な情報交換を行ってきました。そのことは、会社同士ということだけではなく、個人としてもお互いに信頼感の強い組織となっていると思います。

そこに突然の阪神大震災の発生、各ゼネコンは全国の職員の応援をもとに、まず自社で施工した建物を昼夜を問わず被害状況を調査し、速やかに応急措置を行い、企業先に少しでも緊急にお手伝いできるように努力したつもりです。当然のことながら、一般の人たちにも緊急の飲料水・食料などを微力ながらゼネコンの一員として出来る限り協力できたと自負しています。ご家族を失い、家屋を破壊され今日の衣食住さえも突然失った現実は想像を絶するものでした。交通網、道路の切断、インフラの破壊と、まずは飲み水が食べ物より貴重であることと、人の排出物は“出もの腫れもの所きらわづ”的ごとくトイレというトイレの中はウンコの山となり、まさに人間個人の尊厳さえも破壊しかねないものでした。

当初、ゼネコンは各社ごとに必死の救援活動をしましたが、インフラ関係が概ね復旧し、仮設住宅を建て緊急の対応を終了しつつある時、私たち「建築設備懇話会」のメンバーは、この大自然の脅威をゼネコンの設備技術者としてお互いの調査結果を持ちより、これから提案を含めて約120頁に及ぶ資料作りに取り組むことにしました。外部インフラ関係の被害と復旧はそれぞれの専門業者の方に委ねるものとし、主に建物関係の設備に限定してゼネコンとしての総合的な視点に立った資料としました。

兵頭氏（清水建設）を委員長に、「建築設備懇話会」のスタッフである電気および管工事専門技術者16名で、各社の被害状況を写真とともに収集したものを、問題であった点、困難であった点、良かった点、そして今後への提案として分析しました。設備機器本体の破損、機器類の固定、配管類の支持、地面と建物の振動の違いによる建物へのインフラ設備の導入箇所の破損、経年劣化によるもの、土中配管類の破損など、被害事例を分析することはかなり困難でした。



クーリングタワーの倒壊

当然のことながら、メンバーは施工者の立場として、メーカー、専門業者の方々にも多大な尽力をいただいたのは言うまでもありません。生々しい数々のデータは、施工者であり、ある時は設計者でもある立場の関係上、各社の認識に多少の差異があることは大いに議論を呼びました。なんとか作成した資料は、地震大国である日本の将来の建設に直接関わる者として、謙虚に反省すべきことはして、会員各社のOJT用に利用することにしました。

資料を作成していくうちに、お互いがゼネコンの設備技術者であること、特に建物の構造体がしっかりしていても設備関係に支障をきたせば即、人間の生活が存在しえなくなることの重大さが共通の認識となり、改めて「建築設備懇話会」の意義を知られたような気がしました。ゴルフに行ったり、呑みに行って大いに話に花を咲かせたりと、競争相手であるべき同じ設備技術者が、このような関係であるのは実は貴重なことだと思います。まさに、関西に「建築設備懇話会」あります。阪神大震災という自然が人間社会に与えた警鐘を、私たちは決して忘れてはいけません。

「ロングライフィル化」への取組み

関五郎（1966年建築学科卒業／日建設計東京本社設計室長）



高度経済成長を背景に「大量消費・大量廃棄」の使い捨て文化によって経済的な繁栄がもたらされたが、今や数多くの課題が発生していることも周知の事実である。

この半世紀の建築物は、経済成長に合わせ早急に整備することが優先され、「ロングライフィル化（長寿命化）」にあまり配慮されることなく建設が進められてきたきらいがある。現在の建築界を取り巻く環境（急速に訪れた経済の低成長の時代）では建て替えを実現することも容易ではなく、これまでの新規建築物投資重視の時代から既存建築物の資産価値を維持・向上・再生することに主眼をおいた「ロングライフィル化（長寿命化）時代」に入った。

現に多くの施設・建築物において劣化・省エネルギー・省力化対応および室内環境や機能性の向上を目指した建築・設備の更新・改修（リニューアル）の度合いが増大している。特に、高度情報化の波によってオフィスにおける生産性・創造性の著しい向上に拍車がかかり、これに伴い質の高い快適な執務空間への要求が高まり、一層の充実が望まれる状況となってきた。

わが国の建築ストックは、地方公共団体建築物や民間建築物を合わせると、その総面積は70億m²以上といわれている。

建設省所掌の官庁施設における平成8年度（1996年）の官庁建物実態調査結果によれば、建築ストック総延べ床面積は1,200万m²以上に達している。これらの施設のうち、建設後16年以上経過した施設は約68%である。そのうち修繕費などを特に必要と考えられる16年から25年まで経過した施設は全体の約36%を占めている。

東京都23区のオフィスビルの建築ストック状況は、1995年で約7,000万m²であり、建築後16年以上経過した割合は約46.5%である。そのうち修繕費などを特に必要と考えられる16年から25年まで経過した割合は約22.5%（約1,600万m²）を占めている。

また、2010年の推計では約8,600万m²となり、建築後16年以上経過する割合は約51.3%に達すると推計される。このうち16年から25年のストック分は約31.4%（約2,700万m²）と推計される。

建築物は竣工後の使用上において、何らかの「不都合」が発生する。すなわち、物理的機能劣化と社会的機能劣化である。このうち、物理的機能劣化の進行は、当初設計における仕様が定まれば、海岸や多雪地など周辺環境の影響は受けるものの、ある程度使用条件を加味して予測が可能であり、計画的な維持保全を考える上でも想定がしやすい。一方、社会的劣化の進行については、急速な経済成長の変化のような劇的な変化は想定し難く、予測も困難である。しかし、現実にはその使用上の「不都合」に対処すべく、何らかの「手を加える」必要がある。建て替え、修繕、更新、改修（リニューアル）、リノベーション、売却など財産管理上の対処方法があり、何を選択するかはその建築物の置かれている社会的・経済的な環境により総合的に判断される。今後は、建築物の使用年数の長期化と長期使用建築物の増加や「ロングライフィル化」の必要性が相俟って、新規投資よりもリニューアル（リノベーション）志向が増大すると予測される。別表に「リノベーションの動機の主な内容」を示す。（次頁）

建築物を良好な社会的ストックとするためには、「ロングライフィル化」を目指して、少なくとも寿命を100年にする必要がある。建築主・設計者・施工者・運営管理者にとっても大

便か同 りら窓 の生

リニューアル(リノベーション)の動機		主な内容
付加価値の向上	イメージアップ	外装・内装・玄関ホール・廊下・エレベーター・水回り・サービス性
	性能・能力向上	時間外運転・単独運転・制御範囲の縮小、長寿命化
	OA化・インテリジェント化	個別空調・制御化
	新機能付加	低付加対策、計量化
	信頼性向上	維持保全容易性、予備機不足
回機復能の	劣化・老朽化の復原	外装タイル、屋上防水、機器および装置の劣化
	機能の回復	環境測定結果不良、制御内容不足、装置容量不足、漏水発生
向安全性の	法規適合	法改正、防火区画不十分
	危険防止	安全性向上、漏れの危険回避
	耐震化	耐震性向上
効率化管理の	省エネルギー・省資源化	熱源、搬送、熱交換器、システム、雨水利用、自動制御
	省スペース化	機器の集約化、直結給水システム、特殊排水継手
	省人化	BAS、BMS
	利便性	特殊機器の排除
その他	地球環境対策	ハロン・フロン、CO ₂ 、ゴミ問題
	高齢化・身障者対応	段差の解消、スロープ、手摺、サイン、トイレ、エレベーター
	用途変更	防災・防火区画、設備容量、避難階段(室用途および建築物用途変更)
	社会情勢	陳腐化
	運転資格者対応	冷凍機、ボイラー、圧力容器
	道連れ工事	設備、内装(床・壁・天井)、点検口、搬出入口、開口および補強

リニューアル(リノベーション)の動機 (建築・設備)

きな転換が求められている。このためには街並みと調和した魅力ある建築が大切であり、かつ、陳腐化を防ぐ“ゆとり”を確保するための「平面的なゆとり」と「断面的なゆとり」が肝要である。

特に、竣工時点から適正な建築・設備の維持保全が図れるよう、計画・設計段階から十分に配慮した維持保全計画のもとでの運営管理が不可欠である。これからリニューアル(リノベーション)は、建築・設備の予防保全のもと、適正な時期(竣工後5年・10年・15年・20年)に定期調査・診断業務の実施が肝要であり、かつ、計画的な予算措置が必要となる。また、整備しておく図書として、設計図書・設計意図伝達書および施工品質計画に関わる施工計画書・施工要領書などは、竣工図書の一部として保管すべき重要な図書類である。

今後は、設計者・施工者・運営管理者の責任体制を明確にして「責任ある品質管理と品質保証」を実践することであり、

早急に関係者のISO9000's、ISO14000's(国際標準化機構)対応が望まれる所である。

「家づくりの会」を通しての社会活動

十文字豊 (1969年度建築学科卒業／アルコープ・U／家づくりの会代表)



——「家づくりの会」は、住宅設計をメインに設計事務所を開設している設計者の集まりである。現在会員数25名で構成し運営している。会員間の出身校も10数校にまたがり、年齢層も30代前半の人から50代寸前の人までと幅広く、設計者一人一人の作風や個性が異なることを考え合わせると、このような団体は実際にはそういうといえる。……「家づくりの会」は、建主と設計者を結ぶパイプ役という役割をまず担っている。当初から会の活動も、連続講座や事務局での当番が中心となり、このような会を発足させたのが、設計者側からであるだけに、一部には会員の営利だけを目的とした団体と見なされることもあった。しかし、住宅が商品化されるなかで、はっきりNo!といえる職能人としての設計者が集まった時に、その集団は単なる会員の営利を目的とするだけでなく、対社会的にある一つの運動体としての指向性、及び問題意識をも、伴うようになったことは当然のことであった。……本来私達の仕事は、町医者的に地域に密着した地道なものでありたいと、考えている。どうにかして地域ごとに、そこに住むものが密着し、地域に責任を持ち、身近なところで仕事ができるようになれないものかと我々一同、共通の思いを持っている。今まで個々、バラバラに孤立して活動していた我々が「会」を介してとにかく集まり5年というという時が流れた。初めは3年もければ良しとしようと考えていた会も組織的にも経済的にもある程度の安定を得てきた。もちろん先に述べたように、会の将来への夢もあり、正念場はまさにこれからである。……限られた人達だけの会であってはならない。常に開かれた、柔軟な組織であり続け、さらに持続し続けることが大きな広がりの運動体と

なっていくことを信じている。

この文章は「家づくりの会」紹介ということで、『NICHE』のNo.12(1988年)に書いた記事である。それから10年、会も発足以来15年を迎えた。その間、会員数も35名になった。この人数は、今の事務局のスペースのキャパの限界といえる。個々の事情により2、3人の退会はあったが、ここ10年の経過の中でほとんどの会員がそのまま10才歳を重ねたということであり、この事実が今後会の将来への課題である。しかしながら、この10年「会」は地道ながらも会員同士刺激し合い、時には競い合ったり批判もし合いながら活動を続けてきた。家づくりの会としての活動はもちろん、社会に向けても微力であっても発言してきたつもりである。

それは、バブルの真ただ中から(われわれ会員にとっては、あまり関係がないように思われたが)やがて崩壊へと、そして先の予測不能な経済低迷期への激動の10年であった。

ここで現在の会の具体的な活動について、述べてみる。

- 定例会：毎月10日に目白の事務局に全会員が集まり、会の運営に関する事務的処理や今後の活動について白熱した議論は時には長時間におよぶ。その後のビールの味は格別。
- 常設窓口：平日の13:00～18:00まで順番で会員が、事務局で当番に当たる。開設当初は何の相談もない日の連続でもっぱら静かにワーキングできる日と決め込んでいたものが、ここ数年、一般会員(家を建てようと考えている人)よりのさまざまな問い合わせで大忙し、また事務局に直接訪ねて来られる方も多くなった。
- 連続講座：毎年、春と秋の2回一般会員を対象に、4、5回連続で催している講座である。すでに通算で28回を数える。われわれ設計者の役割について認識を深めてもらうことを主に、法律、材料、構造、設備、コストなどを何回かで学習してもらい、家づくりの何たるかを知ってもらう。
- ミニ講座：会員自身の責任において、自由にテーマを決め、事務局を使っての少人数での講座である。アットホームに進められるミニ講座では、受講者との会話も弾み、その後、設計依頼に進むケースが多い。
- 住宅見学会：会を通じて出会って建てられた住宅を会場として、建主を目の前にして一般会員そしてわれわれ会員が忌憚のない意見などやりとりがあり設計者にとっては甚だ辛い面もある。
- 家づくりニュース：毎月「家づくりニュース」を発行している。講座や見学会を、いつ誰が行うか、また各会員が独自にテーマを決め自由に誌面を賑わせている。一般会員、雑誌社、新聞社、また今まで会と接触があり興味を持ってくれた人たちを含め約500部発行している。



十文字氏設計による「保谷の家」。撮影／斎部功

●各研究会：ここまで記した活動は会の年間を通しての日常的に行っていることであり、実はこの間を埋めるように多岐に渡っての研究会がある。数人でグループをつくり、テーマ事に例えれば(左官、室内汚染、西川材、瓦、畳、電柱など)普段ちょっとした疑問や知りたいことを本からの知識ではなく、自分たちの足を使い現地を訪ねこの目で確かめることで現状把握と、今後の関わり方を考える。例えば素材の発見、開発といったことを、つくる職人、生産者、(大抵は真面目で細々とやっている方々)との交流を深め、直接生産者と関係を持つことで、コストを軽減し良質なものを設計に取り入れる。さらに傾きかけた地場産業に活力が生まれればと考えている。

実はこのような研究活動は『住宅建築』に、町場探検隊として5年に渡り60回掲載している。また、家づくりの会編著として会員が分担執筆した本がすでに8冊になった。これもふらふらしながらも15年という時間の蓄積があったからこそである。言いかえれば、それは会が单一目的のために組織された会ではないということだ。会で仕事に出会うということは一部分でしかなく会員同士のさまざまな会話、研究、旅、認めること、反発することなどを通して人生を共有してきたという実感があるからだ。

会が生き生きしたものであり続けるには、常に外に開かれていることであり、会員以外の建築家、研究者、建築産業に関わる広範な人々、あるいは、われわれのような他の団体との交流を深め、その中でわれわれは常に自己を客観視し足元を確認し合い、各自が個性的で自由であり、お互いに共感と反発という刺激の中から私たちの独自のらしさがさらに浮かび上がり、ささやかではあっても住宅全体に貢献できるような会でありたいと願っている。

母校の施設計画に携わって

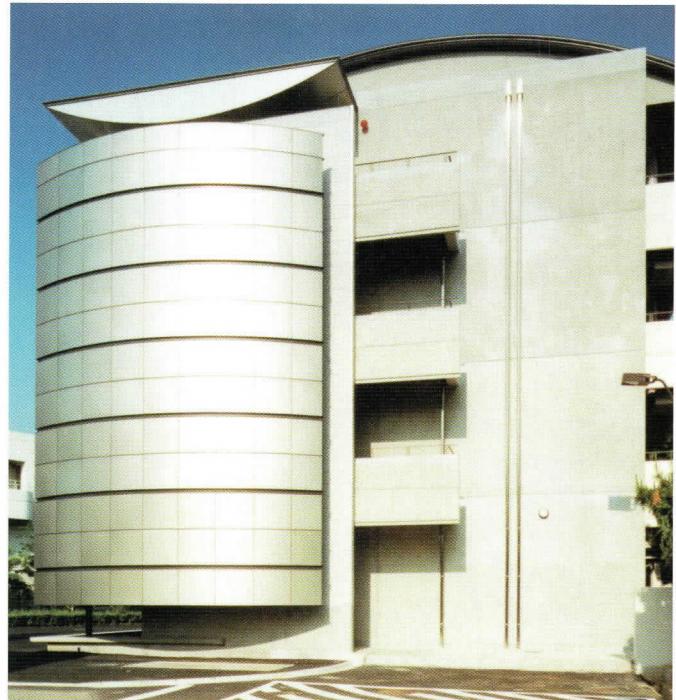
濱田昭夫（1972年度建築学科卒業／TAC・濱田建築設計事務所）



「総合研究所アドバンスト・マテリアル・センター」が竣工、開設されたことは、学園の充実の上から、また関わりを持った卒業生として喜ばしい限りです。

計画は1997年度（平成9年度）の新素材研究プロジェクトによる企画で、これに基づき山下司先生による建物の基本構想と併せて進められたものです。ハイテクリサーチセンター整備事業として文部省の採択がなされ、年度内1998年3月竣工。期限付の補助金がいただけることからも、すべてが第一義的にスケジュール重視の時間との争いの中で、実施設計の作業が基本設計のレールに沿って進められました。7月25日、設計図書提出まで実質1ヶ月半の期間、小高浩義、構造：山領一義、設備：志賀常雄・山下龍英の協力のもとに、確認申請手続きと同時に実施図が進められました。指名入札5社の内、前田建設に決定してより、地鎮祭着手後、早速決まって週一度行われる定例会では急ごしらえの実施図の調整と打合せに、絶対的工期と限られた予算の前に熱い日々が竣工まで続くこととなりました。

9月着工から翌3月初めの消防と役所の検査に続く20日の大学への引渡しまで（12月の晦日と正月休みを挟んだ）実質1ヶ月半の実施設計と6カ月間の工期を堅持し、すべてが前倒しに止まることなく一気にドミノ倒しのように駆け抜けたことが、終わってみて強く印象に残っています。すべての調整役を担った山下先生のバランス感覚の確かさ、手際の良さに接することができ、尊い経験をさせていただきました。



アドバンスト・マテリアル・センター。本誌「TOPICS」欄には、八王子校舎再整備計画についての記事が掲載されています。ご参照ください。

コンセプト

初段階の現実味のない曖昧な中で進められた基本構想の時点では、無理からぬ側面も理解できるものの、施工費の半額以上を設備工事が占めていること、延床面積の大半が設備機器と、その配管・ダクト・幹線のスペース。ボリュームのバランスから“設備タワー”的な建物となっています。

結果的には、建物があって設備が当てはめられ後から付い

てくることになりましたが、研究者また設備側から見た設備的発想による構成・提案は初段階でどのように触れられたのか……。また、この建物のテーマは、最も今日的環境に対しての適合性・負荷・軽減・素材・環境の問題を研究開発する研究棟です。テーマ性に対する理念を含め、発信する側と受けける建築側の間のテーマに対する議論・提案の場はどうだったのか……。今日、建物も急速に揺らいでいます。建物の特性とテーマ性を生かした野太い表現がもっとあっても良かったのではないかと反省しています。

点・線・面

今後も新しい計画が進められる今、単体としての建物を競うことが、点から線・面となり学園の景観が地域の風景となることを願うばかりです。キャンパスをランドスケープとして捉え、植栽・緑の広場・外部や道路との接し方・オープン化・地形・高低差・土手などを生かし、庭園・広場・風景・自然を造るといった発想を視点に、学内の豊富な人材と知恵の方々に期待する次第です。

最後に

この建物は、山下先生の存在と指導の元に竣工しました。そのプロジェクトの推進・実現に結び付けた理事長をはじめ、常務理事の方々、中澤宣也先生の大所・高所からのご尽力、施設課の方々のご支援、また学園に不慣れな私どもを陰日向となり支えて下さいました委員の谷口宗彦先生、そして外から大勢の方々の思いとともにこの建物が実現いたしました。ここに、関わることのできたお礼と深い感謝の念を申し上げます。

子育て後に社会復帰

桜井紀子 (1980年度建築学科卒業／一輝・筑波研究学園専門学校講師)



大学を卒業してから、十？年の月日が流れてしまいました。恥ずかしながら、この誌上をかり、改めて私の半生を振り返り、その軌跡を皆さんに知っていただきたいと思いペンをとりました。そして、それに共鳴する女性、応援してくれる男性が少

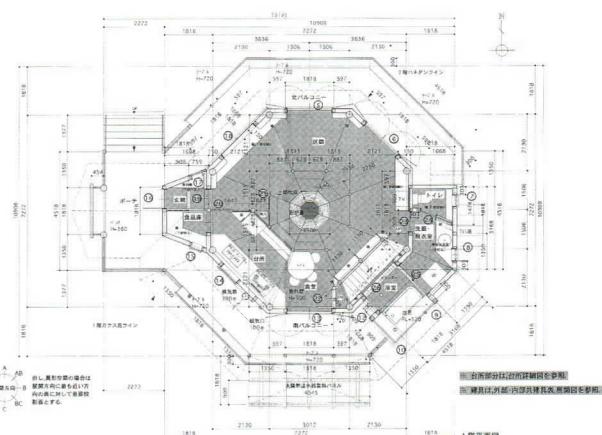
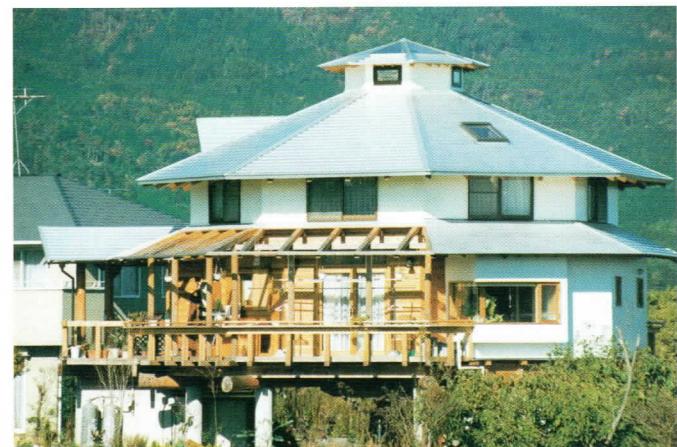
ながらずいらっしゃることを期待して……。

いま思えば、大学の4年間という時期は、人生の中でとても輝いていたと感じています。

大学の講義の中で、印象に残っているものはほとんどなく、何を覚えて卒業したのだろうという程度でした。構造を専攻したのは、特にそれが好きというものではなく、構造からデザインを組み立てていくことができたら素晴らしいしいのではないかと思ったことがきっかけでした。けれど、実際、十代田研に入つてみると、解析ばかりで、私にとっては、何一つわからず、何一つ興味のもてないものでした。いちばん出来の悪い学生でした。

就職も実家の近くの、当時できたばかりの研究学園都市内にある、建築研究所の、ある先生の助手として、生ぬるい生活(?)をしておりました。緑に囲まれた広大な敷地の中の新しい研究所として、そこに集まる若い男女(当時は研究員も女性も若かった)。毎日が楽しい日々の中で、年頃の女性が将来の目標と掲げる結婚という形式に憧れるのはごく普通のことだったように思われました。

ある日、私は、自分の頭の中の回路が閉鎖していることを



ある陶芸家の家——山間の長閑な所に建てられました。芸術家のご主人らしく一風変わったものとなりました。

切実に感じっていました。

時折、単行本の小説を読む程度だった私の頭は、もうすでに、記憶するという機能を閉ざしてしまったことを知ることになりました。同じ本の中の同じページを何日も開けているのに、そこから勉強が一歩も進まないのです。すでに一ヶ月以上も同じことを繰り返し覚えようとしているのですが、頭の表皮の部分からその文字や文章を撥ね返してしまうという現象が続いていました。まるでコンプレックスの固まりと化してしまったようでした。そうやって、何日も何日も、本と格闘しているうちに、やがて水が流れ込むように資格を得るために勉強していることが、頭の中に浸透してくるのがわかりました。

平凡に進学校に進み、平凡に大学に進みました。今、平凡という言葉を使っているのは、確たる将来の目標があったわけではなかったからです。建築という職業さえ、何なのか分からず、デザインするというきれいなものを、単に考えていたにすぎなかったように思っていたのです。当時の社会は、現在ほど女性に対して確たる地位を認めていたわけではなく、さらには確たる意志をもって行動する女性も数少なかったように思います。

さて、資格は得たものの、私のキャリアは構造解析の助手だけで、実際の設計・施工に関してはまるっきりの素人でした。地方の設計事務所では、もう若くはない、一級建築士の資格を持つ家庭というハンデのある女性を雇用することはありませんでした。さらに、悪いことには、バブルは崩壊しつつあり、人員削減の嵐が吹き荒れ、業務は手作業からパソコンの世界へと移っていました。私が安穏と暮らしているうちに世の中は激変し、もう、私の手の届かない所にいってしまったようでした。

そんな中で、地方事務所のまだ7割が手作業で設計業務を行っている中、CADをやってみないかという方に出会いました。CADはまるっきり初めての経験であり、若い所員には怒鳴られ、泣きながら覚えることができました。覚えたというよりはまるっきり知らなかったことが少しはわかったかなという感じでしたが……。けれど、そこの所長がとてもいい方で、ここはもう施工図しか描かない事務所だから、もし設計をめざすのであれば、私に遠慮しないで自分の好きな道を選択した方がいいのでは?と、おっしゃってくださいました。その一言で私は、自分の人生は、融通のきかないところまでできているわけだから、この先、この仕事でしか職業としてもてないと確信したわけです。

それから、家の近くにある(ちなみに、このあたりで家の近くというのは車で10分から20分の距離の所にある)専門学校で二、三の講義をもたせていただくことが決まりました。学

生と接することで久々に自分も若返ったようで、最初の内こそ気負いもあったのですが、この頃は、ゆっくりと学生とも会うことができるようになりました。教えるというよりは、むしろ自分が一緒に勉強しているようです。その間に今の事務所の人々と出会い、新しい事業にむけて、出発点を見いだしました。

建設業時代のどん底の時期にと思われるでしょうが、今を精一杯生きていくのが人生かと私はこの年になって思いました。設計の仕事をするということは、いや厳密にいえば、その仕事をとることは、非常に困難です。地方都市では、人と人とのつながりだけで事ができます。必ずどこかにつながりがあり、その秩序の中に入り込むことはとても難しいものです。建築という一つのビジネスにデザインという要素を組み入れることをしていきたいのが今の私の夢です。

家庭という枠から出てたくさんの方と出会いました。これも、一つの財産になりました。最後に、これを読んで下さった方々、書く場を提供してくださった方々に感謝したいと思います。ありがとうございました。また、この誌上で今後の展開を語れたら嬉しく思います。

でも、私は大工です

江森輝雄 (1981年度卒業／江森工務店経営)



私は、現在、埼玉県の東松山市で工務店を経営しています。親子でやっている小さな工務店ですが、地元で何とかやらせてもらっています。私は十数年前になりますが、2部の建築学科を卒業しました。

大学時代は、吉田倬郎先生の研究室で大変お世話になりました。また、現在でも倬友会と称する研究室の同窓会はできる限り参加しています。

さて、世の中が不況と呼ばれている中、建築業界も大変厳しい状態が続いている。それでも消費税5%になるまではまだ良かった方でした。その後は、悲惨です。私の町でも数年前から住宅展示場ができたりして、私の所のように小さな工務店も厳しい競争の時代になりました。近所でお世話になっていたお客様も、毎日入ってくる広告を目にするれば、坪単価〇〇円のハウスメーカーに目を奪われてしまいます。さら

に、この不況で大変な状況です。

そんな中、私は2年前から本格的にパソコンを導入しました。当たり前だと遅いと言われそうですが、町の小工務店ではなかなか使いこなせないのが実情で、入れても使わない所がかなりあると聞いています。私は、パソコンに設計業務と会計を任せることにしました。そうしないと肝心の現場が進まなくなってしまうのと、ハウスメーカーに対抗するには、最低これくらいはせざるを得ないと思ったからです。幸いその前の年、ウィンドウズ95が発表になり、今までよりはるかに使いやすくなりました。そしてJW-CADのおかげで、安くCADが導入でき図面を作成することができるようになったのです。また、仲間の一人が師匠となり、私をサポートしてくれています。彼のおかげで、疑問なことが出れば直ぐに教えてもらっています。

それから、いろいろなことが変わりました。まずそれまでは、お客様と図面の打ち合わせなどはスケッチブックを持参しラフなスケッチから、それを元に数パターンの基本図面を作成し再度打ち合わせをして段々と本設計へと向かうやり方をしてきました。しかし、それは、膨大な事務作業であり自分で設計し施工する私としては作図は重労働でした。でも、避けて通れないことです。しかし、JW-CADのおかげで、今までより速くきれいに作図することができました。

また、一度データとして記憶させておけば、変更やそれを元に違う図面も作図できるのです。お客様との打ち合わせもスムーズにできるようになりました。そして確認申請の図面や書類を全てパソコンで処理することができました。また、見積書や請求書の作成も簡単にできるようになりました。特に、見積書などは打ち合わせ後の変更が簡単になり間違いも無くなりました。今後さらにパソコンの導入を検討しています。インターネットはまだ勉強中ですが、是非ホームページを作り自分の作品を皆さんに見てもらいたいと思います。

パソコンで全てが良くなり、仕事がバンバン入るとは思いません。営業活動や研究をしないと、とても競争できません。でもパソコンは、使いこなせたらいい道具になります。私のように小さな工務店を経営している人は、導入を進めます。ただし、OAの商社の営業さんに言われるままに高額のシステムを組むのはやめましょう。高性能と使い安さは別問題です。
私のシステムは

パソコン IBM-APTIVA

プリンタ エプソンMJ-1050

CANON LASER-SHOTLBP

ソフト JW-CAD エクセルワード

かなり貧弱になってしましましたが、今でも十分使えます。特にJW-CADで描いた図面をFAXで相手に送れるようにしてい



(上) 愛用のパソコンを前に。

(下) 愛娘と地元の夏祭りで。

ます。これは便利です。

以上、パソコンに関しては、専門家の人に怒られそうですが、私の現状を書かせてもらいました。

地方の自営業の人は、地元の役を幾つも持たされます。私も青年会、商工会青年部、建築士会青年部、消防団などで肩書きをもらっています。しかし、これは大変なことです。でも、地方で生きる者はやらなければならないのです。とにかくプラス思考でこれからもやって行きたいと思います。写真は地元の夏祭りです。神輿の担ぎ手のまとめ役をしています。

この「同窓生からの便り」では、皆様からのお手紙をお待ちしております。身のまわりのこと、最近の建築業界のこと、大学のこと、事務所や会社の宣伝など、内容は問いません。

2,000~2,400字程度でお願いします。カット(写真、スケッチなど)数点と顔写真、卒業年度および簡単な略歴を添付してください。

原稿送付先→工学院大学建築学科同窓会

「同窓生からの便り」係

〒163-91 東京都新宿区西新宿1-24-2

建築学科の新しい風に聞く

●
トム・ヘネガン
(特別専任教授)

●
田島則行
(非常勤講師)

AAスクール、 建築教育、 建築設計、 そして工学院大学



トム・ヘネガン特別専任教授。



田島則行非常勤講師。

今回、新しく工学院大学で教えられることになったわけですが、お二人のこととを知らない方々もいらっしゃると思いますので、簡単な自己紹介からお願ひいたします。

●ヘネガン 私はイギリスのAAスクールで学び、その後AAスクールで14年ほどユニット・マスターとして教鞭をとりました。1990年より日本に来まして、大学で教えながら、アーキテクターとして教鞭をとりました。1990年より日本に来まして、大学で教えながら、アーキテクチャー・ファクトリーという事務所を設立し、設計活動もやっています。1992年に竣工した「熊本県草地畜産研究所」で、1994年度の日本建築学会賞をいただきました。最近も、「富山県ほたるいかミュージアム」「福島県オートキャンプ場」が完成したばかりです。

◇田島 私は工学院のOBなのですが、1991年にAAスクールに行きました。ちょうどヘネガン先生と入れ違いで、イギリスに行っていました。DIPLOMA を取得した後に日本に帰ってきました、1993年にTATA建築事務所を設立しました。最近は設計活動のかたわら、ワークショップ形式による教育活動を展開しています。「都市」をテーマに、先日も建築会館でワークショップ+エキジビションを行いました。また、マレーシアとシンガポールへも15人ぐらいの生徒を引き連れてフィールド・ワークをしてきたばかりです。

ヘネガン先生は、もともとイギリスで活動をしていらっしゃったわけですが、日本に来られたのは、何かきっかけがあったのでしょうか。

●ヘネガン 特に計画したわけではないのですが、まあ偶然ですね。1969年に勉強をはじめる、という思いは育っていました。そして、その頃、日本語の勉強もしました。次に空手を習いました。それから——今から8年ほど前ですが、AAスクールとロンドン大学で教えて14年ぐらい経っていて、そろそろ変化が欲しいとも考えていました。だから、とにかく東京に行って、3ヵ月だけいるつもりだったのですが、いまだに日本にいます。(笑)

◇田島 あの頃は、日本はバブルの絶頂期で、イギリスはドン底でした。だから、日本に来たのでしょうか？(笑) 私も帰ってくる時に、イギリスかアメリカで仕事をしてからと思っていたのですが、あちらでは仕事がありませんでした。だから、日本に戻ってきたわけですが、今は逆転していて、日本が大変ですね。イギリスの経済は比較的良いようです。

●ヘネガン 日本は非常に苦労していますね。イギリスの経済は長い間、良かったり悪かったりと、経済不況に何回もあってますから、建築家たちもそれを切り抜けるのに慣れているように思います。日本の建築家は、戦後の経済がずっと今まで上り調子であっただけに、ショックが大きいように見受けられます。イギリスの建築家たちは、もっとマイペースでやっている

のではないでしょうか。

建築学科の新しい風に聞く

日本とイギリスの建築家の待遇の違いはありますか。

●ヘネガン すごくありますね。設計報酬のパーセンテージ自体は似ているように思いますが、日本ではそれに設備や構造の設計費用が含まれているので、だいぶ違います。われわれの事務所——アキテクチャー・ファクトリーは小さい事務所ですから、利益が出なかったり、赤字になったりしても大したことはありませんが、日本の大手事務所ではさぞかし大変でしょう。例えば、あの有名なジェームス・スターリングはイギリスではそれなりに食べていけるペースだったけれども、もし日本での仕事だったら、やっていくのは無理だったのではないかと思う。日本の建築家をめぐる状況は、誰かが変わらなければいけないなと思います。

◇田島 日本の一級建築士とRIBAの資格に対する考え方の違いがありますね。イギリスの場合だと、社会的見識や意義も含めた判断力を問われているような気がしますが、日本ではもっと、設計技師的な意味合いが濃いように思います。そういう部分が報酬の考え方の違いになってきているのでしょうか。

●ヘネガン 教育の面でも違いがある。日本での建築教育は、建築設計にまつわる業務の訓練をするという色合いが強いように思います。職人的なモノづくりの世界から建物が生み出されてきたという歴史のためかもしれません、繰り返し訓練する側面が強いように感じます。一方、イギリスの場合だと、音楽やファッションやアートや哲学など、さまざまな情報が学校に行き交っており、決して単純な専門教育ではなく、もっと社会的で大きな判断力を養うための教育ということがあります。

◇田島 もっと、自由で幅広い……ですね。最初から、建築と社会と文化がリンクしたところで、建築のあり方を考えることができます。そういう環境がありました。

教育の話が出たところで、教育方法などについてお聞かせください。

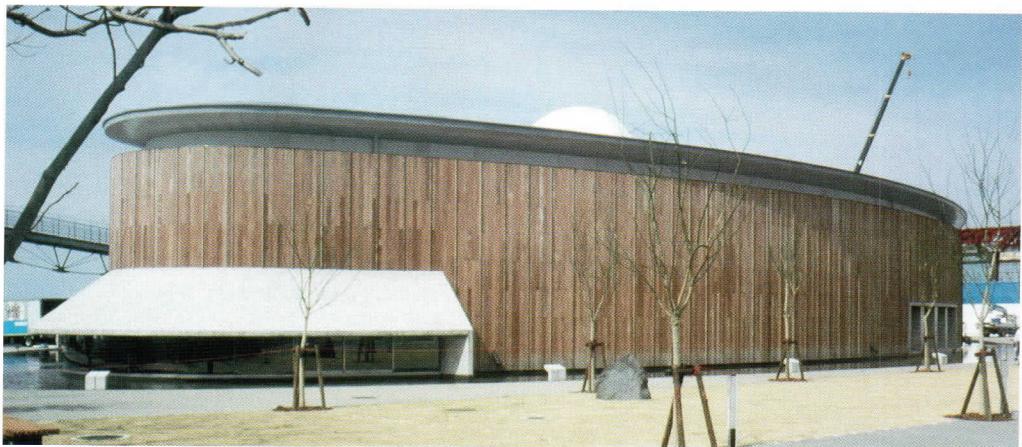
●ヘネガン 私自身は、アーキグラムのメンバーだったロン・ヘロンに習ったのですが、彼は決して、私にどうやるべきかを教えてはくれませんでした。どう立ち向かうべきか、どのように解決すべきかという、判断の方法を教えてくれたように思います。

教えるということは、私はサッカー・マネージャーのようなものだと思っています。やはりアーキグラムのメンバーだったピーター・クックなんかは、学生の作品についてではなく、課題から展開していくいろいろな話題を広げていったりしていました。それを聞くこと自体がエキサイティングでしたし、刺激になりました。先のロン・ヘロンは、学生に自信をもって問題に対処することを教えてくれました。他にも面白い先生方がいましたが、みんなそれぞれ違うテクニックでもって教えてくれました。

◇田島 私の経験でも、AAスクールでは既存の方法なんかは一切、教わらなかったですね。それよりもむしろ、考え方とか、自分で解決しビルドアップしていくこと……、つまり建築なんですが、そういうことを学んだように思います。



(上2点) 熊本県草地畜産研究所。設計／トム・ヘネガン。1994年度の日本建築学会賞作品賞を受賞。



富山県はたるいかミュージアム。設計／トム・ヘネガン。



福島県オートキャンプ場。設計／トム・ヘネガン。

●ヘネガン　自分で発見して価値を見出し、自分で作り出す能力を身につけることは、先生にとってみれば骨の折れることです。でも、そのほうが建築家教育としては良いと思います。

例えば、AAスクールでは、4人の学生とディスカッションし、チュートリアルをするのに丸一日かかりました。また、先生側の姿勢として、日本では先生がやり方を指定する「こうやりなさい、ああやりなさい」という感じがしますが、AAでは学生を楽しませ、興味を持ってもらうのが非常に大事なことでした。学生が入り込めるようなスタディ・プログラムをつくり、リーダーシップをとることが教育の重要な要素だったといえます。

◇田島　　AAスクールの教育の特徴といえばユニット・システムですが、今では多数のイギリスの建築学科が採用するまでになりました。アメリカなどでも少しづつ採用されてきているように思います。これは研究室のようではありますが、かなり違います。ユニット単位で、先生の教育の方針によって設計を自由に押し進めることができ、1年で1プロジェクトとなっています。こういうと、なんだ楽しさないかとおっしゃる方がいると思うのですが、当然その密度と内容量と質は大変に高い。日本の大学の基準でいうと、毎週のように最終提出があるようなペースで、それが1年間続きます。

そして、その内容や方法は、それぞれのチューターに任されていて自由なのですが、1年の最後にジュリーによって審判を受け、学生の作品も先生自体も批評にさらされるわけです。これがまたすごい討論で、イギリスの国会の議論のような感じでしょうか。そこで、学生の評価が悪いと先生の契約にまで影響を及ぼし、次年度の契約更新はなくなります。つまり、ものすごい緊張感のなかで、それぞれに1年間の自由を与える代わりに、それなりの深さと内容のあるモノを作らなければ、即クビですよ……というシステムなわけです。当然、学生にとっても大変で、私の時でも、大学院に相当するディプロマを2年間で卒業できたのは10%以下だったのでないでしょうか。私自身もすごいプレッシャーで、胃をやられるかと思いましたが、何とか切り抜けました。(笑)

1970年代頃の工学院大学は、武藤章先生とか、波多江健郎先生、山下司先生など、海外での研究や実務を経験された若い先生たちがフレッシュなエネルギーで大いに議論を交わし、活気のある学校でした。今では学生の数も増えているので、同じ雰囲気があるのかどうか分かりませんが、大変にエキサイティングでした。また、今後、子どもの数が減って学校間の競争が激しくなりますから、そういうユニーク・システムといった内部からの変革をしたり、留学生やさまざまな環境での教育を経験した先生が多く本学で教えていただいたりして、魅力ある工学院の建築教育を作っていく、能力のある学生が集まってくれるようにしていく必要があると思いますが……。

●ヘネガン　若い先生が、より刺激的で活気があるとは限りませんが……(笑)。例えば、ロン・ヘロンはもう60歳を越えていますが、10年ほど前にイーストロンドン大学というそれまでは冴えない大学があって、でも彼がそこの建築学部長に就任するやいなや、面白くて能力のある先生たちが集まりはじめ、その噂を聞きつけた学生たちがアツという間にたくさん入学して

きました。また、ベルラーへというオランダの大学があるのですが、いつのまにか優秀な先生たちが集まり、建築界の大人たちがそのことに気づくはるか前から、学生たちはもっともっと敏感にその情報に反応していました。ここ2~3年の間に私が書いた留学の推薦書は、いつのまにかベルラーへばかりになってしまいました。

建築学科の新しい風に聞く

最近は留学生が工学院で勉強していたり、また卒業生が海外に行ったりということで、OBや在校生がチャレンジして、頑張っている人が増えてきました。社会人ドクターに挑戦している人たちもいますし、最後に1万5,000人のOBに何かエールを送っていただけないでしょうか。

●ヘネガン イギリスでは同窓会というかたちで何かアクションするというのではないけれども、教育の現場でのOBとの関わりは、すごく強いです。AAスクールでも、OBがいつも学校に戻ってきて、いろいろなレクチャーをしたり、ディスカッションをしたりと、さまざまな社会の現場での問題を交換する機会がありました。

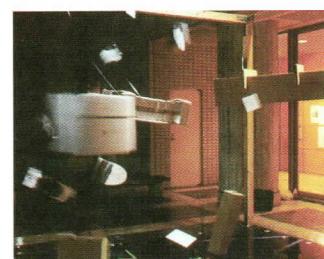
例えは、毎晩、イブニング・レクチャーというがあって、外からOBを含めいろいろな人たちが招待されていました。日本は、逆に同窓会といった繋がりは強いにも関わらず、教育の現場との繋がりが非常に弱いと思います。「Old Boys! Back to School!!」(OBよ！ 学校に戻って来い!!)。(笑)

◇田島 工学院は新宿にあるし、社会人教育と大学や大学院教育をシンクロさせて、さまざまな議論が起きていくようなイブニング・レクチャーみたいなものがあれば、もっと面白くなると思いますね。AAスクールもロンドンの都心にあることが、仕事帰りのOBを引っ張り込める大きな理由になっています。

もう一つのAAスクールの特徴が、学生の国籍がさまざま……当時でイギリス人が30%、その他が70%ぐらいで、より真剣に率直に表現されることが要求されます。そういう違ったバックグラウンドを持った人たちが集まり、交流した時に生まれる教育のダイナミズムがあったし、また国境を越えた大学間の交流も盛んでした。こういうことは日本の大学でももっとやるべきだし、特に新宿に構える母校には、インター・ナショナルでインター・エクスチェンジなダイナミックな大学教育の可能性を期待したいですね。

●ヘネガン そうそう、AAでのそういったレクチャーの姿勢はオープンで、先生方も、誰が紹介したとか紹介されたとか、あの人を紹介して良いのかどうかなんて、誰も気にしません。面白い建築家がロンドンにいるらしいと聞くと、とにかく連絡をとって掘まえてレクチャーに引きずり出したりする。そういうことを、新宿にある工学院ならできると思います。オープンで生き生きとした建築教育が……。

本学に留学生が来たり、卒業生が留学して戻ってきたりと、わが工学院大学にぜひもっとチャレンジ精神旺盛なところになって欲しいと思います。先生方も大きな目標を経て、ハードルを越えて見えてくる新しい世界を広げて、学生やOBを励ましていって欲しいと思います。本日は、長い間、本当にありがとうございました。



1998年7月に建築会館において行なわれた「新世紀末—東京」展における学生によるワークショップワークショップ作品。



I邸。設計／田島則行。

■トム・ヘネガン (Tom Heneghan)

1951年	イギリス・ロンドン生まれ
1975年	新建築住宅設計競技に1等入選
1976年	AAスクール（アーキテクチャル・アソシエーション）卒業 AAスクールで教鞭をとる（～1990年） 数々の国際設計競技で受賞
1991年	くまもとアートボリス都市計画事業に参画 東京にアーキテクチャー・ファクトリーを設立
1992年	熊本県草地畜産研究所（1994年度日本建築学会賞を受賞）
1995年	広島県三良坂町より依頼を受け、子どものための夏のバ ンガローを設計（SDレビュー賞を受賞）
1998年	富山県ほたるいかミュージアム、福島県オートキャンプ場

■田島則行 (たじま・のりゆき)

1964年	東京生まれ
1993年	AAスクールでディプロマを取得 TATA建築事務所を設立
1998年	「新世紀末都市—東京展」に出展（建築会館） 著書『Tokyo—a guide to recent architecture』（エリプシス出版） 『Tokyo-labyrinth City』（エリプシス出版）
共訳	『シティ・オブ・ビット』
	都市論を専門としており、レクチャーやワークショップなどを多数 行っている

■また逢う日まで

来春、ご定年で退職される教授がいらっしゃいます。永い間、本学のために尽くされたことに感謝を捧げるとともに、いつまでもお元気で過ごされ、本学を見つめていて下さることをお願い申しあげます。再会を、楽しみにしています。

■山崎研究室

山崎弘

専門分野：建築史

生年：1931年

出身大学：早稲田大学理工学部建築学科
スペイン国立サラマンカ大学哲文学部美術史研究室

本校奉職：1955年

主な著書：『総覧日本の建築・東京』（共著／1987年／日本建築学会編／新建築社）／『東京の近代洋風建築』（1991年／東京都教育委員会）／『志茂家書院調査報告書』（1992年／東京都教育委員会）

ひとこと（『教員プロフィール／1997年』より）

社会生活を営むには歴史学を学ぶ必要がありますが、建築史学も同様に建築家や建築技術者を志すものにとっては建築史を学ぶことによって常識を養うと同時にものの考え方、創造性を引き出すうえに欠くことのできない学問であります。研究室では歴史を正しく理解し、建築の真実性を深めるような研究を目標に努力しています。

建築史学が熱い

中嶋耕（1982年度卒業／ケーエス・クリエイト）

在学当時、山崎研究室は旧新宿校舎の7階にあった。研究室の入り口で入室許可を求めるとき、本棚で遮られた視界のその奥から、「はーい、どうぞ」と、多少もの憂げな調子の山崎先生の声が聞こえた。山崎先生の「はーい、どうぞ」を聞くと、今でも私はたちまち、あの頃の高揚していた日々を思い出すことができる。1982年（昭和57年）春、あの懐かしい研究室に別れを告げてから、すでに16年になる。

あの頃、山崎研究室は、伊藤鄭爾学長（当時）の研究室とともに、建築史に関心を寄せる学生の熱気に溢れていた。

わが山崎研には、何代目かの女性補手として山崎研出身の佐藤和恵さん（旧姓）がいて、学生の良き相談相手になってくれていた。1年後輩の私を初めとして、多くの学生たちが研究室通いに励んだ一因は、佐藤先輩とのおしゃべりにあった。建築学科全体でも、まだ女子学生がわずかであった時代に、山崎研は春田さんと久村さん（いずれも旧姓）という2名もの愛らしい女子学生を擁していた。佐藤先輩との女性トリオは、山崎研の華やかな黄金時代を彩ったのである。

昭和50年代、建築史を取り巻く世界は、「歴史文化環境」の尊重という、今では当たり前ともいえるまちづくりの基本理念の胎動期にあった。妻籠宿の再生を始めとする歴史的町並みの保存活用や、近代洋風建築の保存調査などが建築史学者らの手で次々に実を結んだ。そればかりか、小樽運河の保存・活用問題では、埋め立ての是非が社会問題となり、人々の強い関心を呼んだ。そうした時代の空気を、私たち山崎研の学生たちも身体で感じていた。古民家や近代建築の調査といった各自の研究テーマをこなすだけでなく、東京のまちの歴史探訪や、地方の歴史的町並みの見学旅行を行った。「歴史文化環境」の実体験を通じて、私たちは「快適な住環境」に欠かすことのできない何かを、肌で感じ取った。

あの熱い時代に立ち会うことのできた幸運と、建築史学の醍醐味を教えて下さった山崎先生に心からの感謝を申しあげます。

最終講義予定

1999年3月13日（土） 15:30～16:20

■荻原研究室

荻原正三

専門分野：建築計画（公共施設）

農村計画、集落計画

生年：1932年

出身大学：東京大学工学部建築学科
東京大学数物系大学院修士課程建築学

本校奉職：1963年

主な著書：『新訂建築学大系26都市計画』（共著／1965年／彰国社）／『今和次郎見聞野帖・歐州紳士淑女以外』（編著／1990年／柏書房）／『集落拡大と集落基盤整備計画』（編著／1995年／農林統計協会）

ひとこと（『教員プロフィール／1997年』より）

建築計画は建築設計の基礎となるもので、建築と生活に関わる住まいからまちづくりまでの広い分野をカバーし、建築の機能、構成、寸法、規模、集合、空間心理などを様々な手法を駆使して研究し成果をあげてきました。最近は住み手の計画づくりへの参加や障害者の立場にたって計画のあり方、住民参加の集落計画づくりなど新たな分野の展開にも取り組んでいます。

荻原研究室の計画研究35年の歩み

岩田俊二（1971年度卒業／1973年修士過程修了／地域計画総合研究所）

荻原研究室は1998年で35周年になり、500人以上の卒業生と35人余の大学院修了者を送り出してきました。その中で宮城、東氏が大学に残っています。研究室で行ってきた研究テーマは二つに大別できます。医療福祉、教育、文化コミュニティ施設などの地域施設についての研究と、この地域施設の研究を基礎とした地域計画についての研究です。地域計画についての研究対象は主に農村地域ですが、比較対象としての

都市地域についても常に視野に入れてきました。

35年に亘る計画研究の歩みを概括するために、研究のエポックを紹介します。卒業生は次のような研究に多かれ少なかれ関連した勉強をし、巣立ちました。まだ高度経済成長期の1960年代は八郎潟新農村計画の中心集落計画、日本の援助による当時の南ベトナム国サイゴンのチョーライ病院計画、筑波研究学園都市関連地域計画など。低成長期に入った1970年代は都立三田高校計画設計、農村地域のコミュニティ施設である農村環境改善センターの計画設計（その後90年代まで継続中）、既存集落の総合的な改造計画である常滑市矢田地区整備計画など。

バブルへの移行期の1980年代は、農村土地利用秩序形成手法や埼玉県三富新田集落などの環境保全手法に関する一連の研究、これらの研究は荻原先生の学位論文（1996年度農村計画学会賞論文賞受賞）に結実しました。バブル崩壊以後の1990年代は、児童生徒の減少による教育施設の遊休化に対応する目黒区などの学校施設整備分析、住民参加型の集落整備計画策定など。その他1980年代から中国、フィジー、ドイツ、チェコなどの海外調査による集住文化の比較研究を継続してきました。

以上の研究のように「社会に連携する研究を重視する」荻原先生の熏陶を受けた卒業生たちが、今後も荻原先生の期待に応える活動をしていくことと思われます。なお、研究室では近年の研究を取りまとめた『彩適空間への道—住民参加による集落計画づくり』（荻原正三監修、岩田俊二他著、（財）農林統計協会刊）を最近上梓しました。

最終講義予定

1999年3月13日（土）13:30～14:20

■廣部研究室

廣部達也

専門分野：建築空間論、建築設計論

生年：1932年

出身大学：東京大学理学部数学科
東京大学工学部建築学科
東京大学大学院数物系研究科
建築学専攻修士課程中退

本校奉職：1992年

主な著書：『新訂建築学大系6 建築造形論』（共著／1985年／彰国社）／『デザインの図学』（共著／1985年／文化出版局）

ひとこと（教員プロフィール／1997より）

建築空間の把握には感性が深く関わっているので、これを論理的にとらえるのはたいへん難しいのですが、これを素直に捉えてみると意外と一定の論理的構造を持っていることがわかります。この事実に立脚して歴史的な建築論を分析てみると、これらを通底する構造のあることもわかります。ということは、建築設計の方法論構成の可能性が見えることになります。私はこの点に希望を持って研究を続けていきます。

廣部研の思い出・感想

伊藤秀明（1995年度卒業／1997年修士過程修了／日本設計）

私が廣部先生にお世話になったのは、工学院に編入学した年の後期から大学院修了までの3年半の間です。廣部研で印象に残っているのは毎年恒例の夏合宿です。特に初めての夏合宿の課題エスキース・チェックで、私は何を勘違いしたか、はじめからハードラインでガチガチの図面を先生にお見せしたのを覚えています（当時、私は定規を使ってハードラインでエスキースをする癖があったように思います）。廣部先生は

私の図面の上に黄色いトレペをかけ、太い鉛筆を使って設計のヒントとなる線をとても柔らかな線で加えて下さいました。私にとっては、そんな設計へのスタートの仕方がとても新鮮で設計への第一歩を廣部研究室で学んだと思っています。

廣部研究室の思い出

三次正訓（1995年卒業／1997年修士過程修了／フリー）

研究室に入って廣部先生にはたくさんのことをお教わりました。建築に関する知識、建築の捉え方、観察の仕方などいろいろです。でも、なによりも大きかったのは、建築は楽しいものなんだというのを教わったことです。このことで、私の建築に対する取り組み方が180度変わったように思います。

大学院受験に失敗したとき、仕事を辞めたとき、建築が嫌になりかけたこともあります。そういうときは先生から教わったことをいつも思い出していました。廣部研を卒業した人全員が思っていると思います。私たちも、先生のように建築を楽しみ、好きでいたい、と……。そして、先生のおかげで一生建築をやっていく勇気がわきました。本当にありがとうございました。

最終講義予定

1999年3月13日（土）14:30～15:20

建築学科だより

※このページは工学院大学建築学科が「NICHE」誌上を借りて最近の建築学科の様子をお知らせするページです。

＜ご無沙汰しています-1＞ 第1部の近況

望月洵（工学院大学建築学科教授／主任教授）



建築学科は来年度で創立45年となります。社会状況の変化を受けて建築学科もまたいろいろな難問を抱え、改変期にあります。このため、建築学科の現況を伝え、卒業生の建設的なご意見を改変の動勢に反映させたく、この「建築学科だより」を設けることになりました。本年度は予算措置が遅れたために『NICHE』に便乗しますが、次年度以降は再考したいと思っています。

以下に建築学科の現況を、またいま抱えている問題を述べたいと思います。

■教員構成

右の表は建築学科創立以降の専任講師以上の教員名です。数字のない方はすでに退任されております。2番目の数字は定年退職時の西暦年を、※印は建築都市デザイン学科へ移籍予定の教員を示します。表から読みとれますように本年度をもって荻原さん、廣部さん、山崎さんが定年に達します。また、10年度までには建築学科の成長期を担った60年代までの教員が退任されます。

教員構成で抱える難問は、次年度に建築学科が建築学科と建築都市デザイン学科に分離するのに伴い、建築学科をどのような学科に変容させていくかの方針を決めることと、これに対応した教員を集めることです。分離が決まったのに、このような問題を未決にしておくことは端から見ると不自然でありますが、目下論議を煮詰めているところです。少なくともクローン学科にはしたくないと思っております。

■学生と教育

このところ、学生数は1部300（人）、2部120（人）程度を保持しています。見ようによつては、日大や東海大と同じようにマスプロ教育という負の面を担ってきたといえます。確かに300という数は大きすぎます。これが2学科への分離の要因

の一つでもあります。次年度の入学生からは建築学科190（人）、建築都市デザイン学科70（人）という構成になります。

創立以来半世紀を経過すれば、学生の考え方や、振るまい方が変化するのは致し方ありません。どのように変化したかは、いわくいいがたいところです。自分自身の軌道修正を努めて心掛けますが、50代～の教員をして、違和感を抱かせ、教育への情熱を失わしめる学生が多くおります。しかし、キラリと光る学生もおります。このような学生が多くなるよう努力したいと思います。

少子化に伴い、入学志願者の数は減少しています。次年度はさらにドラスティックに減るのではないかと危惧されています。また、入学生的学習力の低下もひしひしと感じとれます。かつて建築史学者の藤岡道夫氏が、大学の教育は不出来の学生を対象にするのが本来で、出来のいいのは自分で学習すると、書かれています。これも一理でありますが、なかなか達観できません。攻玉の成果は玉に近い石を攻がくことから得られます。一方、玉に近い石を集めるのは、攻がく立場の教員が優れためききであり研ぎ師でなければなりません。深く自省しているところであります。ここ10年が大学の分岐点と考え、教育環境の整備に万全の努力をしたいと思います。

■研究と授業

大学も自己評価を求められ、教員の研究業績の評価も厳しくなっております。このためか研究活動は往年に比べて活発といえ、本年度の建築学会大会の発表数は70編台に達しました。10数年前の30編台、60年代の10編台を思うと努力していると自賛できます。もっとも玉ばかりでなく、私のところのように小砂利もあります。小砂利もまた堰堤を堅固にするのに必要と慰めています。これらの成果の多くは修士課程の院生と卒論生の活動に負うものであり、学科としてまた教員として感謝の意を表すものであります。修士課程の学生は恒常に100人の大台を維持しています。多くは専攻の研究に専念していますが、駄目院生もまた徐々に増えてきたことも事実です。現在、院卒であることだけで社会的評価は得られなくなっています。厳しい指導体制と向学心の喚起が必要と考えています。

研究業績の評価に加えて、教育業績の評価、さらに学生による評価も導入される機運にあります。自分勝手な講義で自己満足してはいけないということです。孟子のいう「無為に化す」をもって大学教育の本質と考えている小生にとっては居心地の悪いことです。これも時代の流れであり、投資と成果という観点に立てば当然かとも考えます。ただ、真摯な学生の評価を受けたいと思います。授業中にジュースを飲み、「Tokyo Walker」を見、駄辯を弄しながら教室にいる学生の評

校友会のホームページアドレス <http://www.mesh.ne.jp/kkyoyukai/>
本部役員宛メールアドレス kkyoyukai@mx5.mesh.ne.jp
事務局宛メールアドレス koyujimu@mx6.mesh.ne.jp

建築学科同窓会のホームページもありますので、皆様からのご意見・ご要望をお待ちしております。

価だけは迷惑至極であります。

■就職

建設業の構造不況の波が、学生にもろに打ちよせています。40余年の間でこのような状況はオイルショックを上回るものであります。昨年度以来、俗にいう Pooにならざるを得ない学生がかなりいます。「建築学科だより」の創刊の理由の一つは、卒業生から多くの情報を得て、このような状況の解決の一助にと考えたことがあります。リストラの折ではありますが、よろしく学生のためにご配慮いただきたいと思います。

■その他

退職：中嶋泰さん（都市計画）、小島勝朗さん（都市計画）

新任：島崎勉さん（都市計画／前建築研究所所長）＝教授

トム・ヘネガンさん（建築デザイン）＝特別専任教授

名誉教授：中嶋泰さん

昇格：教授＝沢岡清秀さん（建築デザイン）

安原治機さん（建築計画）

助教授＝野沢康さん（都市計画）

久田嘉章さん（建築構造）

受賞：広沢雅也さん＝第36回空気調和衛生工学会論文賞

中島康孝さん＝ヒートポンプ・蓄熱センター「蓄熱に関する研究・開発に多大な貢献」したと表彰を受ける
臼井勇人君らグループ（大学院生）

=建築士会コンペ「コミュニティコアとしての小学校の再生」金賞

宮本貴弘君らグループ（大学院生）

=第5回秀光・学生コンペティション入賞

大森拓真君（大学院生）

='97グリーンデザインイン山形準入選

佐藤弘規君（学部4年）

=すまいづくり設計コンペティション優秀賞

佐藤弘規君（学部4年）

=日本建築センター「住まいの達人」コンテスト佳作

西尾順文さん（同窓生）

=第9回川口市都市デザイン賞

前田卓さん（同窓生）

=日本建築学会東北支部第18回東北建築賞

中島一貫君・茂呂幸雄君（大学院生）

=日本建築学会第8回優秀卒業論文賞

の双肩にかかるることは重々に自覚しています。しかし、卒業生諸兄諸姉の社会的活躍もまた建築学科の評価に関わり、高めてくれます。よろしくお願いします。次回はより充実したものにしたいと思います。

【計画系】

堀越三郎、山崎弘(55～99)、樋口清、荻原正三(63～99)、木村幸弘(64～05)、
宮城千城(67～05)、東正則(68～10)、安原治機(71～10※)、伊藤鄭爾、初田亨
(71～14)

【デザイン】

平岡正夫、天野太郎、武藤章、山下司(57～02)、波多江健郎、南迫哲也(09～
02)、鈴木達己、望月大介(61～07※)、谷口宗彦(71～13※)、廣部達也(92～99)、
沢岡清秀(92～19※)

【都市デザイン】

大庭常良、中嶋泰、小島勝朗、渡邊定夫(93～03※)、野沢康(95～31※)、島崎
勉(98～10※)

【構造系】

正木三省、十代田昭二、望月洵(56～01)、篠原一之(58～01)、横田道夫、倉持
道夫、保岡豊、大塚毅(69～10)、宮沢健二(69～10※)、近藤龍哉(82～20)、
広沢雅也(92～05)、久田嘉章(95～28)

【環境系】

足立哲夫(62～99)、中島康孝(63～01)、水野宏道(70～03※)、大橋一正(72～
12)、宇田川光弘(77～13)

【生産系】

下元連、鈴木鎮雄、難波蓮太郎(58～00)、吉田辰夫、今泉勝吉、吉田博郎(78
～14)、遠藤和義(93～27)、嵩英雄(95～07※)

■終わりに

建築学科の現況と問題点を多分に日光の反省猿のような文
体で述べてきました。建築学科の興廢は一に二に教員と学生

建築学科だより

※このページは工学院大学建築学科が NICHE 誌上を借りて最近の建築学科の様子をお知らせするページです。

<ご無沙汰しています-2> 第2部の近況

初田亨（工学院大学建築学科教授／主任教授）



2部建築学科の定員は110名であるが、入学試験は志願者のキャリアによって、一般入試、推薦入試、編入学試験のうちのひとつを選ぶことができる。それぞれの募集定員も約80名、約30名、約10名と別になっている。このうち推薦入試は公募制と社会人があり、それぞれ約10名、約20名と募集人員にも区別がつけられている。

社会人推薦とは、高校卒業後6ヶ月以上定職に就き、企業や官庁から推薦を受けた人を対象にしている。ただし、推薦者たる勤務先に5年以上勤務している人は、勤務先の推薦は必要としない。就職しながら、より高度な専門知識を習得したいという希望を持つ人に開かれた制度である。

編入学試験は、大学を卒業して学位を持っている人や高専の卒業者などを対象にしたもので、建築士の受験資格取得や、学習継続、生涯教育を目的に受験する人などがいる。

1998年度の入学者をみると、推薦入試のうち公募制が11人、社会人が22人、一般入試が52人、編入学が21人いる。編入学の学生は1年生に籍を置くわけではなく、2年もしくは3年に籍を置くので、1年生の学生数は定員より少なくなるが、2年以上の学生数はほぼ定員数になる。

かつては、1部と同じカリキュラムで授業をすることが工学院大学第2部の特色になっていたが、新宿校地再開発に伴い2部の募集を停止した後、1991年度に再募集した時から1部とカリキュラムを変えて出発した。2部再開後に1部とカリキュラムの内容を変えたのは、2部に在籍する学生そのものが変わってきたためで、直接的には、定職を持って入学する学生が減ってきたことによる。2部に対する社会の要求が変化してきたのである。1部と異なる内容を持たせることで、2部に特色を出そうとしたのである。社会人推薦や、学士などの編入学を希望する人などを対象にするようになったのも、このような理由による。1997年度には編入学の志願者が61名もいたが、その時の内訳は4年制の大学で理系の卒業生が7人、文系が29

人、短大の卒業生で理系が10人、文系が12人、高専の卒業生が3人と、文系の4年制大学を卒業した人が最も多くなっている。

幸い建築学科については、現在のところ受験者も多い。一般入試の受験者をみると1998年度には288人おり、その2割ぐらいが試験に合格している。しかし受験者の変化をみると、1996年度の395人、1997年度の339人と毎年減る傾向にある。18歳人口の減少で、大学が冬の時代に入ったといわれて数年たち、10年後には大学を希望する受験生の大学全入の時代がくると計算されている。

18歳人口の減少で、最初に大きな影響を受けるのは専門学校で、次が2部と考えられている。工学院大学でも建築学科はまだ良い方で、学科によっては2部の受験生が少なく、大学として学生の質を維持するのに問題が生じはじめている所もあるという。

工学院大学でも、2部をどのように変えていくべきか検討を重ねている。第2部運営委員会によって定期的な会議を開き、どのような学科の可能性があるかなどを検討している。委員では社会人や編入学の学生を増やすことや、新宿に位置することを最大限に生かした学科をつくることなどが検討されている。まだ方向が定まったわけではないが、会議の中で、現在いくつもある学科を整理統合したり再編成していくこと、社会と連携をもった学科の設置や、授業の昼夜開講制など、2部を今までと大きく異なった内容のものにしてはどうかとの意見も出されている。

建築学科だより

※このページは工学院大学建築学科が NICHE 誌上を借りて最近の建築学科の様子をお知らせするページです。

<ご無沙汰しています-3>

都市建築デザインコース 建築デザイン専攻

谷口宗彦（工学院大学建築学科教授）



■いよいよ新学科が来年度よりスタート

工学院大学に「建築学科」が設立されて42年を迎え、卒業生の数は大学院生を含め1万5,000余名を数えるに至っています。その間に「設備学コース」の一時設置。その後、計画・構造・生産・環境設備の「4専攻制」に改組してからも、すでに25年が経過しました。また、超高層大学棟の完成した1991年4月には「建築学コース」「都市建築デザインコース」の22コース制を実施しました。これは多人数の定員を分割し、受験日も分けて募集するなど、マスプロ教育のマイナスイメージ解消に努めるとともに、本学におけるデザイン教育の特化を図るのに役立ってきました。しかし、いよいよ来年度からの「都市建築デザインコース」をさらに発展し「建築都市デザイン学科」と改めることが決定しました。定員を43年ぶりに分割し、母体となる「建築学科」と2学科でスタートすることとなります。

来年度から「建築学科」は、文部省認可の「既存の臨時定員増定員枠40名」の中から30名を加え 190名で、新学科は10名を加え70名でスタートしますが、ゆくゆくは160名と60名の少数定員にしてゆく方向です。現在の「都市建築デザインコース」の、100名前後の実定員での教育とは大きく密度を上げることが期待されます。また、長引く経済不況によるデザイン系の卒業生の就職難や18歳人口の激減期の到来などからも、少数精鋭教育が余儀なくされるといえましょう。ゆくゆくは、「建築学科」の160名も多すぎるので、さらに定員数を分け、新学科を創ろうという意見もあります。私などは、インテリア・ランドスケープ・工業・服飾デザインなどの分野も含む3~5の建築系学科による日本初の「建築芸術学部」「生活芸術学部」……をイメージしています。また環境技術系を加え、「環境生活学部」「環境芸術学部」「人間環境学部」などの名称案も考えられています。卒業生の皆様、忌憚のないご意見ご提案あれば是非お寄せ下さい。

■効果的な教育法に加え、新たな設計教育設備の充実を図る

デザインコースにおける設計教育の特徴は、なんといっても従来の設計指導に加え、プラクティス（演習）の授業時間を加えたことです。これによって2年後期以降の全ての設計時間は、従来の倍の時間をあてることになります。これは基礎的な表現力や設計法に習熟すると同時に、敷地環境の分析やアイデア・コンセプトの構築を、綿密なプログラムで指導します。本人が自主的に進めざるを得ない状態を恒常的につくり出すのです。学年によってその授業の性格は異なりますが、何よりも大切なのは、本人にやる気を起こさせるプログラムを組める余裕ができたことです。3年次から「建築デザイン専攻」と「都市デザイン専攻」に分かれますが、その比率は建築デザインが60~70%です。両専攻とも多様な授業内容で設計のバックアップが可能であり、建築のデザインの多様性からすると、このような授業は大変効果的です。この教育手法は、そのまま新学科のカリキュラムに受け継がれていきます。

また本学の設計教育設備として、八王子3号館（故武藤先生設計）および新宿高層棟の完成時以来、TVカメラの「資料提示装置」を使い、80インチ・スクリーン上でビジュアルに指導し教育効果を上げてきました。今回、新学科設立に合わせ、設計教育では世界で初めての最新式ハイビジョンカメラ・ハイビジョンプロジェクター・150インチ大型スクリーンを、それも2組セットで八王子・新宿校舎にそれぞれ設置しました。その機器費用だけでも4,000万円以上です。なお、昨年より新宿校舎9階全フロアに建築学科設計室・講評室と院生のデザイン系学生研究室・講義室がまとまるここととなりました。そこで今夏、この階をさらに有効利用のため大改装するとともに、建築学科新規開発の「昇降式パネル付き設計製図台（オカムラと共同で特許出願中）」70台の追加と、その他の家具を含め2,500万円をかけました。これらは、この後期から使用を開始します。その他、やはり同時に新設される「情報工学科」と共用ですが、マルチメディア教育のための「3Dセンター」などの設置にも、数億円単位の設備をすることがすでに決定しております。これらは今後、わが建築系学科のデザイン教育施設の目玉となり、大きな発展と期待がもてるこことなりましょう。



新宿校舎9階の設計室・講評室：新規に開発された「昇降式パネル付き設計製図台」。多目的に使用できるようパネルが上下する。

1. 平行定規使用時の一斉授業の際にはパネルを下げ教員と学生相互の視線を確保することができる。
2. パネルを高く上げると、ピンナップボードとして学生が落ち着いて設計に打ち込める。
3. パネルをさらに引き上げ、前面に倒すと模型製作テーブルや大型図面を広げられる多目的テーブルに変化する。

建築学科だより

※このページは工学院大学建築学科が NICHE 誌上を借りて最近の建築学科の様子をお知らせするページです

<ご無沙汰しています-4>

都市建築デザインコース 都市デザイン専攻

野澤康（工学院大学建築学科助教授）



■都市デザイン系スタッフ

建築学科全体が世代交代の時期を迎える中、都市デザイン系教員の顔ぶれも変化しつつあります。専任教員では、長年本学のためにご尽力されてきた中嶋泰教授がご定年で、また小嶋勝朗講師が一身上の都合により、本年3月をもって退職されました。代わって、4月に島崎勉氏が建設省建築研究所から教授として赴任されました。また、特別専任教員として、平成9年4月から石川幹子教授が着任されています。一方で、同じく特別専任教員の石田頼房教授は、来年3月に定年でご退職される予定です。

ということで本年度の専任教員は、渡辺定夫教授、島崎勉教授、石田頼房特別専任教員、石川幹子特別専任教員、そして私という5名となっています。加えて、都市環境法規他をご担当の古川公毅氏、都市社会学ご担当の渡戸一郎氏、設計科目ご担当の加藤常雄氏、鈴木崇英氏に、それぞれ兼任講師として、専任教員に不足する部分を強力にバックアップしていただいているです。

■学生の動向

学生に目を転じると、都市建築デザインコース全体で、毎年約100名の学生が入学し、2年生が終了する時点で、建築デザインに進むか都市デザインに進むかを決めます。年による変動もかなり大きいのですが、概ね30~40名が都市デザインクラスにやってきます。ここ3年間の都市デザインクラス3年生の人数は、1996年度58名、1997年度35名、1998年度16名となっています。この人数が全て都市デザイン系の研究室で卒業研究をするわけではないですし、建築学コースからも都市デザイン系の研究室で卒業研究をする学生もいるので、都市デザイン系研究室を卒業する学生数とは対応しません。都市デザイン系研究室の卒業生数（2部、修士終了者は含まない）は、1996年度42名、1997年度66名、1998年度42名（来春卒

業予定）となっています。

これだけの卒業生を送り出しているわけですが、都市デザインを学んだとしても、関連する会社に就職する学生はごくわずかです。主な就職先は、建築デザインクラス、建築学コースと何ら変わらないというのが現実です。都市計画を仕事とする地方自治体、ディベロッパー、コンサルタントなどは、もともと求人件数が少なく、さらに昨今の景気低迷の影響でその数が減っています。これについては、われわれ教員も今後、努力していかなければならないと肝に銘じているのですが、現実は相当厳しいようです。しかし、そうした状況の中で、仮に建築関係の職に就いたとしても、都市的な視野を持っていることが何からかの役に立つこともあるでしょうし、仕事には直接生かせないまでも、大半の人は都市に住むわけですから、自分が住むまちに関して一人の住民としての責任を負うわけで、近年の住民参加のまちづくりが注目される時代に地域社会で何らかの役割を果たすことも期待されるわけです。

■大学院への進学

世の中が不況になると大学院進学者が増えるのは、どこの大学でも同じようですが、近年の不況を反映して、このところ大学院進学者の数が多くなっています。大学院を社会へ出る（=大人になる？）までの猶予期間の延長を考えるのではなく、その2年間（修士の場合）に、設計にせよ、研究にせよ、学部卒では得られなかった何かを身につけようという高いこころざし、確たる問題意識を持って進学してほしいと思います。また、大学院については、社会人の受入態勢、何を教えて何を身につけさせるかといったカリキュラム上の考え方の整理など、われわれがさらなる努力をしていかなければならぬ部分もあると考えられます。

■これから

別冊で望月大介教授が書かれていますが、ここ2、3年検討を重ねてきた新学科構想がいよいよ来春実現へ向けて、現在、文部省の審査を受けている段階です。現在の都市建築デザインコースを核とした「建築都市デザイン学科」が誕生する予定です。伝統ある工学院の建築設計とともに、都市デザイン系も全面的に参画して、新たなデザイン教育を模索しながら実践していく学科であり、特に設計科目への新たなコンセプトの導入、学外実習のカリキュラムへの組み込み、コンピュータを用いたデザイン教育、入試科目の変更による受験生ターゲットの多様化などが、新たに打ち出されています。この新しい学科に注目していただくとともに、学外実習などでは実践で活躍されている卒業生の方々にもお世話になること思いますので、よろしくお願ひいたします。

都市デザインや都市計画をめぐる社会情勢は大きく変化してきています。こうした動きに敏感に反応しながら、優れた人材の育成、研究成果の社会への還元に努力していきたいと考えておりますので、よろしくご支援いただきますようお願い申し上げます。

建築学科だより

*このページは工学院大学建築学科が「NICHE 誌上を借りて最近の建築学科の様子をお知らせするページです。

<ご無沙汰しています-5>

建築学コース 構造系

近藤龍哉（工学院大学建築学科講師）



現在、構造系に所属する教員は、望月洵、広沢雅也、宮澤健二、大塚毅、久田嘉章、篠原一之、近藤龍哉の7名です。保岡豊先生、横田道夫先生、正木三省先生、十代田昭二先生、倉持道夫先生の5先生はすでに定年退職されました。残念なことに、保岡先生はご他界されましたが、他4先生は極めてお元気で大学の諸行事にご出席いただいております。

構造系研究室で卒論を行った卒業生の総数は概ね2,000名です。これは1年で65名程度が構造系の卒論を修得したことになります。一研究室の卒論生が20名を越えるような年もありました。しかし、ここ10年ほど学生の構造系離れが目立っています。今年の構造系の卒論生総数は30名程度です。年配のOB諸氏はご存知でしょうが「鬼の宮澤、蝮の坂本」などと怖がられたり、合格率30%以下と極めて厳しい構造力学（十代田先生担当）や構造計画（望月先生担当）でしたが、卒論生の数は多く、狭い研究室は学生と教員がひしめいていました。ちょっと朝寝坊して研究室の椅子取りに負けてしまった学生や、落ち着いて机に向かって卒業研究に取り組めなかった学生は骨休めに連れ立って雀荘に行っていました（ちょっと脱線）。

建築における構造の位置は、扇の要と思っています。野球で言えばキャッチャー、サッカーで言えばミッドフィルダーと思っています（手前味噌でしょうか）。面倒臭いことや、裏方的なことを嫌うのが現代青年の風潮なのか、学生の構造系離れに大いなる危機意識を感じています。きたる11月13日（金曜日）に、構造系研究室合同OB会を行います。精力的に社会の中核で活動されている構造系OB諸氏の元気を卒論生に分けていただく狙いです。

12年前ですが、八王子校地に構造実験用の大型加力実験室を作りました。実験・計測機器システムの主なものには2方向大型加力装置があります。また、新宿校舎を超高層ツインタワーに改築したとき、STEC街区強震強風振動記録システムを設置しました。

2方向大型加力装置は2,200tfmと1,100tfmの転倒モーメントに耐える直交した2枚の反力壁と±60tf・±300mmから±5tf・±200mmの性能を持つ3機の動的アクチュエータと±20tf・±200mm・50cm/secの性能を持つ高速アクチュエータ1機で構成されています。実大木造2階建て、または実大RC造3層相当構面の実験ができるような装置です。

STEC街区強震強風振動記録システムは、新宿校舎ツインタワーに37chの振動センサーおよび1機の風向風速計と12chの風圧センサーを取り付け、常時、地震・強風振動観測をする他、インターネットによる記録の公開を行っております。このシステムはOBが勤務する浅沼組、安藤建設、戸田建設、日本国土開発の協力を得て設置いたしました。4社の代表と早稲田大学曾田研究室、東京工業大学翠川研究室、本学構造系教員で委員会を構成し研究会を行っています。

構造系と言えば、1995年の阪神・淡路大震災についてお話しせねばなりません。地震発生直後、建築研究振興協会・日本建築構造技術者協会・構造調査コンサルティング協会および建築学科同窓会の援助を得て、諸団体の会員と、東京都立大学・東京理科大学・千葉工業大学・千葉大学・日本大学・芝浦工業大学・筑波大学などの協力を得て広沢先生を代表としたボランティア団体を結成しました。ボランティア活動に対して公共建物27件、集合住宅36件、延べ100棟の調査依頼があり、このうち87棟について130人のボランティアが700人日の調査を行いました。また、宮澤先生を中心とする日本建築学会の木質構造の被害調査も精力的に行われました。これらの調査記録は各依頼者に報告した他、各団体の記録として報告しました。さらに、工学院大学総合研究所の報告書「阪神・淡路大震災の被害と復興に関する調査研究」にまとめました。

地震以後、構造系の各研究室は大忙しです。木造新工法の開発研究実験、耐震診断・耐震補強に関する技術協力、耐震補強方法の開発研究実験、新素材による部材補強方法の開発研究実験、大都市圏に起こる地震被害予測などを行っています。

現在は計画段階ですが、5年後を目処にハイテクリサーチセンターを八王子校地に建設する予定です。これは建設関連会社とタイアップして新技術の研究開発を行う実験施設です。現在、大型加力実験室で行っている共同研究をより大型化し、さらに、より迅速に成果を得るために専用施設を作る計画です。OBの皆様も是非プロジェクトにご参加いただけますように、お説明申し上げます。

建築学科だより

※このページは工学院大学建築学科が「NICHE」誌上を借りて最近の建築学科の様子をお知らせするページです。

<ご無沙汰しています-6> 建築学コース 生産系

嵩英雄（工学院大学建築学科教授）



■新カリキュラムによる授業の充実と材料教育設備の拡充

生産系の研究室は昨年と変わりなく、難波研究室・嵩研究室・吉田研究室・遠藤研究室の4研究室です。

研究室は、新宿校舎25階の南側に生産研究室1（吉田）、生産研究室2（遠藤）、生産研究室3（嵩）と生産共同研究室（難波）と大学院室、24階に計測室があり、八王子校舎11号館に難波研究室と生産系実験設備があります。

難波先生は、木造軸組構造の耐震実験の一連の研究と平成5・6年度の学科主任とを終えられて少し息を抜かれたあと、また大学院運営委員をご担当になり、セメントモルタル関係と木造軸組構造の補強法の研究の他、海外出張も多く、また無機マテリアル学会・学術振興会第76委員会（建築材料）などの学協会活動にご多忙な1年でした。

吉田先生も、阪神・淡路大震災の一連の調査研究を終えられたあと、木造住宅生産供給、工業化構法、耐用設計法、グレーディングなどの研究を精力的に進められ、また日本建築学会の材料施工委員会、建築計画委員会をはじめ多数の学協会活動にご尽力されました。

遠藤先生は、助教授に昇格されて3年目になり、また平成8・9年度の建築学科の幹事を終えられて（学科の運営と教育研究に関わるさまざまな仕事を学科主任を補佐して処理する大変な激務で、ご苦労さまでした）、プロジェクトマネジメント、建築コスト、工事仕様書、東南アジアの住宅生産などの多様な研究を幅広く展開されています。

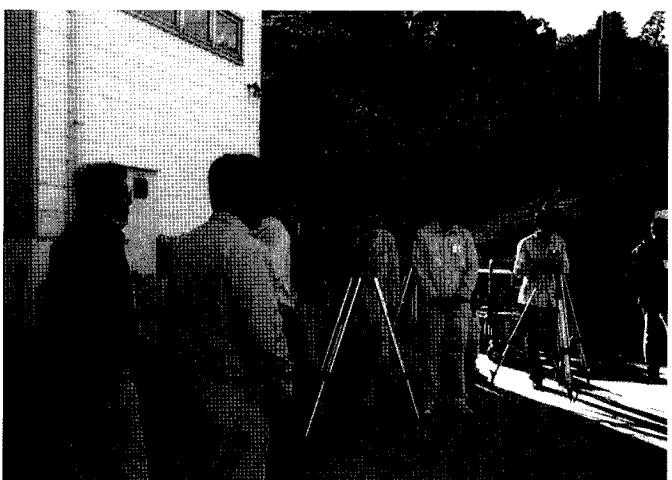
私も、本学の教授になって3年目になり、授業と卒業論文の指導など学生諸君との付き合いにも少し慣れてきましたが、震災廃棄物、再生骨材、流動化コンクリートなどの研究を本格的に進めるほか、建築学会、コンクリート工学協会、学術振興会、建設業振興基金などの学協会各種の委員会活動で多忙になりましたが、難波先生、吉田先生や非常勤講師の先生方とも委員会活動をご一緒に活動する機会も増えました。

教育面では建築材料が1年次から2年次への移行などの新カリキュラムが実施され、生産系の専門教育が充実しました。平成9年度の材料実験では、その一コマとしてトラッシュとレベルだけですが測量実習を組み込み、学生諸君から大変な好評を得ました。（写真参照）

また、建築学科の再編（新学科の設立）に伴い、八王子校舎11号館の改造と500KN万能強度試験機をはじめとする各種の材料実験用の実験機器の購入・整備を進めています。本年内に購入・設置を終えて、新学科の発足と一緒に本格的に稼働できるようにその準備を鋭意進めています。この一環として新宿校舎24階の計測室からインストロン試験機を移設したあとに、2部の建築材料の授業でも一応の材料実験ができるよう材料実験用の機器を整備する予定です。これによって、生産系の材料教育施設は大幅に拡充されることになります。



建築学コース3年生の材料実験の一コマ（鉄筋試験）



建築学コース3年生の材料実験の一コマ（測量実習）

建築学科だより

※このページは工学院大学建築学科が「NICHE」誌上を借りて最近の建築学科の様子をお知らせするページです。

会発表で大きな反響を呼び、ビル建築のペリメータ負荷軽減の手法の切札として自他ともに認知され、省エネルギー建物の実用研究で最も注目されております。

「蓄熱システムの研究」を相も変わらず続けている中島ですが、30年間続いた研究だけあって「蓄熱研究」で修論、卒論に取り組んだ卒業生数は400人を下らないはずです。これ“世界最大の蓄熱ネットワーク”です。さる7月に、図らずも蓄熱の研究開発に貢献したとして表彰されました。世界に先駆けて蓄熱理論解析に着手し実用化したこと、最も長く研究を続けているという理由のようですが、加えて言わねばならない理由は、蓄熱を研究した卒業生が業界で活躍し、COP3の京都会議の地球温暖化ガス削減目標を建築設備の面から貢献するための直接の担い手、蓄熱のプロが400人も輩出しているということです。よって、表彰されたのは「蓄熱の研究」で研究室を支えた卒業生全員のものであります。

7月23日、NHKテレビの夜7時のニュースで表彰の放送を見た卒業生から連絡がありました。蓄熱研究に限らず、水野、宇田川、足立、大橋各研究室では前述のようにこれから21世紀をリードする研究と教育を行っておりますので、卒業生諸氏も工学院大学に愛着と、所属研究室での研究と現在の仕事に自信と誇りを持って、充実した日々を送られんことを期待しております。

平成10年度の環境・設備系学生は、博士コースが3人（うち社会人入学者2人）、修士コースが13人（うち社会人入学者1人）、4年卒業研究生52人となっています。就職状況は、非常に厳しい建設業界ではありますが、21世紀を担うこれからの卒業生に、地球環境の時代と、他社との差別化など、環境・設備系に期待する所が大きく、追い風となっていることに加えて、卒業生の皆様方からの特別のご高配により、環境・設備系の学生は6月中旬にほぼ全員内定となりました。この場を借りて、卒業生先輩諸氏に厚くお礼申し上げます。

これからは、産学共同研究など、ベンチャービジネスへの新しい動きも盛んになると思われます。工学院大学でも、受託研究、共同研究を積極的に受け入れておりますし、大学院への社会人入学も進められております。

<ご無沙汰しています>

建築学コース 環境・設備系

中島康孝（工学院大学建築学科教授）



■21世紀を担う若者を育む環境・設備系の充実した研究教育の現状と発展への兆し

環境・設備系の教授陣は、専任6人と非常勤7人の計13人と変わりませんが、カリキュラムと授業内容は、地球環境時代ともいうべき21世紀の時代に即応した物の見方、解決の方法において少しずつ変化しています。けれどもどんな難問に対しても、臆することなく取り組み解決する基礎と応用能力、そして忍耐力など、厳しい時代にもめげない資質の卒業生を輩出させる教育方針は、設備工学コースの第一期生を送り出した33年前と変わらず終始一貫しております。

この一年の各先生方の研究活動、社会活動も活発で、日本建築学会、空気調和衛生工学会および日本太陽エネルギー学会をはじめ、政府関係諸機関での委員会委員長などの活躍の場で、卒業生の皆様方の目に留まつことなど多々あると思います。

「コージェネレーションシステム建築」の水野宏道教授は、コージェネによる電力・熱エネルギー供給のデータベース化に関する研究では、日本のみならず、世界的にみても他に追随を許さない成果を上げられリード役を果たされています。

「ソーラー建築における環境とシステムシミュレーションの研究」では今や第一人者として国際的にも位置づけられている宇田川光弘教授は、日本太陽エネルギー学会の副会長およびIEA（国際エネルギー機関）の日本代表の一人として活躍中であります。

「ダクト系における消音設計」の研究では、音研究者の中でも数少ない研究分野に取り組まれている足立哲夫助教授は、ユニークな設計理論を実設計に結びつけるべく展開していて、当該分野では先駆的立場に立っておりますし、卒業論文で取り組む学生の人気も高いのであります。

「エアフローウィンドウシステムの研究」における大橋一正助教授の研究成果は、日建設計の関五郎設計部長とともに学

建築学科だより

※このページは工学院大学建築学科が NICHE 誌上を借りて最近の建築学科の様子をお知らせするページです。

<ご無沙汰しています-8>

新学科設置について

望月大介（工学院大学建築学科教授／新学科設置準備委員会）



■これまでの経緯

現在の「都市建築デザインコース」が設置され8年目を迎えておりますが、すでにご承知の通り、1999年4月開講を目指して学科内では新学科準備委員会を主に、学内では企画調査室を中心に対文部省と設置に伴う煩雑な事務手続きが進められております。8月に入りまして文部省担当部署から内示があり、9月から「建築都市デザイン学科」として正式に学生募集活動が可能となり、学科としての設置許可申請手続きが順調であることを示しております。

今後に残された課題は学校法人に関わる審議会ヒヤリング」と「大学設置審査会の面接審査」がありますが、特に工学専門委員会の面接審査が学科設置認可の山場であろうかと思われます。これまでの「都市建築デザインコースの改組」の背景から、手続上、どのような問題が派生するかは未知数ですが、明るい方向へ進むのではないかと思われます。

一方、建築士資格に関連する建設省および東京都建築指導部の建築士認定手続も新たに求められ、カリキュラム、教員構成などの具体的な内容の審査を必要としますが、これらについてもよりよい認定校を目指し進めています。

■新学科の概要とデザイン教育

新学科の構成は、学生定員70名、専任教員12名（一般教育除く）、非常勤24名で開講されますが、施設・設備面では新宿校舎の設計室拡張と製図台の増設、マルチメディア教育としての3Dセンター（コンピュータ、CG）の新設、八王子校舎の材料実験室の再整備、さらに専門図書などの増冊がされる予定です。

学科名称については教室会議、新学科準備委員会などで議論の末、都市建築ではなく、建築と都市環境に関わるデザインを主軸とする教育目標を表現する名称として「建築都市デザイン学科」に落ち付きました。

新学科を設置するに当たり、その背景として現代社会の変化に伴う生活環境、広域的都市環境の質的整備が求められ、これら都市環境を含む建築に関わる人材の養成にあります。従って、これまでの総合的建築教育から建築と都市環境についての専門的能力を持った建築デザイナー、都市プランナー、コーディネーターなどの養成を目的としています。このような人材養成に必要な教育として、

- ◆建築と都市工学の融合による包括的環境造形デザイン
- ◆工学と芸術の融合による高度な技術と芸術的感性教育
- ◆マルチメディアによるデザイン思考の開発

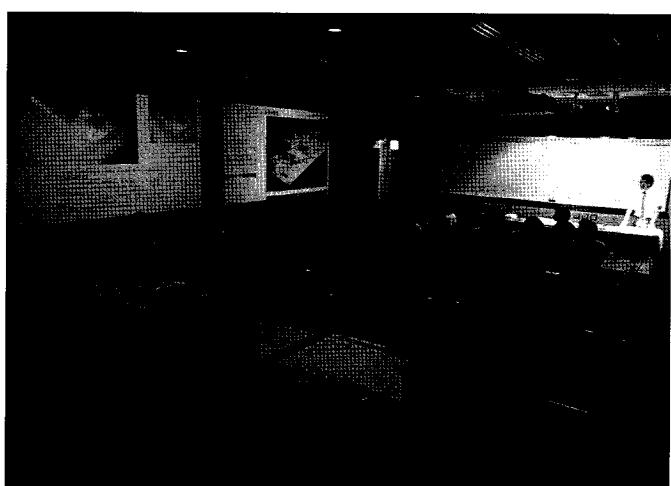
また、地区開発、町並み保存など、これまでの建築技術面での評価から文化としての建築と都市デザインに視点を置いています。一方、一般社会の国際化とともに、「建築士制度の国際化に伴う見直し」が進む中で、建築教育が欧米、アジア諸国との共通する方向性が模索され、新学科においても将来の課題であります。

これまでの美術・芸術系単科大学は別として、工学部の中でのデザイン教育はユニークであり、本学の立地からも他校にない個性豊かな学科を目指しております。

■今後について

これまで述べましたように「都市建築デザインコース」の8年間の実績を踏まえて、来春「建築都市デザイン学科」設置が予定されますが、これはこれまで大学の企画調査室を中心に、建築学科の教職員の多面にわたる支援と努力により実現しようとしています。学科組織も2学科構成となり、担当教員の振分も決まり、今後に残る課題は研究室などの配置替えであります、これらも逐次解決されると思われます。

昨今の長引く日本経済の不況による就職難、18歳人口の減少、本学受験生の偏差値低下傾向、主要専任教員の退職など、新学科の船出には必ずしも順風満帆といえませんが、建築学科設置から40余年を経て、ここに新学科誕生を迎えるに先立ち、卒業生の皆様には新学科に対しまして幅広いご理解と力強いご支援を下さいますようお願い申し上げ、ご報告といたします。



キャンパス	教員	主な研究テーマ
◆建築計画		
新宿	東正則講師	●エコロジカルなまちづくり計画手法 ●中国における農村整備手法 ●農村計画手法 ●自律的居住環境整備手法
新宿	荻原正三教授	●集落・地区の整備計画 ●南太平洋諸島の集落・住居の構成 ●コミュニティ施設の計画 ●教育文化施設の計画
新宿	木村幸弘講師	●地域施設および教育施設に関する研究 ●生産施設および商業施設に関する研究 ●余施設および厚生施設に関する研究 ●高齢者の住環境に関する研究 ●電算機利用による建築設計の手法に関する研究
新宿	宮城千城教授	●医療施設の建築計画的研究 ●地域医療施設計画 ●老人保健施設の計画に関する研究 ●精神薄弱児者施設の設計と計画 ●学校建築の計画に関する研究
新宿	安原治機教授	●住宅のデザインに関する統計的研究 ●住宅平面図データベースシステムの開発とデータベースの作成及び住宅平面図解析への応用 ●CADシステムを用いた研究 ●数理建築計画に関する基礎的研究
◆建築デザイン		
八王子	谷口宗彦教授	●都市型住宅の設計とその空間構成について ●魅力ある都市空間の考察 ●豊島区白駒周辺における活性化ケーススタディ ●インナーシティの再構築手法の研究 ●地域特性を生かした環境づくりとその方法論研究
新宿	望月大介教授	●アメリカ・コロニアル住宅デザインの研究 ●現代建築の設計手法の研究 ●建築設計手法の歴史的流れについての研究 ●現代住宅デザインの研究—建築家と作品論
新宿	山下司教授	●建築デザイン方法に関する研究 ●プレハブ住宅の開発計画に関する研究 ●都市環境のアメニティに関する研究 ●新宿の都市空間の変遷に関する研究
新宿	沢岡清秀教授	●近代・現代建築における空間構成および造形の理論的研究 ●建築家の設計意図と設計プロセスの研究 ●敷地の特性の読み解きによる設計方法論の研究 ●芸術文化施設とくに劇場・ホールの設計方法の研究 ●都市と建築をつなぐアーバンスペースの研究
新宿	南迫哲也助教授	●有機的建築(アメリカの建築家フランク・ロイド・ライト、その高弟日本の建築家遠藤新などの作品)を通じて、人間の環境としての建築と街づくりについて研究をしています。
新宿	島崎 勉教授	●都市の土地利用計画と建築群のデザイン計画 ●建物の用途規制と建築計画の関係 ●都市の総合防災計画 ●市街地の再開発に関する研究 ●都市環境保全の研究 ●都市計画における地理情報システムの活用
新宿	渡邊 定夫教授	●住宅市街地設備計画手法 ●都市住宅・住宅街区構成と空間形態 ●都市景観の秩序 ●建築団体規程と街並みの相関 ●歴史的環境設備計画論
新宿	石川 幹子教授	●環境デザイン ●公園・広場・緑道の設計 ●多自然型水辺空間の設計 ●緑の基本計画とまちづくり ●都市・環境デザインに関する歴史的研究 ●自然共生型の生態系を生かした都市計画の研究
八王子	野澤 康助教授	●密集市街地の再生と居住環境整備の手法 ●建築物の形態規則と環境条件との関係 ●都市型住宅・住宅地の将来展望 ●超高層建築物の敷地内公開空地の現状と問題点 ●まちづくりにおける市民参加の方法論
新宿	廣部達也教授	●当研究室の研究テーマは、一つには、建築を形造っている形態や空間の構成法の分析とその基礎となる建築空間論の完成です。 このような基礎理論を用いて歴史上の様々な建築論の論理構造分析も手がけています。
新宿	栗原嘉一朗教授	●公共施設(特に医療・福祉施設ならびに図書館建築)の建築計画に関する研究。
新宿	トム・ヘネガン教授	●環境デザイン ●建築設計 ●畜産研究所 ●ほたるいか博物館 ●覆屋根付橋 ●キャンプ場全体計画および学習棟など
◆都市計画		
新宿	石田頼房教授	●日本近代都市計画史に関する研究 ●都市農業と土地利用計画に関する研究 ●都市に関する言葉の研究 ●森鷗外の都市論とその時代
◆建築史		
新宿	初田亨教授	●近代建築思想史および都市史 ●都市の繁華街の成立過程に関する研究 ●日本独自の近代建築をつくってきた建築家および職人の研究 ●近代和風建築と建築技術の進歩 ●都市景観と歴史的建造物の保存
新宿	山崎弘教授	●近世民家史の研究 ●近世寺院建築本堂の研究 ●スペインにおける中世キリスト教々会堂の研究
◆建築構造		
八王子	大塚毅助教授	●建築物の補修・改修に関する力学的挙動 ●高弾性接着剤の建築への高度利用 ●炭素繊維補強と効果 ●風と構造物の相互挙動 ●萱葺屋根の耐久性
八王子	近藤龍哉講師	●柱・梁接合部の耐震補強方法の研究 ●鉄筋コンクリート部材のトラスキューブによるモデル化
新宿	篠原一之講師	●地震動と建物への入力機構について ●建物倒壊とそのメカニズムについて ●災害に強い架構の方法について ●震動の入力を最小にする方法について ●構造部材の終局耐力について
新宿	久田嘉章助教授	●地震動特性の研究(兵庫県南部地震、ロサンゼルス地震など) ●建物の地震応答解析 ●超高層建築のリアルタイム防災システムの開発
新宿	広沢雅也教授	●鉄筋コンクリート構造物の耐震性能評価: 1995年の阪神・淡路大震災で見られた中間階の崩壊や柱・梁接合部の破壊など新しいタイプの破壊も含めて好ましくないタイプの破壊を未然に防ぐための設計方法や耐震補強法に関する理論や実験研究など
新宿	宮澤健二教授	●木質構造の接合部に関する研究: 各種木質構造の接合部の開発研究と耐震力学特性の評価 ●木質住宅の耐震性: 実験・解析研究、耐震設計法の開発、耐震診断、耐震補強 ●集成材架構の研究: 面材を併用した構法と設計法の提案
新宿	望月洵教授	●動的地震荷重をうけるRC構造の破壊性状の把握と応答解析 ●韌性向上と破壊制御を目的とした耐震壁の開発 ●RC及びPCa・PC耐震壁の設計法の構築
◆建築生産		
新宿	遠藤和義助教授	●建築生産論、建築経済学、建築施工学 ●建築生産システム、調達方式の国際比較 ●在来木造住宅の地域的住宅生産システム ●建築コスト、ライフサイクルコスト ●建築現場施工の合理化、システム化
新宿	嵩英雄教授	●流動化コンクリート・高流動コンクリート ●再生骨材コンクリート ●廃棄物の再資源化 ●鉄筋コンクリート構造物の耐久性 ●特殊環境下のコンクリートの性状 ●コンクリートの施工法 ●建物の解体工法・グリーンビルディング
八王子	難波蓮太郎教授	●外壁タイル・モルタル仕上げの補修・改修技術 ●外壁仕上げ層の剥落防止のための理論的解析 ●木造軸組住宅のラスマモルタル外壁の耐震性向上 ●伝統的な漆喰に替わる新しい左官材料の開発 ●ポリマーセメントモルタルの複合材料の開発
新宿	吉田博郎教授	●住宅生産システム・生産供給組織 ●建築のライフサイクルマネジメント ●建築の評価法(用途別・構法別のBE量) ●木造住宅構法の諸問題 ●各種構法のシステム分析(特に工業化構法・ガラス構法)
◆建築環境・設備		
八王子	足立哲夫助教授	●音響等価回路をもちいた音の伝達機構の解析 ●消音器の構造特性解析と開発 ●音響要素の測定法 ●波動理論による管系の消音計画と設計法 ●数値解析による音場の特性研究および計画
新宿	宇田川光弘教授	●建築の快適性とエネルギー消費量 ●自然エネルギー利用建築 ●建築の熱性能評価 ●熱環境・エネルギー・システムシミュレーション
八王子	大橋一正助教授	●大気放射冷却システムの研究 ●多孔板空調システムの実験研究 ●エアフローウィンドウシステムの実験研究 ●空気調和システムの最適リニューアルに関する研究
新宿	中島康孝教授	●快適環境建築における蓄熱システムと有効熱利用 ●空調用蓄熱槽の性能解析 ●ソーラー建築における長期蓄熱とバッジブ手法 ●太陽光発電システムの建築計画への影響 ●21世紀都市・建築の環境、エネルギー、防災設備
新宿	水野宏道教授	●暖房用放熱器の放熱特性 ●屋外空間の局所暖房と効果 ●コージェネレーションシステム(CGS)電力・熱利用解析 ●建物の電力・熱エネルギー消費解析とデータベース化 ●空調・暖房システムの最適化

建築学科だより

このページは工学院大学建築学科が「NICHE」誌上を借りて最近の建築学科の様子をお知らせするページです。

<ご無沙汰しています-9>

就職状況

初田亨（工学院大学建築学科教授）

“とにかく厳しい”というのが、今年の就職である。

それでも工学部は良い方で、文学部になると厳しいどころではない、などという話も風の噂で聞いている。日本経済全体が思わしくなく、就職状況もそれを表しているといえよう。日本経済のことを考えると、就職が厳しいのは今年だけではなく、来年以降も続していくものと思われる。経済が右上がりの時代を終えたことを、学生の就職状況を見て実感している次第である。学生の方も、今まででは就職のために大した勉強をしないでもある程度の企業に入ることができて、のんびりと構える風潮にならされてしまっているが、これからは、もっと真剣に考えていく必要があるだろう。

今年の就職状況を見ていると、学校推薦が減って自由応募が増えた点に特徴がある。また、昨年から就職協定がなくなり、一段と就職の動きが早くなってきたことも指摘できる。某住宅メーカーなどでは、自由応募の締切を3月20日頃にしている。3月といえば、まだ4年生になってはおらず3年生である。今年の学生の動きを見ていると、2月頃から動きはじめているようである。なかには、12月頃から動いている学生もいるという。

学校推薦が減り、自由応募が増えたということは、企業の方が学生を自由に見るようにになってきたことを示している。学校推薦の効力が減ってきているのも確かである。今までに比べると、学校推薦をとって試験を受けた学生の合格率が低くなっている。企業の方でも、学歴よりも人物本位の方針を明確に打ち出しているようである。学生の実力がますます問われるようになってきたともいえよう。

就職試験では、面接を重視している所が多い。面接だけで採用が決まっている学生も多い。試験といつても、SPI適性検査だけという企業も多い。もっとも、学科試験を行っている所がまったくないわけではない。また、企業の人事を専門とする担当者から見れば、学生の基礎能力などは面接だけで十

分に見ることができるのである。SPI適性検査も、基礎能力を問う試験であるともいえる。特に、大きな企業ほど、面接だけでなく基礎能力を問う試験を行っている所が多いようである。学生諸君には、基礎能力を十分につけて就職に挑んでほしいと考えている。

自由応募が増えてきたのは確かで、私の研究室を見ても、大学院や公務員などを希望している学生を除いて、就職を希望している学生が、女子を含めて1部・2部で7人いるが、そのうち、7月までに就職の決まった学生4人を見ると、3人が自由応募で、学校推薦は1人だけである。また、女子にとって就職は特に厳しく、私の研究室の学生でも、いくつかの企業を受けているが、まだ好ましい結果を得てはいない。

ちなみに、学校推薦を希望してきている企業は6月中旬で176人と、昨年同時期の303人に比べ6割弱になっている。昨年も就職状況は決して良くなかったのに、今年はさらに急激に悪くなっていることがわかる。

学校の方も、社会の状況に対応すべく、学校推薦の時期を早めたり、学生への働きかけを早くから行っているが、必ずしも良い成果が現れていない。良い卒業生を送り出すべく、社会の変化に合わせてカリキュラムや授業の内容を改良してきてもいるが、厳しい就職状況が続いている。

就職については、卒業生の皆様にも多大なご協力をいただけで感謝しておりますが、さらに機会があれば、母校の学生に声をかけていただきたいお願いする次第であります。

建築学科だより

※このページは工学院大学建築学科が「NICHE」誌上を借りて最近の建築学科の様子をお知らせするページです。

<ご無沙汰しています-10>

入試状況

広沢雅也（工学院大学建築学科教授）



工学院大学にお世話になって早くも5年が経ち、現在、大学入試委員会委員長の大役を仰せつかっております立場から、本学および建築学科の入試の現状についてご報告し、併せて入試に関連してOB各位からご理解とご協力をお願いするものであります。

ご承知のように、わが国の18歳人口は1992年の約205万人をピークに、それ以降、漸減傾向にあるわけですが、その減少率は非常に大きく、年平均約2.5%に達しており、下限とされる約20年後の2011年には約118万人まで減少するといわれています。進学率が上昇しつつあるとはいえ、2010年には大学進学志願者の全入時代になるとされています。

こうなりますと、当然、定員割れも出てきますし、また全般的にどこの大学でも多かれ少なかれレベル低下の問題が出てきますから、この大きな衝撃となるべく緩やかにすべく、いわゆる入試戦略が注視されてきているわけです。

こうした大学受験生の減少傾向の一方で、大学院修士課程への進学希望者は急激に増えています。本学の場合、修士課程の入学定員は、1988年の総定員56名から現在では380名、10年間に6.8倍に増えていますが、在席者数も1988年の101名から1998年の421名まで、わずか10年の内に4.2倍になっています。また、修士修了生も学部卒業生に比べて、一般に履修した専門分野に関わる職種に就職できる傾向が見られます。また、企業の方も、最近は職種によっては院卒という条件付きで募集がくるケースが増えています。

工学院大学でも、このような大学院の強化の他、新学科の設立など、大学そのものの充実を図りながら、受験生の減少対策として、学科自由選択日(一つの試験を受けることにより、希望すれば全学科の併願ができる)の設定や、サテライト試験の充実(地方拠点都市から首都圏へ)などの入試改革を鋭意検討しているところです。

工学院大学の受験生総数の推移を見ますと、10年前の1988

年(2部も含め総数1万6,837人……入学定員1,160人の14.5倍)から最小だった1994年(総数1万1,893人)、最多であった1996年(総数1万8,786人)を経て、1998年には総数1万8,008人で1988年の107%、1996年の96%に至っています。この間、1991年に停止していた2部の再開(1992年は受験生最多で1,851人、受験生総数1万6,804人の11.9%)、1998年は1万8,008人中884人で4.9%)、1993年から1部後期試験の開始(1995年に後期受験生最多で1万7,390人中1,594人で9.2%)、1995年からセンター入試方式の採用開始(1998年が最多で1万8,008人中5,787人で32.1%)といった種々の入試方法を採り入れてきています。その結果、昨年は全私立大学の中で、中堅レベル校(偏差値45~55)で顕著な受験者減(12.4%)や偏差値の低下が見られた中で、本学は受験者は微減(4.0%)にとどまり、また偏差値はわずかながらアップという結果を得ています。

こうしたなかで、建築学科は1995年に新設された情報工学コースとともに、多くの受験生を集め、高い競争率を維持しています。しかしながら、最近の著しい不況が続くなかで、特に建築業界の不況から建築学科の受験生の減少や、大学受験の断念という事態すら出始めたようで、私たち関係者は非常に強い危惧を持っています。

このような条件ですので、これから2、3年は全く予断を許さないわけで、本学でも手遅れにならぬうちに、適切な対策を実施すべく、他大学と競合しない受験日の設定をはじめ、地方の受験者の掘り起こしのための地方拠点の拡大(首都圏サテライト入試)などなど種々の方策を検討しておりますが、大学としてこれまで培ってきたレベルを保ちながら、受験生を確保することの難しさに議論が百出しています。

本学建築学科OBの諸兄におかれましては、以上のような諸事情をご高察の上、センター試験、一般入試ならびに指定校推薦などに優秀な受験生を多勢、本学にご推挙いただけますようお願いする次第です。

第32期(1997年度)事業報告
第32期(1997年度)一般会計報告
第32期(1997年度)運用財産目録
会計監査報告
第33期(1998年度)事業計画
第33期(1998年度)一般会計予算

第32期(1997年度)事業報告

1. 同窓会誌『NICHE』vol.21発刊。

本年度は9,200冊を印刷。同窓生および大学建築学科教職員へ配布。

2. 各研究室OB会活動の援助。

本年度は初田研究室へ通信費として援助。

3. 名簿の編集、発刊、新会員への贈呈。

600冊の名簿を印刷。同窓生への有料配布と3月20日の大学卒業式で卒業生(新会員)へ贈呈。

4. 総会の開催。

5月25日、新宿校舎28階第1会議室にて30名の同窓会員の出席により開催。

総会後、校友会総会・講演会・懇親会へ参加。

5. 臨時総会および1997年度大交流懇親会(忘年会)の開催。

12月6日、新宿校舎1階アトリウムにて臨時総会後、同窓会員・招待者108名および在学生手伝い140名の参加により盛大に開催。

また、松風舎コンペ入賞者の表彰式にて入賞者へ賞金を授与。

6. 準会員への援助(論文・コンペ作品等への援助)。

在学生を対象にコンクール活動への援助として7名の学生に援助。

第32期(1997年度)一般会計報告

(単位:円)

科目 (収入の部)	予算額	決算額	備考・内訳
a) 会費収入	4,147,000	4,255,500	7,000円×433名 =3,031,000円 1,000円×1,216名 =1,216,000円 2名 =8,500円
b) 総会通知発送援助費	927,000	889,000	
c) 雜収入	2,400,000	1,434,000	1冊30,000円 1冊 5,000円 =37冊 1口 2,000円 =246口 1口 2,000円 =239口
(1) 同窓会名簿売上げ	500,000	215,000	
(2) 『NICHE』編集発送費	700,000	492,000	
(3) 賛助金	700,000	478,000	
(4) 大交流懇親会費	500,000	249,000	
d) 銀行利息	15,000	159,034	
(1) 普通口座		759	
(2) 定期口座		158,275	
当期収入合計(A)	7,624,000	6,737,534	前期繰越収支額内訳
前期繰越収支額	7,631,090	7,631,090	定期預金-1 6,788,796
収入合計(B)	15,255,090	14,368,624	定期預金-2 101,168 普通預金 569,807 郵便振替 0 現金 171,319

科目	予算額	決算額	備考・内訳
(支出の部)			
1) 会誌発刊費	1,390,000	1,680,856	
(1) 『NICHE』vol.19印刷費	900,000	1,208,602	雑費内訳
(2) 編集費	440,000	440,000	振込手数料
(3) 雜費	50,000	32,254	取材費
2) 各部会費	20,000	10,720	
(1) OB通信費	20,000	10,720	
3) 同窓会名簿発刊費	1,015,000	634,120	雑費内訳
(1) 印刷費	600,000	252,000	CD-ROM用ラベル代
(2) 整理費	360,000	360,000	振込手数料
(3) 郵送費	45,000	8,260	
(4) 雜費	10,000	13,860	
4) 総会費	1,940,000	2,029,224	雑費内訳
(1) 総会通知印刷費	400,000	406,029	運営委員会議代
(2) 総会通知発送費	1,440,000	1,503,200	郵送代
(3) 雑費	100,000	119,995	振込手数料 弁当代 DPEフィルム代
5) 懇親会費	1,900,000	2,246,858	懇親会費内訳
(1) 案内印刷費	200,000	193,200	会場設営費
(2) 案内発送費	800,000	774,245	屋台コンペ賞品代
(3) 懇親会費	800,000	1,053,828	弁当代
(4) 雑費	100,000	225,585	会場材料費 雑費内訳 運営委員会議代 バンドお礼 DPEフィルム代 振込手数料
6) 準会員への援助金	800,000	410,000	
		90,000	コンペ・論文への援助
		320,000	松風舎コンペ賞金
7) 本部費	100,000	60,175	運営委員会議代
			文具代
			コピー代
			発送代
			振込手数料
8) 予備費	600,000	88,227	英語弁論大会協賛金
			振込手数料
			電報・生花代
			保養施設案内版下
			振込手数料
当期支出合計 (C)	7,765,000	7,160,180	次期繰越収支差額内訳
当期収支差額 (A) - (C)	0	-422,646	三井信託銀行定期口座
次期繰越収支差額 (B) - (C)	7,490,090	7,208,444	6,000,000 三井信託銀行普通口座 第一勧業銀行普通口座 郵便振替 現金
			1 1,007,180 0 201,263

第32期(1997年度) 運用財産目録

	第32期当初	第32期末	差異
1) 三井信託銀行定期口座	6,788,796	6,000,000	-788,796
2) 三井信託銀行普通口座	101,168	1	-101,167
3) 第一勧業銀行普通口座	569,807	1,007,180	437,373
4) 郵便振替口座	0	0	0
5) 現金	171,319	201,263	29,944
合計	7,631,090	7,208,444	-422,646

会計監査報告

帳簿、領収書監査の結果、記載が正確であることを認めます。

平成10年4月14日

建築学科同窓会監査委員 高信碩文 ㊞

倉持道夫 ㊞

第33期(1998年度)事業計画

1. 同窓会誌『NICHE』vol.22発刊
2. 各研究室OB会活動の援助
3. 名簿編集・整理
4. 総会の開催
5. 大交流懇親会の開催
6. 準会員への援助(論文・コンペ作品への援助、卒業生への名簿贈呈)
7. 工学院大学校友会VISAカードの入会の呼びかけ
8. その他

第33期(1998年度)一般会計予算

科目	予算額	前年度予算額	(単位:円) 備考
(収入の部)			
a) 会費収入	3,712,000	4,147,000	(7,000円×356名) (1,000円×1,220名)
b) 総会通知発送援助費	884,400	927,000	(郵送料90円×9,160通) (印刷等援助金60,000円)
c) 年会費	900,000	700,000	前年度は『NICHE』編集発送費 3,000円×300名
d) 雜収入	1,200,000	1,700,000	
(1) 寄付金	700,000	700,000	(350口)
(2) 懇親会会費	500,000	500,000	
(3) 同窓会名簿売上	0	0	名簿は校友会にて一括販売
e) 銀行利息	100,000	150,000	
当期収入合計	6,796,400	7,624,000	
前期繰越収支差額	7,208,444	7,631,090	
収入合計(D)	14,000,844	15,255,090	
(支出の部)			
1) 会誌発刊費	1,550,000	1,390,000	
(1)『NICHE』vol.22印刷費	1,100,000	900,000	9,250冊
(2)編集費	400,000	440,000	
(3)雑費	50,000	50,000	
2) 各部会費	20,000	20,000	
(1)OB通信費	20,000	20,000	
3) 同窓会名簿整理費	370,000	415,000	
(1)印刷費	0	0	名簿は校友会にて一括販売
(2)整理費	360,000	360,000	30,000円／月×12カ月
(3)郵送費	0	45,000	
(4)雑費	10,000	10,000	
4) 総会費	1,324,400	1,940,000	
(1)総会通知印刷費	400,000	400,000	9,250冊
(2)総会通知発送費	824,400	1,440,000	140～160円×9,160名
(3)雑費	100,000	100,000	
5) 懇親会費	2,565,600	1,900,000	
(1)案内印刷費	200,000	200,000	
(2)案内発送費	1,465,600	800,000	160円×9,160名：『NICHE』同封
(3)懇親会費	800,000	800,000	
(4)雑費	100,000	100,000	
6) 準会員への援助	1,100,000	1,400,000	
(1)コンペ等援助金	800,000	800,000	
(2)同窓会名簿制作費	300,000	600,000	前年度は同窓会名簿発刊費に計上
7) 本部費	100,000	100,000	
8) 予備費	100,000	600,000	
当期支出合計(E)	7,130,000	7,765,000	
次期繰越収支差額(D)-(E)	6,874,844	7,490,090	

建築学科同窓会運営・活動費および同窓会誌『NICHE』に関する寄附金(一口 2,000円)のお願い

今回発刊されました『NICHE』22号は、従来のB5版からA4版へと誌面を拡大、特集記事や求人情報などいろいろな企画にチャレンジしよりいっそうの内容充実を心掛けました。今後、同窓会では誌面の充実をさらに目指して皆様のご期待にそえるよう、多くの諸先輩のご参加を期待しております。会員相互の活動の柱となります同窓会誌『NICHE』に忌憚のないご意見をお寄せください。

同窓会の運営や活動の主な内容である同窓会誌『NICHE』の発行については、本年度より年会費などにより運営されます。しかし、年々会員数が増加し、前回1997年21号の発刊・発送費は9,250名分としてあわせて320万円近くになっており、1998年10月末発刊を目指す22号の諸経費は、大改革に伴い大幅にアップする事が予定されています。今後発刊を継続し、皆様のお手元にお送りするのが困難な状況になっています。

本年は工学院大学校友会VISAカードによる年会費自動振込を中心に、運営及び活動費や同窓会誌の編集・発送費として年会費を集め対応することを目指していますが、これだけではまかないきれず、寄附金(一口 2,000円)をあわせて考えています。

同窓生の皆様には、この趣旨をご理解いただき、少しでも多くご援助していただきたく、何卒ご協力いただけますよう、よろしくお願ひいたします。

近年のご協力いただきました寄附金(前年度までは編集・発送費、賛助金と区別していましたが、今回より一括し、寄附金としてまとめます)の金額は下記の通りです。

1994年度	編集・発送費	554,000円	(277口)
	賛助金	766,000円	(383口) (『NICHE』19号p.33参照)
1995年度	編集・発送費	648,000円	(324口)
	賛助金	919,000円	(459.5口) (『NICHE』20号p.36参照)
1996年度	編集・発送費	566,000円	(283口)
	賛助金	490,000円	(245口) (『NICHE』21号p.38参照)
1997年度	編集・発送費	492,000円	(246口)
	賛助金	478,000円	(239口) (『NICHE』22号p.50参照)

なお、上記「寄附金」のご送金には、同封の「同窓会宛振替用紙」をご利用ください。また、お手元のカードを工学院大学校友会VISAカードに、まだ切り替えていらっしゃらない方は、年会費として4,000円をこの振替用紙でお振り込み頂けますようお願い申し上げます。

年会費は、工学院大学校友会VISAカードによる、自動引き落としになりますと、事務手続きの簡素化や、校友会活動への支援などの面から年会費は3,000円に割引になります。是非切替えて頂けますようお願い申し上げます。

工学院大学校友会会員名簿CD-ROMのご紹介

工学院大学建築学科同窓会会員の皆様へ

今回、校友会会員相互の交流促進を目的として会員名簿をCD-ROMにより発行しました。工手学校から現在までの各学校卒業生全員の名簿を整理し、校友会会員約10万人の氏名、住所、勤務先などの情報が検索できます。CD-ROM 1枚なので保存もかさばらず、毎年バージョンアップされますので買い換えれば、いつも最新情報が入手できます。お手持ちのパソコン(Windows)にてお手軽に検索ができます。

販売価格は、1998年版1枚 3,000円(別途送料)です。工学院大学校友会 STEC・VISAカードをご利用の方には、割引料金1,500円(送料込)で販売いたします。割引料金では是非ご購入下さい。このSTEC・VISAカードのお申込みは、下記社団法人工学院大学校友会にお願いいたします。このカードは、同窓会の年会費自動引き落としのために活用されています。

■Windows 3.1 またはWindows 95

■推奨動作環境:i486プロセッサ以上/メモリ16MB以上/CD-ROM ドライブ

□お申込み先:工学院大学校友会

東京都新宿区西新宿1-24-2 〒163-8677 tel.: 03-3342-2064



景気がなかなか回復せず、建築界も厳しい状況が続いているが、皆様いかがお過ごしですか。早いもので大学を卒業してから6年が過ぎましたが、学生時代の友達に相変わらず世話になり、時々大学の研究室にも足を運び力になってもらっています。CD-ROMは早速VISAカードを利用して割引価格で購入し、友達の連絡先の確認に利用しています。OBが同窓会をバックアップして在校生へも支援し、母校が発展することを希望しています。同窓会をバックアップする方法として、今回のVISAカードの申込みは社会人としては負担の少ない楽な方法だと思います。卒業生皆様の今後の活躍を祈念申し上げます。

(山崎由里子・平成4年建築学科卒業)



同窓会の先輩から実際にCD-ROMを利用してみた感想を書いてくれと頼まれました。仕事を出す時に建設会社の担当者や、役所への申請業務の際に担当者をちょっと確認するのに活用しています。校友がいるかいないか程度でも、最初の所に行く時は気持ちが随分違うものです。また改めてこんなに校友がいたのかと驚きもします。卒業後21年も経つと、消息を知るにも手間がかかることがあります。そんな時も瞬時に検索することができ役立っています。また毎年バージョンアップして最新の連絡先が確認できますので連絡もスムーズにいきます。裏方の校友会の皆さんお疲れさまです。

(加藤隆弘・昭和52年建築学科卒業)



昭和61年建築学科卒業の大野克美です。卒業してから12年が過ぎ30代になりました。最近の不景気ななかで会社のリストラや建設業界の厳しい状況のおり、卒業当初から目標にしていました独立を具体的に検討し、今春から実行しました。最初名簿の必要性を感じていませんでしたが、校友関係を振り返ってみると、いつも年賀状でつきあっている校友の範囲は狭いものです。CD-ROMには卒業生約10万人の情報が入っているので、先輩や後輩を確認して業務の展開に活用し新たな活路が開かれました。いろいろな職場に校友が奉職しているのがよくわかり便利です。数千円の価格は1回分の飲食代よりも安いですよ。

(大野克美・昭和61年建築学科卒業)



最近は、海外の友達とインターネットで連絡をとるとか、CMでは高倉健や倍賞千恵子もパソコンをいじる時代です。こういうCD-ROMも時代の流れなのだと思います。10万人のOBの情報が手元にあることは、何かと心強いと思います。事業の展開や、パートナーを求める時、または一寸専門的な情報を身近なOBに尋ねる時など十分に威力を発揮します。厳しい冬の時代を乗り切る為に、必要最低限のツールに匹敵し、同窓生の必需品になること間違いなし。もう一工夫し、同窓生全員に毎年バージョンアップして、定期的に届けて欲しいくらいです。但し、投資等の勧誘には利用されないように注意が肝心です。

(大場光博・昭和46年大学院修了)

未来を見つめて・・・・・。

—夢見た未来を実現するため、人はメディアを使ってきました。
そんな想いの力になりたいと私達は考えています。



弘和印刷株式会社

〒123-0855 東京都足立区本木南町15-17 ☎03-3880-6446 ☎03-3880-6556 e-mail.ko-p@wa2.so-net.or.jp

受講生受付中!!

●案内書無料進呈●

あなたも日建学院なら、夢に手が届く。

1・2級建築士をめざすなら、合格率が違う、日建学院へ。

*当学院入学時にエスティックカード(学院OB会カード)を提示いただけましたら、学費の割引を適用させていただきます。

聖家族教会(A・ガウディ作)

◎1級建築士輩出で毎年日本一の合格システム!!

前年度実績も驚異の高率をマーク!

1級建築士合格者占有率 70.7% (平成9年度)
日本全国の1級合格者6,977人中、4,933人は、日建学院生です。

2級建築士合格者占有率 58.7% (平成9年度)
日本全国の2級合格者15,117人中、8,869人は、日建学院生です。

学科(1次試験)の合格率!

■1級建築土学科 合格率60.1%※
■2級建築土学科 合格率88.1%※
■宅建取引主任者コースも高い合格率を誇ります!!
※印は、過去5年間の当学院基準達成者の学科試験合格率です。

開講コース案内

■1・2級建築土科(学科・設計)コース ■宅建取引主任者コース

■1・2級建築施工管理技士コース ■土地家屋調査士コース
■建築テクニカルコース

忙しい方、時間がない方のための

通信教育講座も受講生大募集中!!

■開講コース

- 1級土木施工管理技士コース
- 2級土木施工管理技士コース
- 1級造園施工管理技士コース
- 2級造園施工管理技士コース
- 1級管工事施工管理技士コース
- 2級管工事施工管理技士コース
- 2種下水道技術検定コース
- 測量士補コース

短期集中講座

自宅学習に教室学習をプラス。
資格取得を速く望まれる方に最適です。

主要都市をネットワークした全国130校・600常備教室は業界No.1の規模。

株建築資料研究社の

日建学院

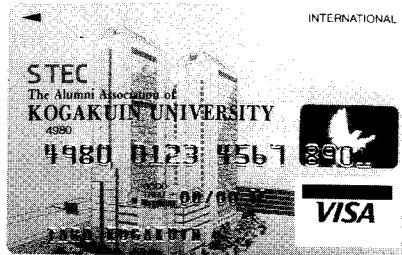
本部／東京都豊島区東池袋1-21-16
〒170-0013/日建学院ビル7F
☎03-3983-5001(代)

前年度の全国日建学院受講者数

101,024名



あの頃も、今も輝き続けている信頼がある。



世界No.1カード・VISAとの提携により輝き続ける、
工学院大学校友会VISAゴールドカード・VISAカード。
VISAならではの高い信頼と多彩なサービスをご実感いただける
エンブレムカードを、工学院大学校友会のメンバーの皆様にお届けいたします。
国内ではもちろん、海外でもきっとご満足いただける一枚。
この機会にぜひお申し込みください。

月々の市外通話料金が割引に。 **VISA市外通話割引サービス**

16~20%OFF

NTTと新電電3社(日本高速通信・日本テレコム・第二電電)の市外通話料金が利用時間帯や相手先の制限なく月々の利用額に応じて16~20%の割引になります。毎月のNTTの基本料金・市内通話料金・新電電の通話料金もまとめてカードでお支払いいただけます。
〔サービス提供会社:株式会社日本総合研究所(特別第二種電気通信事業者)〕

カードを提示するだけで
特別優待割引。

プライムクラブ

Prime Club
日本で世界で特別割引

国内50,000店の飲食店、ホテル、レンタカー、美容室、海外35都市1,500店の一流ブランド店、免税店、デパート、レストランなどで5~20%の特別割引サービスが受けられます。
(一部プレゼント特典のお店もあります)



海外・国内の旅行をもっと便利に、快適に。

VISAジャパンデスク

VISAジャパンデスクは東京を含む世界主要都市に設置。現地スタッフが常駐して日本語で最新情報案内からトラブル時の対応までサポートします。またレストラン、ゴルフ場のご予約など、出発前のご準備はVISAジャパンデスク(国内)が承ります。



◆ゴールドカードならではの特典サービス◆

ご入会資格:原則として満30歳以上・年収500万円以上・勤続年数(自営の方は営業年数)5年以上

保険サービス 保険料は弊社負担

■最高5,000万円の海外旅行傷害保険

※旅費など、事前にカードでお支払いいただかなくても本保険サービスをご用意。
※本保険は、ご加入日(カード発行日)から1ヶ月後以降に日本をご出発の旅行より対象となります。
※補償期間は1旅行あたり最長3カ月間で、ご旅行の都度適用されます。

■最高5,000万円の国内旅行傷害保険

※国内旅行傷害保険については、旅費等を、事前にカードでお支払いいただくことが前提。

■2,000万円の国内シートベルト傷害保険

◎国内シートベルトを着用して自動車に搭乗中交通事故に遭い、死亡または重度後遺障害が生じた場合に保険金が支払われます。

ゴールドデスク フリーダイヤル

国内線航空券やゴルフコースのご予約・手配、全国の提携ホテルのご予約(優待特典も含む)などをフリーダイヤルで承ります。

お買物安心保険(動産総合保険)

カードでご購入になった商品が万一破損したり盗難に遭った場合、ご購入日から90日間、年間100万円(ゴールドカード会員は年間300万円)損害を補償いたします。保険料のお支払いや事前の手続きは一切不要です。

※一部補償の対象とならない商品がございます。

法人 工学院大学校友会 VISAゴールドカード VISAカード

ご利用は計画的に。

●お問い合わせ・お申し込みは●

住友カードサービスデスク 東京 ☎ 03-3459-4711 大阪 ☎ 06-201-3633

受付時間/9:00~17:00 年中無休(ただし12/30~1/3を除く)



株式会社 住友クレジットサービス

近畿財務局長(5)第00209号

東京本社/〒105-8011 東京都港区新橋5-2-10
大阪本社/〒530-8218 大阪市北区中之島2-2-8

MUTOH

創造、大切にします

設計現場の即戦力となる人材育成には、優れた教材を使用したい。

そんな声に応えるのは、やっぱりMUTOHです。

あらゆる設計現場で、高い信頼性と

納入実績を誇るMUTOHの設計製図ツールは、

教育の現場でも活躍してくれます。

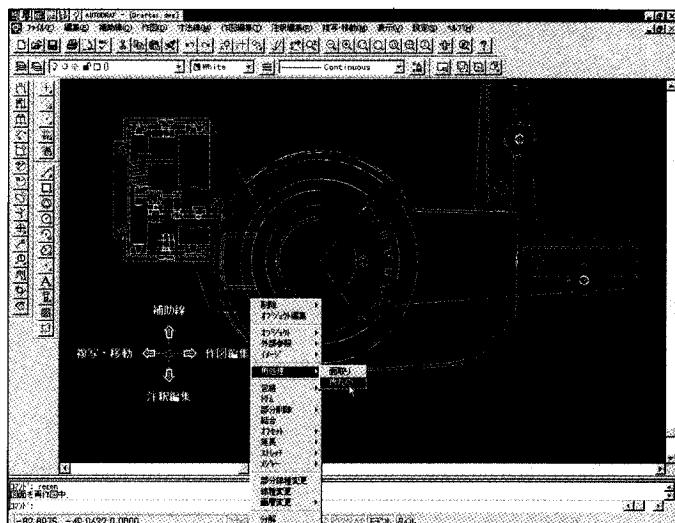
教えるのも、教わるのも、
MUTOHなら安心です。

Application Software
for Auto CAD

AUTO DRAFT
Ver. 4.0 for R14

世界標準CAD《AutoCAD》の 最新版"Release 14"に対応した 2次元汎用アプリケーション

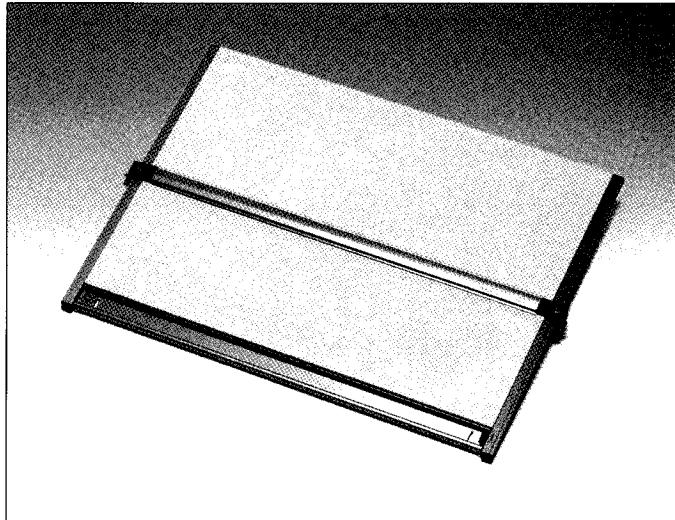
2次元製図のために、もっと使いやすく、覚えやすく、効率よく。操作性と作業効率を向上させる理想のインターフェースを実現し、初心者から熟練設計者まで、快適な設計環境を提供します。学校向け教育ツール《トレーニングキット》は機械編/建築編/電気編を用意しています。



LINER BOARD
UM-09NK

■塩ビシート圧着鋼板製図板使用■

場所を選ばず高い精度と操作性が得られる
コンパクトな平行定規、ライナーボード。
耐久性に優れ快適な操作性を提供するシ
ンクロベルト方式を採用した本格派。A1サ
イズまでの作図に対応。画面への固定は、
付属のマグネットプレートでワンタッチ。しか
も軽量・コンパクトです。簡単に持ち運びで
きますので、思いついたらそこがワークスペ
ース。アイデアを生み出す頼もしい片腕です。



武藤工業株式会社 東京都世田谷区池尻3-1-3 〒154-8560 TEL(03)5486-7143(直通) FAX(03)5486-7172

自分、超える。

—あなたの夢の実現と資格取得をサポートします—

労働大臣指定講座 [中高年齢労働者等]
受講奨励金至急対象講座



全産能連優良認定講座

1級・2級建築士養成講座 宅建講座

- 1級建築士養成講座
- 1級建築士パーフェクトコース
- 1級建築士ビクトリーコース
- 1級建築士設計製図コース
- 1級建築士短期設計製図コース

- 2級建築士養成講座
- 2級建築士学科コース
- 2級建築士設計製図コース
- 2級建築士短期設計製図コース
- 1級建築施工管理技士VTR通信講座

- 宅地建物取引主任者本科コース
- 宅地建物取引主任者必勝コース

総合資格学院・中部資格学院

—各種講座のお問い合わせは下記まで—

●札幌本校

☎060-0001 札幌市中央区北一条西2-1
札幌時計台ビル4F FREE 0120-558-749

●新宿本校

☎163-0557 東京都新宿区西新宿1-26-2
新宿野村ビル9F FREE 0120-491-959

●上野本校

☎110-0005 東京都台東区上野5-8-5
CP10ビル4F FREE 0120-370-550

●町田本校

☎194-0013 東京都町田市原町田6-28-19
フジビル98 3F FREE 0120-886-161

●横浜本校

☎221-0835 横浜市神奈川区鶴屋町2-17-1
相鉄岩崎学園ビル2F FREE 0120-045-180

●大宮本校

☎331-0852 大宮市桜木町2-292
松栄第3ビル3F FREE 0120-359-811

●千葉本校

☎260-0015 千葉市中央区富士見2-10-6
大東京火災千葉富士見ビル5F FREE 0120-666-560

●船橋本校

☎273-0005 船橋市本町5-4-2
森ビル6F FREE 0120-258-941

●中部本部

☎460-0003 名古屋市中区錦1-2-22
中部資格ビル1F FREE 0120-160-508

●岐阜本校

☎500-8384 岐阜市藤田南1-11-7
第二岐阜県ビル1F FREE 0120-160-514

●大阪本校

☎530-0001 大阪市北区梅田2-1-22
桜橋アストリアビル6F FREE 0120-492-700

●難波本校

☎542-0076 大阪市中央区難波4-7-14
リクルート難波4丁目ビル6F FREE 0120-785-591

●神戸本校

☎651-0084 神戸市中央区磯辺通3-2-17
ワールド三宮ビル5F FREE 0120-554-901

●広島本校

☎730-0051 広島市中区大手町2-8-5
野村不動産大手町ビル5F FREE 0120-509-305

●九州本部

☎812-0013 福岡市博多区博多駅東2-5-19
サンライフ第3ビル3F FREE 0120-800-850

深呼吸できる環境づくり



よりよい人間・生産環境の創造を

 朝日工業社

本社・本店 東京都港区浜松町1-25-7

T E L (03) 3432-5821

3つのヒミツ！ カラーべストの美しさを長持ち

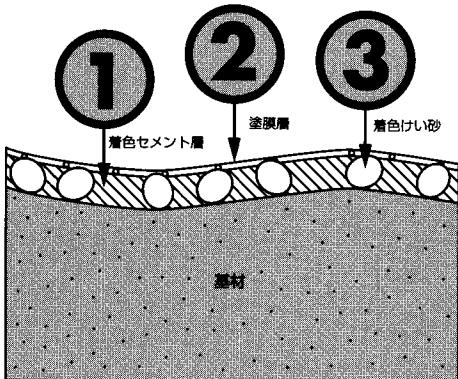
優れた耐久性で

昭和35年の発売以来、ロングセラーを続ける

クボタカラーベストシリーズ。

その実績と独自のノウハウで、

さらなる高耐候性屋根材へと進化しました。



■クボタカラーベストの断面図

① ドライ製法ならではの着色セメント層をいっそう強化、塗膜層と着色セメント層の色の差が最小限に！

着色セメント層には無機系顔料を使用。脱色することなく色合いを長期間保持します。また、塗膜層と着色セメント層の色を大幅に近づけたため、塗膜消失後も色あせ感がほとんどありません。

② 長期間、色あせしにくい高耐候性塗料を採用！

塗膜層の塗料として、従来よりさらに耐候性を高めた合成樹脂塗料を使用しています。

③ 高温焼き付けで強度を高めた着色けい砂を埋め込み！

着色セメント層に無機酸化物をコーティングしたものを高温で焼き付けた着色けい砂を埋め込んでいます。物理的・化学的な安定感が高まるので、色感が長期間保持されます。

株式会社クボタ

住宅建材事業部

●本社 〒556-8601 大阪市浪速区敷津東1-2-47 TEL.06(648)2714
●東京本社 〒103-8310 東京都中央区日本橋室町3-1-3 TEL.03(3245)3696

i イズミ

地球上に優しい水造り

高性能循環濾過機

ただ単に汚れを取って消毒しただけの水でも見た目にはきれいです。しかし、残念ながらその水が私たちにも環境にも決して良いはずはありません。

自然界の素材である麦飯石・化石サンゴを利用した濾過装置が質の良い水のリサイクルを可能にしました。プール・健康ランド・天然温泉・人口温泉・水景施設などへの濾過装置の企画・設計・製造・販売・メンテナンスまで、トータルにお客様をサポートいたします。

豊富な
ラインアップ

積層濾過装置 IZNシリーズ
温泉専用濾過装置 ALSシリーズ
海水専用濾過装置 CLSシリーズ
高速全層濾過装置 KMJシリーズ

株式会社イズミ 東京都八王子市松木32-5 〒192-0362
TEL.0426-78-1511(代) FAX.0426-78-1500

業界唯一 91省エネルギー優秀製品賞受賞

既存建物調査、耐震・耐久性診断、補強設計、講習会・見学会開催／構造物評定

strec 構造調査コンサルティング協会

Structural Research Consulting Association

協会事務局 〒101-0041 東京都千代田区神田須田町1-12山萬ビル ☎ 03-3254-8078 Fax 03-3254-8091
 構造物評定委員会 委員長 広沢雅也（工学院大学工学部建築学科教授）

strec 協会会員（五十音順）平成10年5月1日現在 協会会員を募集しております。

正会員

株アート建築構造設計事務所	☎0492-24-2000
株アール・アイ・エー	☎03-3458-0971
株I.N.A.新建築研究所	☎03-5802-3247
株アキ・アーキテクト	☎03-5411-7700
株西建築コンサルタント	☎03-5372-7830
アワーブレーン環境設計	☎03-3297-0245
株泉創建エンジニアリング	☎03-3551-5521
株A&A構造研究所	☎0263-33-7769
株工トウ	☎03-3944-1711
株N.T.T建築総合研究所	☎03-3254-6011
株N.T.Tデータ	☎03-5546-8588
株N.T.Tファシリティーズ	☎03-5444-5400
株岡本設計事務所	☎0734-26-3151
株織本匠構造設計研究所	☎03-3463-5721
株KAI建築コンサルタンツ	☎03-3769-3721
株榎建築設計事務所	☎03-3263-9851
株桂設計	☎03-3269-6411
株Q.Cコンサルタント	☎045-441-1194
株K.R建築研究所	☎045-651-4901
株建築モード研究所	☎03-3463-7665
株研設計計画研究所	☎042-523-0366
株構造計画研究所	☎03-3382-6763
株構造ソフト	☎03-5249-2151
株コンクリート診断センター	☎03-3450-2881
株佐藤総合計画	☎03-5611-7201
株サンコ一建築事務所	☎03-3683-6191

正会員

三陽補償コンサルタント	☎03-3669-2681
株四門	☎03-3265-2857
株翔建設	☎03-3357-8290
株翔建設	☎03-5410-2525
株ジャパンアセスメントオフィス	☎03-3943-1341
株相模山建築都市総合事務所	☎043-224-7392
株鈴木建築事業務所	☎03-5822-2201
株有鈴木構造設計	☎0423-25-6820
株善設計	☎03-3752-7801
株大成基礎設計	☎03-5352-6891
株高坂構造設計事務所	☎03-3476-4021
株千葉構造設計コンサルタント	☎0485-63-1573
株中央鉄	☎03-3232-7161
株テクノス	☎03-3490-4011
株中央建築研究所	☎03-3359-6151
株東京ソイルリサーチ	☎03-3463-4825
株東京自然ガス管	☎054-202-0133
株長井建築設計事務所	☎03-3972-3586
株日本基礎工業	☎03-3932-8371
株日本設計	☎03-3344-2311
株日本超音波試験	☎045-911-5191
株日本データ一サービス	☎03-3452-0165
株日本勢建築構造研究所	☎06-243-5151
株南広岡建築事務所	☎092-713-1110
株間瀬コンサルタント	☎03-5453-2611
株マカルタ設計	☎03-5687-0111

正会員

株八雲コンサルタント	☎03-3367-0890
株山下設計	☎03-5471-5581
株雄建築事務所	☎0423-88-8111
株ニバーサル設計	☎0427-44-1750
株岡建設	☎045-311-6723
株渡辺建築事務所	☎03-3987-1946
アサヒボンド工業	☎03-3972-4929
アスクテクノ工事	☎03-5443-6234
環境リサイクル	☎0426-27-2810
株ケーラーフサ	☎03-5689-5035
株建設リース	☎045-641-2371
株コンクリート	☎03-5563-9223
株コンクリート	☎06-534-7655
株サンコープ	☎03-3803-1270
株シヨネラボ	☎03-3292-8101
株ゼネラルボル	☎03-3718-6511
株創和工業	☎03-3366-2961
株第一検査工場	☎03-3796-5763
株アーテック	☎03-3736-1268
株ドライブ	☎03-3750-1211
株ムラフ	☎0492-58-7121
株明和技術	☎03-3322-4747
株ヤブ原産業	☎048-297-4111
株佛利ホームジャパン	☎03-3800-1991

既存建築物の耐震診断業務

受託実績 472件 1912棟
 評定実績 77件 493棟

平成9年度末現在

■既存建築物の耐震診断

- 耐震診断の受託
- 耐震診断に関する調査・研究及び技術指導
- 耐震診断技術者の養成

■耐震補強設計

- 耐震補強設計の受託
- 補強方法に関する調査・研究及び技術指導

■耐震診断結果及び耐震補強設計結果の審査及び評定

■耐震診断プログラムの評価

■建築物の調査

- 地盤及び基礎の調査
- 外壁・防水等の老朽化調査
- 構造部材の安全性調査
- 常時微動の測定
- 材料強度の調査

■被災建築物の耐力度調査

■調査診断関係図書・強震観測記録の頒布

■講習会・セミナー等の開催

■その他、上記の業務に関連する事業

●耐震診断委員会

委員長 園部泰寿	足利工業大学教授 工博
副委員長 広沢雅也	工学院大学教授 工博
委員 岡田恒男	芝浦工業大学教授 工博
委員 野村設郎	東京理科大学教授 工博
委員 小谷俊介	東京大学教授 工博
委員 田村正男	幡田村建築設計事務所所長
委員 堀井昌博	幡日建設計主任研究員 工博
委員 秋山友昭	幡東京ソイルリサーチ部長
委員 井上芳生	住宅・都市整備公団課長
委員 平石久廣	建設省建築研究所部長 工博
委員 上之菌隆志	同 室長
委員 清水泰	東工大附属工業高校教諭 工博

●東北耐震診断改修委員会

委員長 柴田明徳	東北大学教授 工博
副委員長 田中礼治	東北工業大学教授 工博
委員 阿部良洋	東北工業大学教授 工博
委員 井上範夫	東北大学助教授 工博
委員 小川淳二	東北大学教授 工博
委員 小野瀬順一	東北工業大学教授 工博
委員 三橋博三	東北大学教授 工博

お問い合わせ、申し込みは

社団法人 建築研究振興協会

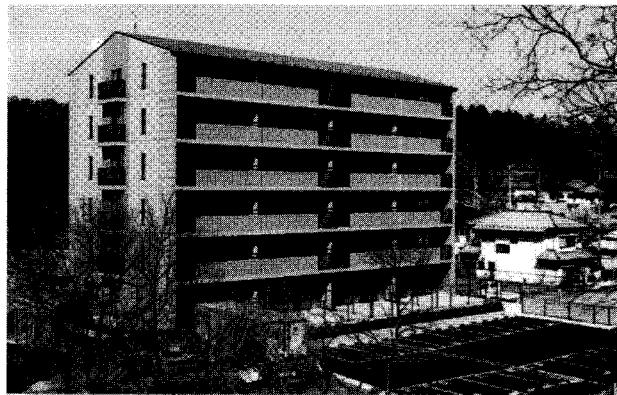
建築物調査診断センター

〒108-0014 東京都港区芝5-26-20(建築会館5階)
 TEL 03(3453)5498 FAX 03(3453)0428



協力事務所 募集

[業務内容] マンション・オフィスビル等の実施設計
[会社概要] 資本金24億1800万円
従業員数: 691人
[事業所] 本店: 大阪, 東京
支店: 横浜, 千葉, 埼玉, 名古屋

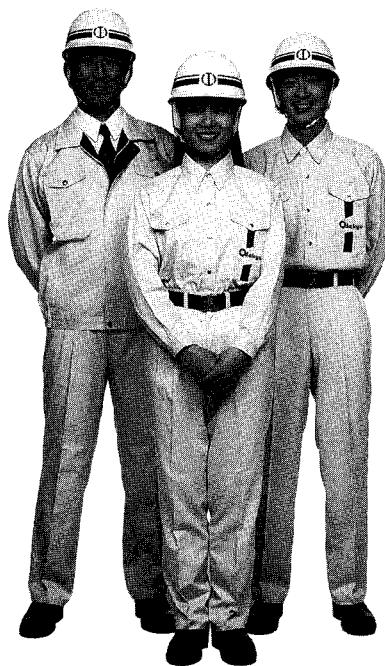


[宛先] 〒220-0004 横浜市西区北幸1-11-7
日本生命横浜西口ビル6階
高松建設株式会社
横浜支店 設計グループ
担当: 花岡 (S54年度卒)
TEL: 045-322-8101
FAX: 045-316-1417



Odakyu

子供たちの 子供たちに、誇りたい。



ビルも、道も、川も、街も、
決して、一世代だけの財産ではありません。
だからこそ、いまという時代を豊かにしながら、
次の時代にも、大きな満足を生み出せるように。
先進の技術、そして、人や自然への繊細な感性を大切にしながら、
私たち小田急建設は、子供たちの子供たちに誇れる、
そんな仕事をめざしています。

部長 戸澤 豊夫 (S40年卒工学部)
部長 中島 武夫 (S40年卒工学部)
部長 杉井 元昭 (S42年卒工学部)
部長 山崎 達雄 (S49年卒工学部)
部長 中沢 建次 (S50年卒工学部)

 小田急建設株式会社

本社: 東京都新宿区西新宿4-32-22 TEL 03-3376-3101
<http://www.odakyu-kensetsu.co.jp/>



私共は、総合的な建設コンサルタントとして、地域計画・市街地再開発計画をはじめ、環境アセスメント調査、建築設計・工事監理にわたる一貫した業務体制で、快適な都市環境の創造に取り組んでいます。



本社社屋(東京都文京区)

Institute of New Architecture Inc. 株式会社 I.N.A. 新建築研究所

本 社 : 〒112-0001 東京都文京区白山3-1-8 TEL:03-5802-3211(大代表)
支 社 : 札幌・東北・横浜・大阪・九州

NICHE 龜

工学院大学建築学科同窓会

工学院大学建築学科同窓会の会誌 NICHE は、皆様からの情報

をお待ちしております。「同窓生からの便り」「TOPICS」などの原

稿だけでなくや、身のまわりのこと、最近の建築業界のこと、大

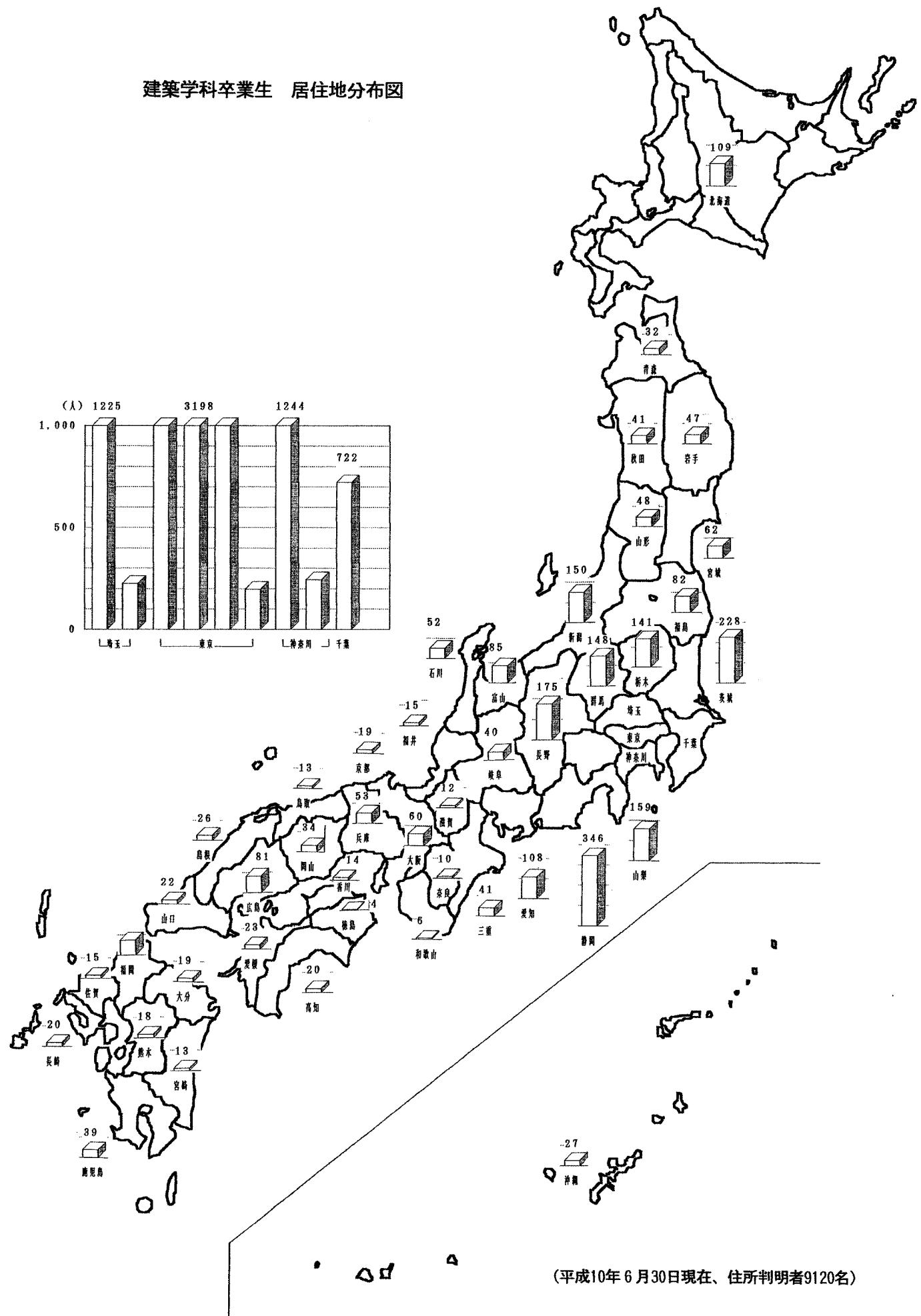
学のこと、事務所や会社の宣伝など、内容は問いません。

「こんなことを NICHE に載せて欲しい」という提案も歓迎いた
します。

↓原稿送付先・問合せ先

工学院大学建築学科同窓会
NICHE 編集部
〒163-91 東京都新宿区西新宿1-24-2

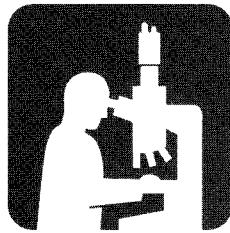
建築学科卒業生 居住地分布図



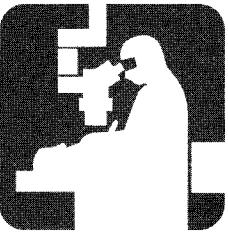
SONY



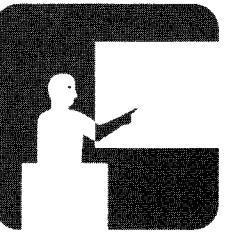
ハイビジョンカメラを
ここまで小さくしたら、
使い道がぐっと大きく広がりました。



高精細ビデオシステムによる
研究開発用に。



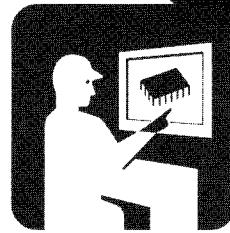
医療分野における
手術顕微鏡カメラシステムに。



映像展示、TV会議、
プレゼンテーションに。



リモートコントロールカメラとして
お天気カメラ、ステージカメラ、監視用に。

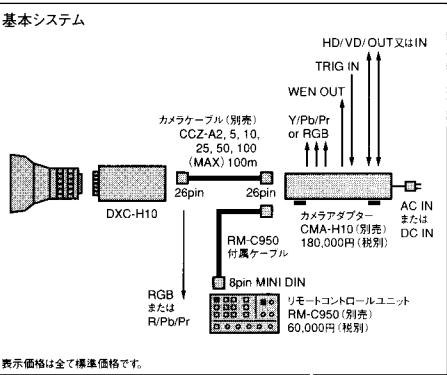


FA装置に組み入れた
チェック・検査用に。

小型軽量ながら、

200万画素3CCD、水平解像度1000本の高画質を実現。

基本システム



表示価格は全て標準価格です。

「DXC-H10」は、新開発の2/3インチIT型CCDを採用した有効画素数1920×1035、200万画素の3CCD高解像度ハイビジョンカメラです。水平解像度1000本と高画質・高精細ながら、回路のLSI化を始めとする高密度実装技術により、外形寸法95(W)×95(H)×160(D)mm、重さ1,200gと一体型ハイビジョンカメラとしてコンパクトサイズを実現。医療や産業用はもちろん、映像展示、TV会議など、これまでハイビジョンでは考えられなかった分野での活用が可能になりました。また、10段階切り替え可能な電子シャッター、長時間蓄積機能による高感度化、AE(自動

露光)機能、マスターペデスタル調整やニー調整(High/Low/Auto)など機能も充実。さらに専用カメラアダプタ「CMA-H10」と最長100mまでのケーブル接続ができ、フレキシブルなシステム運用が可能に。検査に、監視に、医療に、研究開発に、これからはこの小さなハイビジョンが活躍します。

概略仕様 ●撮像素子：2/3インチ IT型 CCD ●有効画素数：1920(H)×1035(V) ●信号方式：ハイビジョン方式(BTA規格に準拠) ●感度：F8.0 2,000 lx ●映像S/N：50dB ●最低被写体照度：16 lx(F1.4)

ソニーHD 3CCDカラービデオカメラ
DXC-H10 標準価格 2,500,000円(税別)

小型 & 高精細、ソニーの一体型ハイビジョンカメラ

●商品を安全にお使いいただくため、ご使用の前に必ず「取扱説明書」をよくお読みください。●「Digital Dream Kids(デジタル・ドリーム・キッズ)」は、ソニーの企業姿勢を表すスローガンです。
●資料をお送りいたします。ご希望の方は、最寄りの下記営業所までご連絡ください。〒108-0074 東京都港区高輪4丁目10-18 ソニー株式会社／ソニーマーケティング株式会社 情報システム営業本部

北海道営業所 (011)231-8121 東北営業所 (022)257-7830 東京営業所 (03)5792-2420 東京システム営業所 (03)5792-2437 関東営業所 (048)652-8808
新潟営業所 (025)270-3253 多摩営業所 (042)575-0201 松本出張所 (0263)25-4551 横浜営業所 (045)243-6711 千葉営業所 (043)297-8531
名古屋営業所 (052)201-6871 静岡営業所 (054)284-3601 北陸営業所 (076)240-8110 大阪営業所 (06)531-4111 京滋営業所 (075)691-7860
神戸営業所 (078)322-0851 中国営業所 (082)241-9211 四国営業所 (087)831-3003 九州営業所 (092)741-2761

Sony on line <http://www.sony.co.jp/>
【Sony on line】は、インターネット上のソニーのエレクトロニクスとエンターテイメントのホームページです。

N I C H E 龕

工学院大学建築学科同窓会誌
vol.22 1998